

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2026年3月25日

【事業年度】 第150期(自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)

【会社名】 横浜ゴム株式会社

【英訳名】 The Yokohama Rubber Company, Limited

【代表者の役職氏名】 代表取締役会長兼CEO 山石昌孝

【本店の所在の場所】 神奈川県平塚市追分2番1号

【電話番号】 (0463)63 - 0414

【事務連絡者氏名】 経理部長 小河原雅宏

【最寄りの連絡場所】 神奈川県平塚市追分2番1号

【電話番号】 (0463)63 - 0437

【事務連絡者氏名】 経理部長 小河原雅宏

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第146期	第147期	第148期	第149期	第150期
決算年月	2021年12月	2022年12月	2023年12月	2024年12月	2025年12月
売上収益 (百万円)	670,809	860,477	985,333	1,094,746	1,234,959
税引前利益 (百万円)	85,199	71,622	105,975	115,359	157,186
親会社の所有者に帰属する当期利益 (百万円)	65,500	45,918	67,234	74,919	105,398
親会社の所有者に帰属する当期包括利益 (百万円)	120,356	99,561	135,926	173,585	159,574
親会社の所有者に帰属する持分 (百万円)	525,312	614,424	739,565	893,971	1,030,851
総資産額 (百万円)	984,988	1,151,076	1,600,458	1,735,544	1,998,360
1株当たり親会社所有者帰属持分 (円)	3,275.98	3,823.47	4,600.78	5,605.46	6,536.66
基本的1株当たり当期利益 (円)	408.47	286.38	419.32	467.81	668.55
希薄化後1株当たり当期利益 (円)	407.86	285.80	418.31	466.57	666.55
親会社所有者帰属持分比率 (%)	53.33	53.38	46.21	51.51	51.58
親会社所有者帰属持分当期利益率 (%)	13.92	8.06	9.93	9.17	10.95
株価収益率 (倍)	4.51	7.19	7.71	7.27	9.00
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	68,303	39,231	159,741	94,496	135,630
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	4,479	46,357	344,015	1,392	241,298
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	55,195	35,172	205,760	63,213	68,317
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	42,523	75,572	97,613	136,215	107,391
従業員数 (人)	27,222	28,468	33,617	34,198	34,471

(注) 1 国際財務報告基準(以下「IFRS」という。)に基づいて連結財務諸表を作成しております。

2 売上収益には、消費税等は含まれておりません。

3 上記金額は、百万円未満を四捨五入して表示しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第146期	第147期	第148期	第149期	第150期
決算年月	2021年12月	2022年12月	2023年12月	2024年12月	2025年12月
売上高 (百万円)	314,549	388,816	417,875	458,857	507,443
経常利益 (百万円)	26,224	43,189	84,716	103,857	121,160
当期純利益 (百万円)	39,959	41,514	79,052	125,462	99,934
資本金 (百万円)	38,909	38,909	38,909	38,909	38,909
発行済株式総数 (千株)	169,549	169,549	169,549	169,549	166,396
純資産額 (百万円)	355,371	378,998	445,843	522,363	600,958
総資産額 (百万円)	646,873	725,594	1,089,053	1,117,155	1,294,603
1株当たり純資産額 (円)	2,216.19	2,358.45	2,773.56	3,275.37	3,810.69
1株当たり配当額 (円)	65.00	66.00	84.00	98.00	134.00
(うち1株当たり中間配当額)	(32.00)	(33.00)	(34.00)	(46.00)	(48.00)
1株当たり 当期純利益金額 (円)	249.19	258.92	493.03	783.41	633.90
潜在株式調整後 1株当たり 当期純利益金額 (円)	248.82	258.39	491.84	781.33	631.99
自己資本比率 (%)	54.94	52.23	40.94	46.76	46.42
自己資本利益率 (%)	11.84	11.31	19.17	25.92	17.79
株価収益率 (倍)	7.40	7.95	6.56	4.34	9.49
配当性向 (%)	26.08	25.49	17.04	12.51	21.14
従業員数 [外、平均 臨時雇用人員] (人)	5,257 [551]	5,399 [491]	5,480 [437]	5,562 [394]	5,559 [334]
株主総利回り (比較指標： 配当込みTOPIX) (%)	124.4 (112.7)	142.7 (110.0)	224.8 (141.1)	242.0 (169.9)	421.4 (213.2)
最高株価 (円)	2,455.0	2,382.0	3,416.0	4,177.0	6,544.0
最低株価 (円)	1,514.0	1,397.0	1,952.0	2,690.5	2,596.5

- (注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。
2 最高及び最低株価は、東京証券取引所プライム市場におけるものであります。
3 2025年12月期の1株当たり配当額134円のうち、期末配当額86円については、2026年3月27日開催予定の定時株主総会の決議事項になっています。

2 【沿革】

年月	沿革
1917年10月	横濱電線製造株式会社〔現古河電気工業株式会社〕とBF（ビーエフ）グッドリッチ社（米国）との折半出資により、タイヤ及び工業品の輸入販売等を事業目的とした「横濱護謨製造株式会社」（資本金250万円、神奈川県横浜市裏高島町（現西区））を設立。
1923年 9月	関東大震災により、神奈川県横浜市の工場の操業を中止、本社を東京市麹町区（現千代田区）に移転。
1943年 8月	三重県会郡（現伊勢市）に三重工場を建設。
1945年 4月	本社を東京都港区に移転。
1946年 3月	静岡県三島市に三島工場を建設。
1950年 4月	東京証券取引所及び大阪証券取引所市場第一部に株式を上場。
1952年 8月	神奈川県平塚市に平塚工場（現平塚製造所）を建設し、関東地方の諸工場を統合。
1961年 1月	本社ビル（浜ゴムビル）完成。
1961年10月	名古屋証券取引所市場第一部に株式を上場。
1963年10月	商号を「横浜ゴム株式会社」に変更。
1964年 6月	愛知県新城市に新城工場を建設。
1969年11月	米国にタイヤ販売会社「ヨコハマタイヤ コーポレーション」（現連結子会社）を設立。
1973年 6月	茨城県東茨城郡（現小美玉市）に茨城工場を建設。
1973年 7月	ホース関係の金属部門を分離してエイロクイップ社（米国）との合併により、「横浜エイロクイップ株式会社」〔横浜ハイデックス株式会社に社名変更後、2004年に当社と合併〕を設立。
1974年10月	広島県尾道市に尾道工場を建設。
1983年11月	スポーツ用品製造販売会社「株式会社スポーツコンプレックス」〔現株式会社プロギア（現連結子会社）〕を設立。
1986年11月	茨城県久慈郡大子町に総合タイヤテストコースを建設。
1989年 1月	北海道上川郡鷹栖町に冬用タイヤ専用テストコースを建設。
1989年10月	タイヤ製造会社「モホーク ラバー カンパニー」（米国）を買収。
1991年 4月	平塚製造所内に研究開発センタービルを建設。
1992年 7月	「ヨコハマタイヤ コーポレーション」が「モホーク ラバー カンパニー」を吸収合併。
1996年 6月	川鉄商事株式会社〔現JFE商事株式会社〕との合併により、タイヤ製造販売会社「ヨコハマタイヤ フィリピン Inc.」（フィリピン、現連結子会社）を設立。
1996年 7月	自動車用ウインド・シールド・シーラントの製造、高圧ホースと継手の組立てをする製造販売会社「ヨコハマ ラバー（タイランド）カンパニー Ltd.」（タイ、現連結子会社）を設立。
2001年12月	ユーハット社、杭州ゴム集団公司との合併により、タイヤ製造販売会社「杭州横浜輪胎有限公司〔現杭州優科豪馬輪胎有限公司〕」（中国、現連結子会社）を設立。
2002年 4月	コンチネンタル社（ドイツ）との合併により「ヨコハマコンチネンタルタイヤ株式会社」（東京都港区）を設立。
2004年 1月	ティー サイアム コマーシャル社との合併により、タイヤ製造販売会社「ヨコハマタイヤ マニファクチャリング（タイ）」（タイ、2008年に100%子会社化、現連結子会社）を設立。
2004年10月	横浜ハイデックス株式会社を吸収合併。
2005年11月	事業統括会社「横浜橡胶（中国）有限公司〔現優科豪馬橡胶有限公司〕」（中国、現連結子会社）を設立。
2006年 1月	山東躍馬膠帶有限公司と横浜橡胶（中国）有限公司〔現優科豪馬橡胶有限公司〕との合併により、コンベヤベルト製造販売会社「山東横浜橡胶工業制品有限公司」（中国、現連結子会社）を設立。
2006年 4月	横浜橡胶（中国）有限公司〔現優科豪馬橡胶有限公司〕の全額出資により、トラック・バス（TB）用スチールラジアルタイヤの製造販売会社「蘇州横浜輪胎有限公司〔現蘇州優科豪馬輪胎有限公司〕」（中国、現連結子会社）を設立。
2007年 1月	タイヤ製造販売会社「ヨコハマ・インディア Pvt. Ltd.」（インド、現連結子会社）を設立。
2008年 8月	タイヤ販売、原材料の調達等を行う「ヨコハマ アジア」（タイ、現連結子会社）を設立。
2008年12月	タイヤ製造販売会社「LLC ヨコハマ R.P.Z.」（ロシア、現連結子会社）を設立。
2009年 4月	タイに総合タイヤブルーピンググラウンド「タイヤ テストセンター オブ アジア」を建設。
	工業品販売会社「ヨコハマ工業品ヨーロッパGmbH」（ドイツ、現連結子会社）を設立。
2009年 7月	国内市販用タイヤ販売会社等19社を合併し、「株式会社ヨコハマタイヤジャパン」（現連結子会社）を設立。
2010年10月	全国の工業品販売会社 8社と横浜ゴム本社の工業品販売部門の一部機能を統合し、新たに「横浜ゴムMBジャパン株式会社」（現連結子会社）を設立。

年月	沿革
2011年12月	障がい者雇用のための特例子会社「ヨコハマピアサポート株式会社」（現非連結子会社）を設立。
2013年4月	定年退職者のための機能子会社「ヨコハマビジネスアソシエーション株式会社」（現非連結子会社）及びモータースポーツタイヤ事業会社「ヨコハマ・モータースポーツ・インターナショナル株式会社」（2017年6月に解散、旧連結子会社）を設立。
2013年5月	タイヤ製造販売会社「ヨコハマタイヤ マニュファクチャリングミシシッピ,LLC.」（米国、現連結子会社）を設立。
2014年1月	ヨコハマタイヤ東日本リトレッド株式会社及び山陽リトレッド株式会社を統合し、更生タイヤ製造販売会社「ヨコハマタイヤリトレッド株式会社」（現連結子会社）を設立。 タイヤ製造販売会社「ヨコハマタイヤ マニュファクチャリングヴァージニア LLC.」（米国、現連結子会社）を設立。
2014年4月	米国の工業品製造販売子会社の「サスラバーカンパニー」を「YHアメリカ Inc.」の傘下に入れ、「サスラバーカンパニー」は、「ヨコハマ インダストリーズ アメリカズ オハイオ Inc.」（米国、現連結子会社）に、「YHアメリカ Inc.」は、「ヨコハマ インダストリーズ アメリカズ Inc.」（米国、現連結子会社）にそれぞれ社名を変更。 海洋商品製造販売会社「PT.ヨコハマ工業品製造インドネシア」（インドネシア、現連結子会社）を設立。
2014年9月	米国パーカー・ハネフィン社からイタリアのマリンホース製造販売会社パーカーMHP社を買収。同社名を「ヨコハマ工業品イタリア S.R.L.」（イタリア、現連結子会社）に変更。
2015年1月	当社スポーツ事業部門を当社の連結子会社である株式会社プロギア（現連結子会社）を承継会社とする吸収分割（簡易分割）。 不二精工株式会社（本社：岐阜県羽島市）のタイヤビード専門会社「亀山ビード株式会社」（現連結子会社）を買収。
2015年4月	タイヤ・工業製品用原材料の調達販売会社「ヨコハマラバー シンガポール PTE. Ltd.」（シンガポール、現連結子会社）を設立。
2016年1月	北海道旭川市に冬用タイヤテストコース「北海道タイヤテストセンター」を建設。
2016年3月	2002年4月に締結したコンチネンタル社（ドイツ）との合弁契約解消により関連会社「ヨコハマコンチネンタルタイヤ株式会社」（東京都港区）を解散。
2016年7月	農業機械用・産業車両用・建設車両用・林業機械用タイヤ等の製造販売会社「Alliance Tire Group」各社の持株会社である「Alliance Tire Group B.V.」（本社：オランダ）を買収。
2016年9月	米国ノースカロライナ州にタイヤ開発研究センターを設立。
2017年3月	産業車両用タイヤ会社「愛知タイヤ工業株式会社」（愛知県小牧市、現連結子会社）を買収。
2017年6月	2013年4月に設立したモータースポーツタイヤ事業会社「ヨコハマ・モータースポーツ・インターナショナル株式会社」を解散。
2017年12月	子会社の株式の所有を目的とする「アライアンス・タイヤ・グループ株式会社」（現連結子会社）を設立。
2020年10月	浜ゴム不動産株式会社を吸収合併。
2021年11月	ハマタイト事業を会社分割（吸収分割）の方法により新会社に継承し、スイスに本社を置くスペシャリティ・ケミカルカンパニーSika AGに譲渡。
2022年4月	東京証券取引所の市場区分の見直しにより市場第一部からプライム市場へ移行。
2022年11月	ヨコハマゴム・ファイナンス株式会社を吸収合併。
2023年3月	本社を神奈川県平塚市に移転。
2023年5月	農機・産業用タイヤの製造販売会社「Trelleborg Wheel Systems Holding AB」（本社：スウェーデン）を買収。
2025年2月	建設・鉱山用車両向けタイヤなどの生産販売をグローバルに展開するGoodyear社のOTR事業（OTR=オフザロードタイヤ）を買収。

3 【事業の内容】

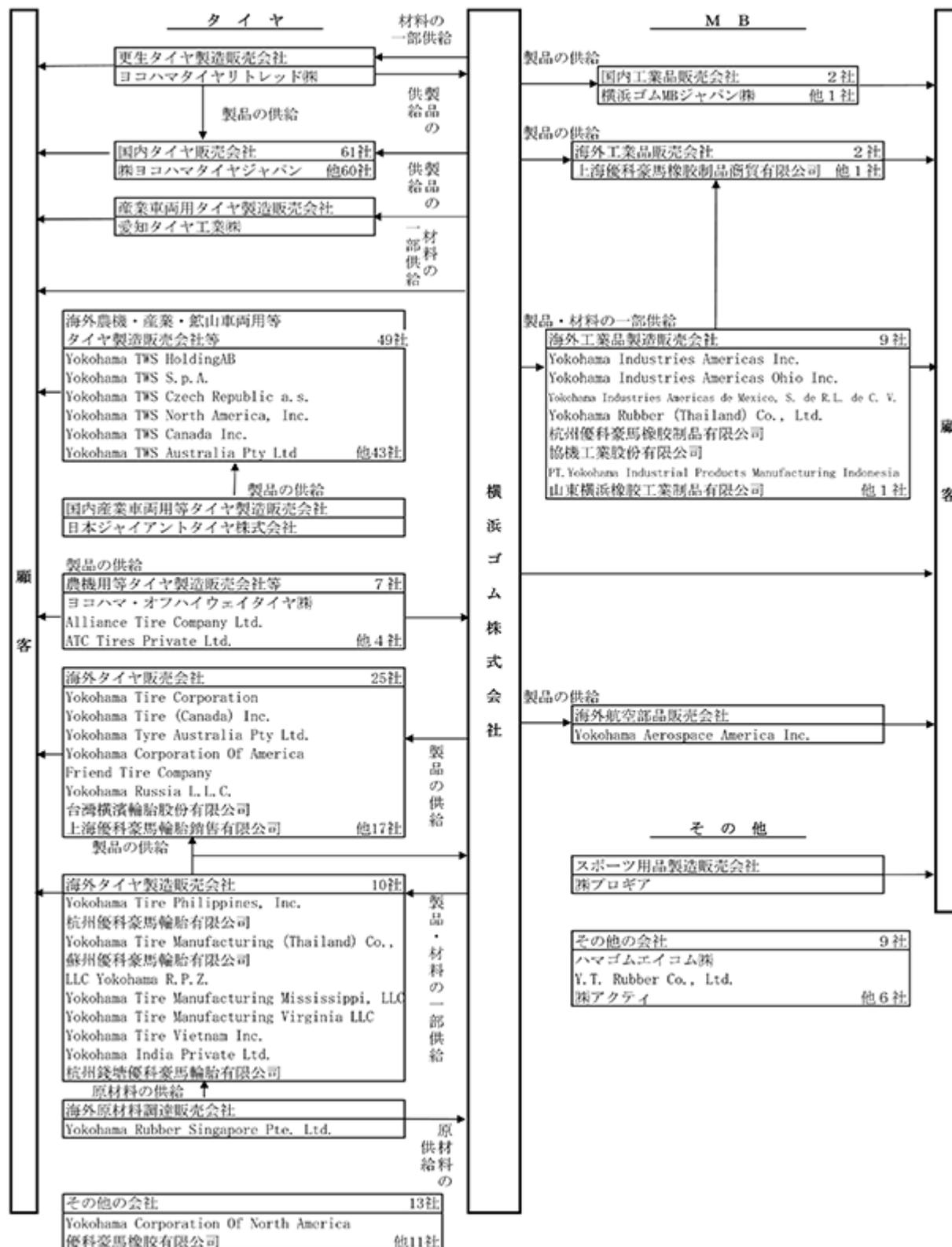
当社グループ(当社及び関係会社)は、当社及び子会社158社、関連会社35社で構成され、当社グループが営んでいる主な事業の内容と事業を構成している各関係会社の当該事業における位置づけは次のとおりであります。

なお、以下の3事業は「第5 経理の状況 1(1)連結財務諸表 連結財務諸表注記」に掲げるセグメント情報におけるセグメントの区分と同一であります。

事業	主要製品	区分	国内	海外
タイヤ	乗用車用、トラック・バス用、小型トラック用、農業機械用、産業車両用、鉱山・建設車両用、林業機械用などの各種タイヤ、チューブ、アルミホイール、自動車関連用品	主要製造販売会社	当社 愛知タイヤ工業㈱ 日本ジャイアントタイヤ株式会社 YTMX Japan合同会社 (更生タイヤ) ヨコハマタイヤリトレッド㈱	Yokohama Tire Philippines, Inc. 杭州優科豪馬輪胎有限公司 Yokohama Tire Manufacturing (Thailand) Co., Ltd. 蘇州優科豪馬輪胎有限公司 LLC Yokohama R.P.Z. Yokohama Tire Manufacturing Mississippi, LLC Yokohama Tire Vietnam Inc. Yokohama Tire Manufacturing Virginia LLC Yokohama India Private Ltd. Alliance Tire Company Ltd. ATC Tires Private Ltd. ATC Tires AP Pvt. Ltd. Yokohama TWS S.p.A. Yokohama TWS Czech Republic a.s. Yokohama TWS North America, Inc. 他12社
		主要販売会社	㈱ヨコハマタイヤジャパン 他60社	Yokohama Tire Corporation 他57社
		その他	ヨコハマ・オフハイウェイタイヤ㈱ 浜ゴムエンジニアリング㈱ 他4社	Yokohama Corporation Of North America 他12社
MB	コンベヤベルト、各種ホース、防舷材、オイルフェンス、マリンホース、航空部品	主要製造販売会社	当社	Yokohama Industries Americas Inc. Yokohama Industries Americas Ohio Inc. 協機工業股份有限公司 Yokohama Rubber (Thailand) Co., Ltd. 杭州優科豪馬橡膠制品有限公司 Yokohama Industries Americas de Mexico, S. de R.L. de C. V. PT.Yokohama Industrial Products Manufacturing Indonesia 山東横浜橡膠工業制品有限公司 他1社
		主要販売会社	横浜ゴムMBジャパン㈱ 他1社	上海優科豪馬橡膠制品商貿有限公司 Yokohama Aerospace America Inc. 他1社
その他	スポーツ用品、情報処理サービス等		㈱プロギア ハマゴムエイコム㈱ 他7社	Y.T. Rubber Co., Ltd.

事業の系統図は、次のとおりであります。

(事業系統図)



(注) その他の会社は、主にグループ内におけるサービスの提供、持株会社機能等を有しております。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容			
					役員の 兼任等	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借状況
(株)ヨコハマタイヤジャパン	東京都港区	490	タイヤ	91.0	あり	なし	当社製品の 販売先	土地・建物・設 備の一部を賃貸
茨城ヨコハマタイヤ販売(株)	茨城県水戸市	60	"	1 45.0	"	"	"	土地・建物の一 部を賃貸
新潟ヨコハマタイヤ(株)	新潟県新潟市	40	"	1 50.0	"	"	"	なし
鹿児島ヨコハマタイヤ(株)	鹿児島県 鹿児島市	90	"	1 50.0	"	"	"	"
沖縄ヨコハマタイヤ(株)	沖縄県島尻郡	25	"	1 40.0	"	"	"	"
札幌ヨコハマタイヤ(株)	北海道小樽市	10	"	1 50.0	"	"	"	"
(株)ワイエフシー	神奈川県平塚市	105	"	100.0	"	"	"	土地・建物の一 部を賃貸
ヨコハマタイヤリトレッド(株)	広島県尾道市	210	"	100.0	"	"	原材料の供 給	土地・建物・設 備の一部を賃貸
亀山ビード(株)	三重県亀山市	10	"	100.0	"	"	当社製品の 部材の加工	設備の一部を 賃貸
愛知タイヤ工業(株)	愛知県小牧市	98	"	100.0	"	"	原材料の供 給	なし
浜ゴムエンジニアリング(株)	神奈川県平塚市	80	"	100.0	"	"	当社生産設 備の製作・ 保全	建物・設備の一 部を賃貸
浜ゴム物流(株)	神奈川県平塚市	20	"	100.0	"	"	当社製品の 配送手配	建物の一部を 賃貸
ヨコハマモールド(株)	茨城県小美玉市	460	"	100.0	"	"	当社製品の 金型の製 作・調達	なし
Yokohama Tire Corporation	米国 カリフォルニア州	30.02百万 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	"	当社製品の 販売先	"
Yokohama Tire (Canada) Inc.	カナダ ブリティッシュ コロンビア州	250万 加ドル	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
Yokohama Corporation of America	米国 カリフォルニア州	16.17百万 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	"	なし	"
Yokohama Corporation of North America	米国 カリフォルニア州	89.72百万 米ドル	"	100.0	"	あり	"	"
Yokohama Tire Manufacturing Mississippi LLC.	米国 ミシシッピ州	425.75百万 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	なし	当社製品の 製造	"
Yokohama Tire Manufacturing Virginia LLC.	米国 バージニア州	90.75百万 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
Yokohama Tire Mexico S. De R.L. De C.V.	メキシコ グアナファト州	3万 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	"	当社製品の 販売先	"
Yokohama Tyre Australia Pty.,Ltd.	オーストラリア ニューサウス ウェールズ州	400万 豪ドル	"	100.0	"	"	"	"
Yokohama Europe GmbH	ドイツ デュッセルドルフ	151万 ユーロ	"	100.0	"	"	"	"
Yokohama (Suisse) S.A.	スイス チューリッヒ	40万 スイスフラン	"	100.0 (100.0)	"	あり	"	"
Yokohama Scandinavia AB	スウェーデン ストックホルム	200万 スウェーデン クローネ	"	100.0 (100.0)	"	なし	"	"
Yokohama H.P.T. Ltd.	イギリス ミルトンキーンズ	36.45万 ポンド	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容			
					役員の 兼任等	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借状況
Yokohama Iberia S.A.	スペイン マドリッド	100万 ユーロ	タイヤ	100.0 (100.0)	あり	なし	当社製品の 販売先	なし
Yokohama France S.A.S.	フランス ジェナス	22.5万 ユーロ	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
Yokohama CEE Spółka z.o.o.	ポーランド ワルシャワ	10千 ポーランド ズロチ	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
Yokohama Tire Sales Philippines, Inc.	フィリピン マカティシティ	86.61百万 比ペソ	"	100.0	"	"	"	"
Yokohama Tire Philippines, Inc.	フィリピン クラーク 特別経済区	52億 比ペソ (117.5百万 米ドル)	"	100.0	"	"	当社製品の 製造	"
台灣橫濱輪胎股份有限公司	中華民国 台北市	12百万 新台幣ドル	"	75.0	"	"	当社製品の 販売先	"
杭州優科豪馬輪胎有限公司	中華人民共和国 浙江省	314.49百万 元	"	100.0 (100.0)	"	"	当社製品の 製造	設備の一部を賃 貸
蘇州優科豪馬輪胎有限公司	中華人民共和国 江蘇省	1,394.59百万 元	"	100.0 (100.0)	"	"	"	なし
優科豪馬橡膠有限公司	中華人民共和国 上海市	1,917.25百万 元	"	100.0	"	"	なし	"
上海優科豪馬輪胎銷售 有限公司	中華人民共和国 上海市	103.61百万 元	"	100.0 (100.0)	"	"	当社製品の 販売先	"
Yokohama Russia LLC	ロシア モスクワ	11.88億 ルーブル	"	100.0	"	"	"	"
LLC Yokohama R.P.Z.	ロシア リベツク州	56.91億 ルーブル	"	100.0 (0.0)	"	"	当社製品の 製造	"
Yokohama Tire Sales (Thailand) Co.,Ltd.	タイ バンコク	2億 バーツ	"	100.0	"	"	当社製品の 販売先	"
Yokohama Tire Manufacturing (Thailand) Co.,Ltd.	タイ ラヨン県	58.87億 バーツ	"	100.0	"	"	当社製品の 製造	"
Yokohama Mold (Thailand) Co., Ltd.	タイ ラヨン県	97百万 バーツ	"	100.0 (100.0)	"	"	当社製品の 金型の製 作・調達	"
Yokohama Tyre Vietnam Inc.	ベトナム ピンズオン省	183,974.60 百万 ベトナムドン	"	100.0	"	"	当社製品の 製造及び 販売先	"
Yokohama India Private Limited	インド ハリアナ州	3,924.24百万 インドルピー	"	100.0	"	あり	"	"
Yokohama Asia Co., Ltd.	タイ バンコク	10百万 バーツ	"	100.0	"	なし	マーケティ ングサービ スの委託、 資金の調達	"
Yokohama Tire Korea Co., Ltd.	韓国 ソウル	300百万 ウォン	"	100.0	"	"	当社製品の 販売先	"
Yokohama Tyre Sales Malaysia Sdn. Bhd.	マレーシア セランゴール州	10百万 マレーシア リングギット	"	51.0	"	"	"	"
Yokohama Tyre Sales Vietnam Co., Ltd.	ベトナム ホーチミン	71,700百万 ベトナムドン	"	100.0	"	"	"	"
YOKOHAMA Pneumatici S.r.L	イタリア ミラノ	100千 EUR	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
Yokohama Tire Mexico Real Estate SA DE CV.	メキシコ コアウイラ州	100百万 米ドル	"	100.0 (0.0)	"	"	なし	"
杭州錢塘優科豪馬輪胎有限公 司	中華人民共和国 浙江省	1,430百万 元	"	100.0	"	"	当社製品の 製造	"
Yokohama Tire Manufacturing Mexico S.A. DE C.V.	メキシコ コアウイラ州	2百万 米ドル	"	100.0 (0.0)	"	"	なし	"

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容			
					役員の 兼任等	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借状況
YTMX Japan合同会社	神奈川県平塚市	0	タイヤ	100.0	なし	なし	当社製品の製造	なし
Yokohama Rubber Singapore Pte. Ltd.	シンガポール	2,000万 米ドル	"	100.0	あり	"	当社製品の原材料の調達・販売	"
ヨコハマ・オフハイウェイタイヤ(株)	神奈川県平塚市	0	"	100.0	"	"	なし	"
Alliance Tire Company Ltd.	イスラエル ハイファ地区	150 新シェケル	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
ATC Tires Private Ltd.	インド マハーラーシュトラ 州	1,346百万 インドルピー	"	100.0 (100.0)	"	"	当社製品の製造及び販売先	"
Alliance Tire Europe B.V.	オランダ 北ホラント州	18千 ユーロ	"	100.0 (100.0)	"	あり	なし	"
Yokohama Off-Highway Tires America Inc.	米国 マサチューセッツ州	1 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	なし	当社製品の販売先	"
ATC Tires AP Private Ltd.	インド アンドラプラデシュ 州	4,660百万 インドルピー	"	100.0 (100.0)	"	あり	なし	"
Yokohama TWS Holding AB	スウェーデン マルメ	100千 スウェーデン クローネ	"	100.0	"	なし	"	"
Yokohama TWS S.p.A.	イタリア ラツィオ州	1,043千 ユーロ	"	100.0 (100.0)	"	"	商標使用許諾	"
Yokohama TWS Czech Republic a.s.	チェコ共和国 プラハ	1,966百万 チェココルナ	"	100.0 (100.0)	なし	あり	"	"
Yokohama TWS North America, Inc.	米国 デラウェア州	64百万 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	なし	"	"
Yokohama TWS Brazil Industria e Comercio de Borrachas e Polimeros Ltda.	ブラジル バイーア州	214.8百万 レアル	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
Yokohama TWS Australia Pty Ltd	オーストラリア ビクトリア州	60百万 豪ドル	"	100.0 (100.0)	"	あり	なし	"
Yokohama TWS Luxembourg S.à r.l.	ルクセンブルク ピッツェン	100千 ユーロ	"	100.0 (100.0)	"	なし	商標使用許諾	"
Yokohama TWS Romania S.R.L.	ルーマニア メヘディンティ	10千 ローレウ	"	100.0 (100.0)	"	"	なし	"
Yokohama Earthmover Pty Ltd	オーストラリア ニューサウス ウェールズ州	7百万 豪ドル	"	100.0 (100.0)	"	"	商標使用許諾	"
日本ジャイアントタイヤ(株)	兵庫県たつの市	1,300	"	100.0	あり	"	なし	"
横浜ゴムMBジャパン(株)	東京都港区	168	M B	100.0	"	"	当社製品の販売先	土地・建物・設備の一部を賃貸
(株)古沢商会	北海道北広島市	20	"	100.0 (100.0)	"	"	"	なし
Yokohama Industries Americas Inc.	米国 ケンタッキー州	737万 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	"	当社製品の製造	"
Yokohama Industries Americas Ohio Inc.	米国 オハイオ州	400万 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
Yokohama Industries Americas de Mexico, S. de R.L. de C. V.	メキシコ アグアスカリエンテ ス州	1,550万 米ドル	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
協機工業股份有限公司	中華民国 桃園県	249百万 新台幣ドル	"	1 49.0	"	"	"	"
Yokohama Rubber (Thailand) Co.,Ltd.	タイ ラヨン県	120百万 バーツ	"	79.8	"	"	"	"
山東横浜橡胶工業制品有限公司	中華人民共和国 山東省	154.53百万 元	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容			
					役員の 兼任等	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借状況
Yokohama Aerospace America Inc.	米国 ワシントン州	50万 米ドル	M B	100.0	あり	なし	当社製品の 販売先	なし
上海優科豪馬橡胶 制品商贸有限公司	中華人民共和国 上海市	4.85百万 元	"	100.0 (100.0)	"	"	"	"
Yokohama Industrial Products Asia-Pacific Pte. Ltd.	シンガポール	112.5万 米ドル	"	100.0	"	"	"	"
杭州優科豪馬橡胶 制品有限公司	中華人民共和国 浙江省	300.11百万 元	"	100.0 (100.0)	"	"	当社製品の 製造	"
PT. Yokohama Industrial Products Manufacturing Indonesia	インドネシア バタム島	24.5百万 米ドル	"	100.0 (1.0)	"	あり	"	"
ハマゴムエイコム(株)	神奈川県横浜市	100	その他	100.0	"	なし	当社の計算 業務の一部 請負	建物の一部を賃 貸
(株)プロギア	神奈川県平塚市	95	"	100.0	"	"	なし	"
Y.T.Rubber Co.,Ltd.	タイ スラタニ県	100百万 バーツ	"	95.0	"	"	当社製品の 原材料の加 工	なし
その他66社								

- (注) 1 「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報の名称を記載しております。
- 2 上記のうち、(株)ヨコハマタイヤジャパン、Yokohama Tire Corporation、Yokohama Corporation of North America、Yokohama Tire Philippines, Inc.、杭州優科豪馬輪胎有限公司、Yokohama Tire Manufacturing (Thailand) Co., Ltd.、優科豪馬橡胶有限公司、LLC Yokohama R.P.Z.、蘇州優科豪馬輪胎有限公司、Yokohama Tire Manufacturing Mississippi LLC.、Yokohama Tire Manufacturing Virginia LLC.、Yokohama Industries Americas Inc.、Yokohama India Private Limited、杭州優科豪馬橡胶制品有限公司、Alliance Tire Company Ltd.、ヨコハマ・オフハイウェイタイヤ(株)、ATC Tires AP Private Ltd.、Yokohama TWS HoldingAB、Yokohama TWS Czech Republic a.s.、Yokohama TWS North America, Inc.、Yokohama TWS Brazil Industria e Comercio de Borrachas e Polimeros Ltda.、Yokohama TWS Australia Pty Ltd、Yokohama Tire Mexico Real Estate SA DE CV、杭州錢塘優科豪馬輪胎有限公司、Yokohama TWS Luxembourg S.à r.l.、Yokohama TWS Romania S.R.L.は特定子会社であります。
- 3 有価証券届出書または有価証券報告書を提出している会社はありません。
- 4 1：持分は100分の50以下ではありますが、実質的に支配しているため子会社としたものであります。
- 5 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。
- 6 (株)ヨコハマタイヤジャパン及びYokohama Tire Corporationについては、売上収益(連結会社相互間の内部売上収益を除く)の連結売上収益に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等

(株)ヨコハマタイヤジャパン

(1) 売上収益	184,900 百万円
(2) 税引前利益	4,858 百万円
(3) 当期利益	3,385 百万円
(4) 資本合計	9,903 百万円
(5) 資産合計	106,900 百万円

Yokohama Tire Corporation

(1) 売上収益	195,461 百万円
(2) 税引前利益	3,671 百万円
(3) 当期利益	2,602 百万円
(4) 資本合計	91,229 百万円
(5) 資産合計	193,430 百万円

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

(2025年12月31日現在)

セグメントの名称	従業員数(人)
タイヤ	30,117
M B	3,260
その他	1,094
合計	34,471

(注) 従業員数は、当社グループへの出向者を含む就業人員数であります。

(2) 提出会社の状況

(2025年12月31日現在)

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
5,559 (334)	41.1	17.4	6,928

セグメントの名称	従業員数(人)
タイヤ	3,980 (240)
M B	1,204 (81)
その他	375 (13)
合計	5,559 (334)

- (注) 1 従業員数は、他社から当社への出向者を含む就業人員数であります。
 2 従業員数欄の(外書)は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
 3 臨時従業員には、季節工及びパートタイマーを含み、派遣社員を除いております。
 4 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

当社には1946年に結成された労働組合があり、ユニオン・ショップ制で、主に全日本ゴム産業労働組合総連合を上部団体としております。

2025年12月末現在の組合員数は 5,136名であります。組合とは円満に労使間協調を保っております。

なお、組合組織をもつ連結子会社が一部ありますが、労使関係は良好であります。

(4) 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

提出会社

当事業年度				
管理職に占める女性労働者の割合(%) (注1)	男性労働者の育児休業取得率(%) (注2)	労働者の男女の賃金の差異(%) (注1)		
		全労働者	正規雇用労働者	パート・有期労働者
3.5	100.7	75.4	78.0	66.8

(注) 1. 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。男女賃金差異が生じておりますが、人事・処遇制度は男女平等に設計・運用しており、当該差異は労務構成から生じている賃金差です。

2. 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の6第2号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。

連結子会社(注1)

当事業年度					
名称	管理職に 占める 女性労働者 の割合(%) (注2)	男性労働者の 育児休業 取得率(%) (注3)	労働者の男女の 賃金の差異(%) (注2)		
			全労働者	正規雇用 労働者	パート・ 有期労働者
株式会社ヨコハマタイヤジャパン	0.2	18.8	75.0	73.2	85.8
横浜ゴムMBジャパン株式会社	5.5	66.7	68.5	71.2	57.9
愛知タイヤ工業株式会社	0.0	0.0	74.7	72.0	83.2
亀山ビード株式会社	0.0	50.0	68.9	73.4	49.7
ヨコハマモールド株式会社	11.1	100.0	89.2	87.2	31.7
浜ゴム物流株式会社	15.8	0.0	69.0	81.5	55.2
ハマゴムエイコム株式会社	2.9	275.0	83.3	83.3	

- (注) 1. 連結子会社のうち、常時雇用する労働者が101人以上の国内連結子会社を全て記載しております。それ以外の国内連結子会社については「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)及び「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定による公表義務の対象ではないため、記載を省略しております。
2. 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。男女賃金差異が生じておりますが、人事・処遇制度は男女平等に設計・運用しており、当該差異は労務構成から生じている賃金差です。なお「」表示は対象者なしを示しております。
3. 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の6第2号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。なお「」表示は対象者なしを示しております。

提出会社・国内連結子会社グループ(注1)

当事業年度				
管理職に 占める 女性労働者 の割合(%) (注2)	男性労働者の 育児休業 取得率(%) (注3)	労働者の男女の 賃金の差異(%) (注2)		
		全労働者	正規雇用 労働者	パート・ 有期労働者
2.6	95.8	71.7	73.1	68.8

- (注) 1. 上記及びの合計を記載しております。
2. 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。男女賃金差異が生じておりますが、人事・処遇制度は男女平等に設計・運用しており、当該差異は労務構成から生じている賃金差です。
3. 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の6第2号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 経営の基本方針

当社グループでは、以下を経営方針とし、基本理念である「心と技術をこめたモノづくりにより幸せと豊かさに貢献します」の実現を目指しております。

- ・技術の先端に挑戦し、新しい価値を創り出す
- ・独自の領域を切り拓き、事業の広がりを追求する
- ・人を大切にし、人を磨き、人が活躍する場をつくる
- ・社会に対する公正さと、環境との調和を大切にする

(2) 目標とする経営指標

当社グループでは、2026年度までの中期経営計画において以下の財務目標の達成に向けて取り組んで参ります。

売上収益	1兆3,000億円
事業利益	1,880億円
事業利益率	14.5%
自己資本比率	50%を目安
ROE	10%超

(3) 経営環境及び経営戦略・対処すべき課題

当社グループは、2024年から2026年までの3カ年計画として、中期経営計画「Yokohama Transformation 2026 (YX2026)」（ヨコハマ・トランスフォーメーション・ニーゼロニーロク）の取り組みを2024年度より開始しております。

既存事業における強みの「深化」と新しい価値の「探索」をさらに推し進め、次世代に負の遺産を残さないという強い意志を持って変革の「総仕上げ」を行います。こうした考えの下、各事業で定めた成長戦略を断行し、「Hockey Stick Growth」（「うなぎ昇り」の成長）を果たすことを目指します。

各分野での戦略と取り組み内容は、次の通りです。

タイヤ消費財

タイヤ消費財では近年、低コスト・低価格な新興タイヤメーカーが生産能力を拡大し、市場シェアを伸ばしています。これに対し「YX2026」では高付加価値品比率の最大化を積極的に推進し、収益率の向上を目指します。これに加え「Hockey Stick Growth」を果たすため、新興タイヤメーカーのコスト競争力に対抗すべく低コスト・高効率な生産体制の構築を目指します。その象徴的な取り組みである、1年で工場を立ち上げる「1年工場」への挑戦においては、現在、立上げ中の中国新杭州工場にて、建設着工から試作タイヤの生産開始までを11カ月で行い、目標を1カ月前倒しで達成しました。今後も引き続き、中国・メキシコ新工場だけでなく、既存工場においても低コスト・高効率化を推進します。高付加価値品比率の最大化では、プレミアムカーへの新車装着の推進およびグローバルでのモータースポーツへの参戦を継続しブランド価値向上に取り組めます。また、各地域の市場動向に沿った開発・供給・販売体制などを強化する「商品・地域事業戦略」を引き続き推進します。

タイヤ生産財

OHT事業

OHT市場の長期での市場成長率は年6%と予測されており、消費財タイヤ市場の年2%と比較し高い成長が期待できます。OHT市場の約40%を占めると予測される農業・林業用機械向けタイヤでは、当社グループがトップシェアを誇っており、Tier（ティア）1～Tier 3までティアごとに持つ生・販・技の強みを活かした「マルチブランド戦略」でさらに市場地位を強化します。市場の25%と予測され、当社グループが市場2位のシェアを持つ産業・港湾用車両向けタイヤでは、専門スタッフによるタイヤメンテナンスサービス「Interfit」のさらなる展開地域の拡充を図ります。また、当社グループが僅かなシェアに留まっている建設・鉱山用車両向けタイヤでは、2025年2月に

全世界で高いプレゼンスを持つGoodyear社のOTR事業の買収を行いました。この買収は、中期経営計画「YX2026」で掲げる「Hockey Stick Growth」に向けた、OHT事業全体での「Programmatic M&A」（プログラマティックM&A）戦略に沿って検討を進めてきたもので、建設・鉱山用車両向けタイヤにおける販路拡大・生産能力の増強のみならず、Goodyear社のOTR事業の持つ生産技術を含む高い技術力を、当社グループがトップシェアを持つ農業・林業用機械向けタイヤを含む既存カテゴリーで培った技術と融合することにより、OHT事業でのさらなる成長を目指します。

TBR事業

TBR（トラック・バス用）タイヤにおいても新興タイヤメーカーが生産量や市場への供給量を拡大しており、これに対し、欧米政府はアンチダンピングや相殺関税といった保護政策を実施しています。当社グループはこうした措置により適正な価格が維持された国や地域での販売強化を図り、収益を伴った成長を目指します。

MB事業

MB（マルチプル・ビジネス）事業は、事業再編や収益改善策の実行により収益を生み出す事業基盤を整えました。その結果、2025年度の事業利益率は10.5%となり、「YX2026」の当初目標値である10%を1年前倒しで達成しました。引き続き、ホース配管事業は、パリュチェーンの再構築や北米での生産構造の改革を行います。工業資材事業は、コンベヤベルトでは国内における確固たる市場地位の確立、マリンホースでは高収益体制の安定化に向けた内部改善を進め、航空部品では防衛装備品の強化と生産体制構築の準備を推進し、MB事業の存在感を高めていきます。

技術・生産

「YX2026」では「よいものを、安く、スピーディーに」をモットーに当社グループ全体の基盤強化に取り組みます。「よいもの」では次世代プレミアムカーへの新車装着の強化を、「安く」では他社に負けない抜本的コストダウンを、そして「スピーディー」ではタイヤ消費財戦略で目指す「Hockey Stick Growth」の目玉である「1年工場」への挑戦を遂行し、早期量産立上げによる投資金額の早期回収と収益の最大化を図るとともに、AI・シミュレーション技術の活用によるタイヤ開発のスピードアップを図ります。

サステナビリティ

当社グループでは、サステナビリティの取り組みは、企業の成長と企業価値の向上に資するものであるべきと考えています。環境投資においても十分な検討を重ね、企業収益と両立していくことを目指します。重要課題の一つである温室効果ガス排出量の削減では、買収前のY-TWSの排出量を加算した2019年の排出量を2026年に30%、2030年に40%削減することを新たな目標とし、追加コストをかけることなく目標達成を目指す計画を策定しました。再生可能・リサイクル原料の利用拡大によるサーキュラーエコノミーへの貢献では、温室効果ガス排出量（Scope3）の削減の観点からも再生可能・リサイクル原料の使用比率の向上を加速させ、2026年に28%、2030年に40%とすることを新たな目標として設定しました。当初、2030年の目標は30%でしたが、さらなる使用比率の向上を目指し、40%に引き上げました。

財務

「YX2026」でも引き続き「Hockey Stick Growth」を目指す積極的な戦略投資によって企業価値を高めていきます。資産効率化では政策保有株式売却および遊休不動産などの資産売却をさらに推進し、資本構成では事業構造に合った最適な資本バランスの実現（自己資本比率50%を目安）に取り組みます。また、PER（株価収益率）向上では、経営陣によるIRイベントを拡充し、情報発信と対話の強化を通じて資本コスト低減や期待成長率の向上に努めます。キャピタルアロケーションでは、3年間累計のキャッシュイン約4,750億円のうち、約3,100億円を戦略投資および経常投資に充てる予定です。株主還元については、「YX2026」で当初計画していた配当性向20%・総還元性向30%を、2026年度より配当性向を30%に、総還元性向を30%以上に上方修正しました。引き続き、持続的な利益成長に向けた投資を積極的に実施する中においても、安定的なキャッシュフローの創出と資産売却により、成長投資と株主還元の両立を行います。

2 【サステナビリティに関する考え方及び取組】

当社グループのサステナビリティに係る考え方及び取組は、次のとおりであります。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) サステナビリティ全般

当社グループは「心と技術をこめたモノづくりにより幸せと豊かさに貢献します」を基本理念とし、世界各地のステークホルダーと協調しながら事業活動を展開しております。また、サステナビリティ・スローガンとして「未来への思いやり」を掲げ、事業活動を通じた社会課題への貢献を持続的な企業価値向上につなげるべく、マテリアリティ（重要課題）に基づいた取り組みを推進しております。

前連結会計年度（2024年度）においては、当社グループを取り巻く事業環境及び社会課題の変化を踏まえてマテリアリティの見直しを行い、事業活動が社会及び環境に与える影響と社会及び環境が事業活動にもたらす影響の双方を考慮し、新たなマテリアリティを特定いたしました。当連結会計年度におきましても、これらのマテリアリティに基づいた取り組みを進めることにより、持続可能な社会の実現への貢献と事業の持続可能性の向上を目指しております。

ガバナンス

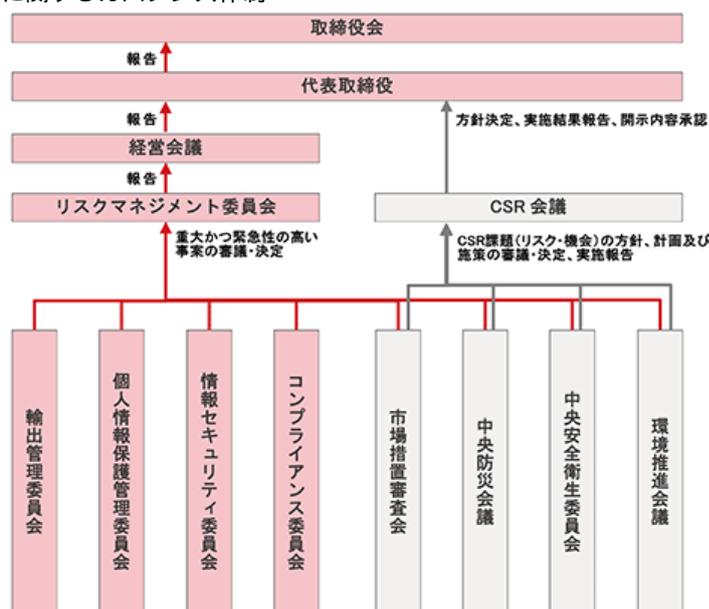
当社グループは、代表取締役会長兼CEOが議長を務め、社内取締役（監査等委員を含む）全員が出席する「CSR会議」を年に2回（5月及び11月）開催しております。当該会議においては、当社グループが取り組むべきサステナビリティ課題（環境、労働安全衛生、防災、品質、人的資本、人権及び社会貢献等）に係る方針の策定、並びに施策の立案及び検討を行う体制を整えております。

また、重要事項、迅速な意思決定を要する事項、若しくは報告又は審議が必要な事項については、経営会議において報告及び審議を行い、その重要性に応じて取締役会に付議又は報告しております。取締役会は、これらの会議体からの報告を通じて、サステナビリティに係るリスク及び機会が経営戦略に与える影響を定期的に監督しております。

個別のサステナビリティ課題について専門的に検討する会議体として、「環境推進会議」、「中央安全衛生委員会」及び「中央防災会議」を設置し、詳細な活動計画の策定及び施策の実行を推進しております。加えて、年2回、海外拠点を含むグループ全役員が参集し経営戦略について議論する「役員合宿」においても、カーボンニュートラル及びサーキュラーエコノミーに係る課題を継続的なテーマとして議論を行っております。

サステナビリティ課題の進捗状況については、毎月、代表取締役会長兼CEO、代表取締役社長兼COO、CSR本部担当取締役及び社内取締役監査等委員に対して報告を行っております。なお、重大かつ緊急性の高い事案については、「リスクマネジメント委員会」と連携し、迅速に対処する体制を構築しております。

< サステナビリティに関するガバナンス体制 >



戦略

当社グループは、CSR・サステナビリティ経営を推進するため、2008年に「CSR経営ビジョン」及び「CSR行動指針」を定め、責任部門としてCSR本部を設置いたしました。さらに2014年には、国連グローバル・コンパクトの4分野10原則等の国際規範に基づき「横浜ゴムグループ行動指針」を制定し、当社グループとステークホルダーの双方にとって影響が大きく、かつ関心の高いテーマをマテリアリティとして特定いたしました。以降、その達成のためにPDCAサイクルを循環させ、継続的な改善を図ってまいりました。創立100周年にあたる2017年には、サステナビリティ・スローガン（当時の名称はCSRスローガン）として「未来への思いやり」を制定し、持続的な成長の実現を目指しております。

前連結会計年度（2024年度）におきましては、当社グループを取り巻く事業環境及び社会課題の変化を踏まえ、マテリアリティの見直しを実施いたしました。見直しにあたっては、国際的な規範及び枠組み、並びにステークホルダーへの影響といった「外部要因」と、企業理念及び事業への影響といった「内部要因」の双方から課題を抽出及び整理いたしました。次に、整理された各課題につきまして、ダブルマテリアリティの考え方に基づき、事業活動が社会及び環境に与える影響、並びに社会及び環境課題が事業活動に及ぼす財務的影響を評価し、リスク及び機会の分析を行いました。これらの評価及び分析を踏まえ、各課題の影響の大きさ、並びにリスク及び機会の観点から重要性を評価し、課題の優先順位付けを実施いたしました。

優先順位付けを行った課題につきましては、社内各部門及び外部有識者からの意見聴取を行い、その結果を課題の優先順位に反映いたしました。最終的に、重要度の高い課題について社内で議論の上、経営会議での承認及び取締役会への報告を経て、社会及び環境の持続可能性と当社グループの持続的成長に必要なマテリアリティを新たに特定いたしました。また、目指す姿の実現のために、中長期的視点で達成すべき具体的な指標を非財務目標として設定しました。

今後につきましても、事業環境及び社会課題の変化等を踏まえ、同様のプロセスにより定期的にマテリアリティの見直しを実施していく方針であります。

< 横浜ゴムグループのマテリアリティ >

分類	マテリアリティ	リスク	機会
製品・サービス	持続可能な社会に貢献する製品・サービスの提供	<ul style="list-style-type: none"> ・変化に適應できないことによる業績の低下 ・MaaS（注1）の普及によるマイカー所有者の減少などお客さまのニーズの変化に伴う製品需要の低下 ・製品の安全性低下による事故・訴訟のリスク、リコール、ブランド価値の棄損 ・性能、コスト等の要求水準の厳格化 	<ul style="list-style-type: none"> ・お客さまのニーズの変化、規制強化への早期対応 ・CASE（注2）、MaaSへの対応による新たなビジネスチャンスの獲得
環境	脱炭素社会・循環型経済への貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・環境（タイヤの摩耗粉塵等）に関する法規制の強化・訴訟の増加 ・GHG（顧客企業のScope3）削減のための再生可能エネルギー利用要求等によるエネルギーコストの増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境問題に感度の高いお客さまに向けた製品の販売 ・EVの普及に伴うEV向け製品の販売拡大
	自然との共生	<ul style="list-style-type: none"> ・天然ゴム農園における森林等の環境破壊による生物多様性への負の影響 ・サプライヤーのGHGの排出による気候変動による災害激甚化 ・大気汚染・気候変動による地域住民の被災、健康被害、地域の気候変動への影響 ・水資源・廃棄物の不適切な取扱いによる地域住民の健康被害、生物多様性への影響 	<ul style="list-style-type: none"> ・製造プロセス効率の改善によるエネルギーコスト削減 ・リユース・リサイクルによる資源価格変動リスクの低減、運用効率の向上 ・環境保全コストの低減

分類	マテリアリティ	リスク	機会
地域社会	地域社会との共生	<ul style="list-style-type: none"> ・廃棄物・排出物の環境影響による地域コミュニティの操業反対 ・天然ゴム農園の開発による先住民の権利の侵害 ・周辺の先住民の居住環境への悪影響の是正措置による収量減、生産コスト上昇 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民との良好な関係構築による安定操業 ・地域子弟の教育（スカラシップ、就業体験など）の実施による当社入社機会の創出
人的資本	持続的な企業価値向上を実現する人材力	<ul style="list-style-type: none"> ・労働災害・自然災害・感染症等による労働力の減少 ・メンタルヘルス不調による休業、満足度低下による生産性の低下 ・従業員に対する長時間労働、生活賃金、結社の自由などの人権侵害 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な人材の採用・育成、活躍によるイノベーションの創出、生産性の向上
サプライチェーン	持続可能なサプライチェーンの構築	<ul style="list-style-type: none"> ・天然ゴム農園におけるワーカーの強制労働・児童労働等の人権問題の発覚による取引停止、是正措置による生産コスト上昇 	<ul style="list-style-type: none"> ・持続可能かつ高品質な原材料の調達 ・地域社会の経済発展への貢献による取引の拡大
ガバナンス	コーポレートガバナンス強化による経営のレジリエンス向上	<ul style="list-style-type: none"> ・独占禁止法、贈収賄、価格カルテル、輸出管理等の法規制の強化 ・サイバー攻撃や機密情報の漏洩などによる信用・ブランド価値の低下 ・気候変動、生物多様性保全の環境課題、人的資本、サプライチェーンにおける人権等のサステナビリティ関連知識・スキルを備えた人材の不足 ・サステナビリティ課題に対応できなかったことによる企業価値低下 	<ul style="list-style-type: none"> ・サステナビリティ課題への対応による経営のレジリエンスと企業価値の向上

(注) 1. MaaSとは、Mobility as a Serviceの略称であり、情報通信技術の活用により、多様な移動手段を一つの移動サービスとして統合する新たな移動の概念であります。

2. CASEとは、Connected（コネクテッド）、Autonomous（自動運転）、Shared & Services（シェアリング及びサービス）及びElectric（電動化）の頭文字を繋げた造語であり、自動車産業における次世代の主要な技術動向を指す用語であります。

リスク管理

当社グループは、当社グループを取り巻くさまざまなリスクからの防衛体制を強固にするため、リスクマネジメント担当役員を委員長とする「リスクマネジメント委員会」を設置し、経営に重大な影響を及ぼすリスクを横断的に管理し、適切に評価及び対応を行っております。また、サステナビリティに係るリスク及び機会についても、適切に識別及び評価し、管理するためのプロセスを構築しております。

環境、労働安全衛生、防災・BCP、品質管理、コンプライアンスなどの重要度の高いリスクに関しては、それぞれを専門に統括する部門と会議体を設置して重点的に管理する体制を構築しており、事業活動におけるリスク管理体制の強化を図っております。例えば、気候変動や生物多様性保全等をはじめとする環境関連リスクに関しては「環境推進会議」、労働災害リスクをはじめとする労働安全衛生関連リスクに関しては「中央安全衛生委員会」、自然災害及び火災リスクに関しては「中央防災会議」が、それぞれリスク及び機会について分析を行い、対応方針、計画及び施策を立案しております。これらは「CSR会議」における審議及び決定を経て、実行に移されております。

これらのプロセスで識別されたリスク及び機会は、環境マネジメントシステムを通じた環境目標の進捗管理、

並びに労働安全衛生におけるリスクアセスメントの計画的実施及び改善状況のフォロー等を通じてモニタリングされ、重大な影響を及ぼすものについては全社的なリスク管理プロセスに統合して管理を行っております。また、従業員のコンプライアンス・リスク及び人権に係るリスクに関しては「従業員意識調査」の定期的な実施、サプライチェーンの人権に係るリスクについては「横浜ゴムグループ人権方針」に基づく人権デューデリジェンスの継続的な実施を通じて管理を行い、その内容については「コンプライアンス委員会」や「CSR会議」に報告しております。

「リスクマネジメント委員会」及び「コンプライアンス委員会」等の活動状況は、取締役会に定期的に報告されるとともに、その他の会議体の活動状況についても経営会議に適宜報告しております。また、必要と判断された事項については、取締役会へ報告される体制となっております。

指標及び目標

中期経営計画「YX2026」においては、それぞれのマテリアリティにおける目指す姿を実現するためのサステナビリティ指標（KPI）、並びに識別されたリスク及び機会の双方に対処するためのサステナビリティ目標を設定することで、企業価値向上、並びに持続的な社会及び環境への貢献を目指しております。特定された各マテリアリティに係る指標及び目標、並びに2024年度及び2025年度の実績は以下の通りであります。

マテリアリティ	指標（KPI）	目標	実績	
			2024年度	2025年度
製品・サービス： 持続可能な社会に貢献する製品・サービスの提供	E+マーク（電動車対応）タイヤの商品数	2026年度：10商品	5商品	7商品
	VF（Very High Flexion）規格及びPF0（Pressure Field Operation）規格（注1）に適合したタイヤサイズ数	2026年度：合計384サイズ	272サイズ	283サイズ
	DXを活用したタイヤのマネジメント/メンテナンスサービス（T.M.S）の利用数			
	車両登録台数	2026年度：5万台	49,019台	53,567台
	タイヤ点検本数	2026年度：年間45万本	328,823本	314,092本
環境： 脱炭素社会・循環型経済への貢献	温室効果ガス排出量（Scope1+2）削減	2026年度：2019年度比30%削減 2030年度：同40%削減 2050年度：カーボンニュートラル達成	10.6%	（注2）
	再生可能エネルギーの割合	2050年度：100%達成	4.3%	（注2）
	再生可能原料・リサイクル原料使用率	2026年度：28% 2030年度：40% 2050年度：サステナブル原料100%達成	29.8%	30.4%
環境： 自然との共生	「YOKOHAMA千年の杜」活動における植樹・苗木提供本数	2030年度：植樹・苗木提供本数累計150万本	1,399,664本	1,490,853本
	事業拠点の環境省「自然共生サイト」認定件数	2026年度：累計5拠点	1拠点	3拠点
	重大環境事故件数（大気、水、土壌）	0件の継続	0件	0件
地域社会： 地域社会との共生	従業員社会貢献基金「YOKOHAMAまごころ基金」による社会貢献団体支援	年間10件以上	12件	12件

マテリアリティ	指標 (KPI)	目標	実績	
			2024年度	2025年度
人的資本： 持続的な企業価値向上を実現する人材力	女性管理職（課長以上）比率（単体）	2026年度：5% 2030年度：10%	3.2%	3.5%
	男性育児休業取得率（単体）	2026年度：100% 2030年度：100% （取得期間の拡充）	83.7%	100.7%
	従業員の65歳到達後の継続雇用率（単体）（注3）	2026年度：65%以上 2030年度：70%以上	73.3%	78.5%
	能力開発研修受講者数			
	MBA等経営教育受講率（単体）	2026年度：部門長の15%（累計）	8.3%	8.1%
	DXリーダー育成教育受講率（単体）（注4）	2026年度：事務・技術系従業員の10%（累計）	0.6%	5.6%
	従業員エンゲージメントスコア（注5）	2026年度：70	68.8	69.0
サプライチェーン： 持続可能なサプライチェーンの構築	天然ゴム農園の調査件数	2030年度：累計1,200件	861件	1,050件
	天然ゴム農家向けセミナーイベントの実施件数	年間2件以上	2件	2件
	サプライチェーンにおける人権デューデリジェンス（インパクト・アセスメント）実施件数	年間1件	1件	1件
ガバナンス： コーポレートガバナンス強化による経営のレジリエンス向上	取締役会におけるサステナビリティ関連事案の報告・審議件数	年間4件（四半期に1回）以上	4件	7件

- （注）1．農作物の根への影響を最小限に抑える低圧走行可能なタイヤの規格です。
- 2．第三者検証意見書を取得した確定値による算出を予定しております。2026年6月発行予定の統合報告書における記載をご参照下さい。
- 3．65歳に到達した事務職、技術職及び技能職の従業員のうち、当社又は子会社にて65歳以降も継続雇用された従業員の割合（直近3年移動平均）を示しております。
- 4．DXリーダー育成教育は、2024年度の期中から開始しております。
- 5．提出会社（単体）の従業員を対象とした「従業員意識調査」の結果から算出しております。

(2) 気候変動

当社グループは、持続可能な社会の実現に向け、カーボンニュートラルの達成を重要な経営課題の一つとして位置づけております。2022年1月に「気候関連財務情報開示タスクフォース（TCFD）」提言への賛同を表明して以降、同提言の枠組みに沿って、気候変動に係るリスク及び機会が経営に与える影響の評価、並びに情報開示を継続的に推進しております。今後もステークホルダーの皆様との信頼関係の構築に努め、持続的な企業価値の向上を図る方針であります。

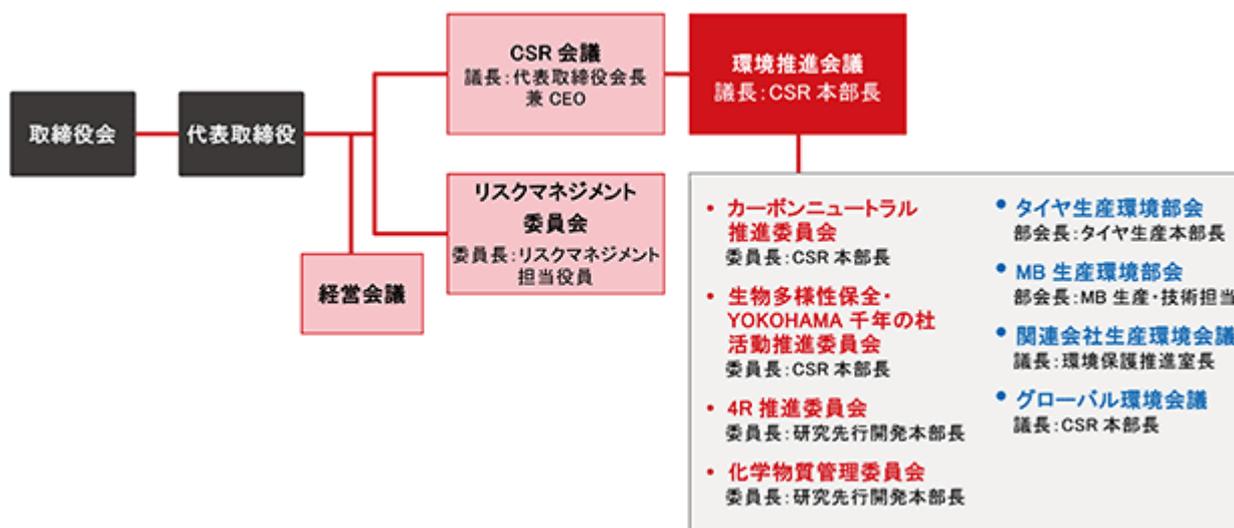
ガバナンス

当社グループは、気候変動に関連するリスク及び機会の監督、並びに管理を行うためのガバナンス体制を構築しております。代表取締役会長兼CEOが議長を務める「CSR会議」を年に2回（5月及び11月）開催し、気候変動を含む重要なCSR課題の立案及び検討を行っております。

特に「気候変動の緩和と適応」に関しては、CSR本部長を議長とする「環境推進会議」を設置し、当社グループの環境活動を統括しております。当該会議の下部組織として4つの委員会、2つの部会及び2つの会議を設け、具体的な環境活動の推進、並びに各課題の審議及び決定を行っております。

環境推進会議等における活動状況は、サステナビリティ全般を所管するCSR会議へ報告されます。重要事項や早期の意思決定を要する事項については、経営会議において報告及び審議を行います。さらに、その重要性に応じた取締役会へ随時報告を行うことで、全社的な経営戦略と連動した監督体制を整えております。

<気候変動に関するガバナンス体制>



戦略

当社グループは、気候関連のリスク及び機会について、低炭素経済への移行に関連するリスク（移行リスク）及び気候変動の物理的影響に関連するリスク（物理的リスク）の二つに分類し、財務的影響の大きさを評価した上で、事業に及ぼすリスク及び機会を整理いたしました。

また、気温上昇につき、国際エネルギー機関（IEA）及び気候変動に関する政府間パネル（IPCC）が示すシナリオを用いてシナリオ分析を実施し、1.5 シナリオ並びに4 シナリオそれぞれのリスク及び機会を踏まえた適応策、並びに財務的影響等について検証いたしました。

今後も引き続き、リスク及び機会の検討、並びにシナリオ分析の精緻化を進めていく方針であります。

<気候変動に関する主なリスクと機会>

	重要な要因	区分	潜在的な財務的影響	財務影響	今後の対応策	
リスク	移行 脱炭素社会への移行	政策・法規制	カーボンプライシングの導入・上昇	大	<ul style="list-style-type: none"> カーボンニュートラルのロードマップの策定と実践 エネルギー使用量の「年1%削減活動」の推進（設備の効率化、運転の最適化、加工仕様の見直し等） 再生可能エネルギーの利用拡大 エネルギー新技術の導入 	
		市場	資源（原料）価格の高騰・供給の不安定化	大		
			再生可能エネルギー・燃料価格（原油、天然ガス）の上昇	大		
		技術	製造プロセス効率の改善のための設備投資	中		
		評判	排出量削減の取り組みや取り組み姿勢に対する顧客評価、株価への影響	小		
			再生可能エネルギー利用を推進する世界的な動きへの対応（ステークホルダーからの評判）	小		
	製品・サービス需要の変化	市場	製造時CO2排出量評価による製品選別（同一製品内の競争）	大	製造時のCO2排出ゼロに向けた製造拠点のカーボンニュートラル化の推進	
	自動車業界の変革への対応	市場	MaaSによる自動車販売台数の低下	大	生産財タイヤの強化、コスト、サービス、DXの探索	
	物理的 リスク	気温上昇に伴う気象災害の激甚化	急性	サプライチェーンの寸断による原材料調達困難化、調達コストの上昇	大	<ul style="list-style-type: none"> サプライヤー、原料産地の分散化 風、水害や地震等に対応した生産拠点の補強、BCP策定
				異常気象による設備損壊、運転停止	大	
気候変動の激甚化		慢性	気候変動による天然ゴム（天然資源）の枯渇、調達困難化	大	サステナブル原料の研究開発強化	
			降雪の減少等による冬用タイヤ需要の低下	大	オールシーズンタイヤの開発・販売	
製品性能向上に必要な研究開発投資の増加	中	ビジネスパートナーとの共同研究開発の推進				
機会	移行 脱炭素社会への移行	エネルギー源	製造プロセス効率の改善によるエネルギーコスト削減	中	エネルギー使用量の「年1%削減活動」の推進（設備の効率化、運転の最適化、加工仕様の見直し等）	
		製品・サービス	需要の変化（カーボンニュートラル対応・電動車（EV）装着の性能要求）や規制強化への早期対応によるシェアの拡大	大	<ul style="list-style-type: none"> EV対応タイヤの新車装着強化 E+マークのEV対応タイヤの販売拡大 	
	製品・サービス需要の変化	製品・サービス	再生可能/リサイクル原料を使用した環境負荷低減製品や低燃費、低炭素化製品の提供による競争力・収益力の向上	大	<ul style="list-style-type: none"> 再生可能/リサイクル原料を使用したタイヤ、ゴム製品の販売拡大 環境性能に優れた低燃費タイヤの販売拡大 製造時のCO2排出ゼロのタイヤ、ゴム製品の販売 	
	自動車業界の変革への対応	製品・サービス	次世代モビリティを支える製品・サービスの需要増	大	<ul style="list-style-type: none"> センサータイヤ（IoTタイヤ）の販売 タイヤソリューションサービスの強化 	
	気候変動	製品・サービス	防災・復旧・気温変動や食料・自然に資する製品・サービスの需要増	大	<ul style="list-style-type: none"> オフハイウェイタイヤ（OHT）の販売拡大 耐衝撃性、耐熱性の高いコンベヤベルト等のゴム製品の販売拡大 	

<シナリオ分析の結果概要>

シナリオ条件		1.5 シナリオ	4 シナリオ
シナリオの概要		持続可能な発展のため、厳しい気候政策や技術革新により、2100年までの世界の平均気温の上昇を産業革命前に比して1.5 に抑えるシナリオ	厳しい気候政策や技術革新が進まず、気候変動の物理的影響が急速に強まり、2100年までの平均気温が産業革命前に比して4 上昇することを想定するシナリオ
参照シナリオ	移行リスク	IEA Net Zero Emissions by 2050 Scenario (NZE)	IEA World Energy Outlook 2021 (WE02021)
	物理リスク	IPCC第6次報告書SSP1-1.9	IPCC第6次報告書SSP5-8.5
分析結果		主に移行リスク・機会が顕在化。 (リスク) 厳格な気候変動規制への対応が求められ、再生可能エネルギーの調達やカーボンプライシング導入などによりエネルギーコスト負担や製造プロセス効率改善のための設備投資が増加。 環境負荷低減製品の増加に伴い、再生可能/リサイクル原料の研究開発費や調達コスト負担が増加。 (機会) カーボンニュートラル対応、EV装着の性能要求への早期対応、環境負荷低減製品や低燃費、低炭素化製品の提供により、競争力・収益力が向上。	主に物理リスク・機会が顕在化。 (リスク) 拠点やサプライチェーンにおける甚大な自然災害の発生が増加。また、異常気象により天然資源が枯渇し、原料供給が不安定化。 降雪の減少等による冬用タイヤ需要の低下など、慢性的な気候変動により製品需要が変化。 (機会) 防災・復旧・気候変動などに対応する製品・サービスの需要が増加。

リスク管理

気候変動に係るリスク及び機会については、「環境推進会議」の下部組織である「カーボンニュートラル推進委員会」等の各組織が、それぞれの専門領域において識別及び評価を実施し、その低減に向けた活動を行っております。特定された重要なリスクは、環境推進会議において対応方針、計画及び施策を立案し、サステナビリティ全般を所管する「CSR会議」にて審議及び決定を経て、組織的に管理しております。

自然災害等の物理的リスクについては、「中央防災会議」において防災並びにBCPの方針、計画及び施策を立案し、CSR会議における審議及び決定を経て、リスクアセスメントを通じたリスクの低減を推進しております。

これらの中で重大かつ緊急性の高い事案については、「リスクマネジメント委員会」において審議を行い、適切に評価及び対応を行っております。同委員会の活動状況は、定期的に取締役会へ報告されております。

指標及び目標

当社グループは、環境関連のマテリアリティとして「脱炭素社会・循環型経済への貢献」及び「自然との共生」を掲げ、気候変動に係るリスク及び機会を適切に管理するため、以下の指標及び目標を設定しております。主要な指標及び目標、並びに2022年度から2024年度までの実績は、以下のとおりであります。

指標 (KPI)	目標
温室効果ガス排出量 (Scope1+2) 削減	2026年度：2019年度比30%削減 2030年度：同40%削減 2050年度：カーボンニュートラル達成
再生可能エネルギーの割合	2050年度：100%達成
再生可能原料・リサイクル原料使用率	2026年度：28% 2030年度：40% 2050年度：100%達成
「YOKOHAMA千年の杜」活動における植樹・苗木提供本数	2030年度：植樹・苗木提供本数累計150万本

温室効果ガス排出量実績 (Scope1、2) (連結)

Scope (単位：千トン)	2019年度 (基準年)	2022年度	2023年度	2024年度
Scope1	656	648	588	591
Scope2	614	593	494	545
Scope1、2合計	1,270	1,241	1,082	1,136
Scope1、2合計の削減率 (基準年：2019年度)		2.3%	14.8%	10.6%

(注) 各年度の温室効果ガス排出量実績 (Scope1、2) には、買収前のYokohama TWSの排出量実績を含んでおります。また、2024年度よりATC Tires AP Private Ltd. (インド) のヴィシャカパトナム工場を算定範囲に追加いたしました。

温室効果ガス排出量実績 (Scope3) (連結)

カテゴリ (単位：千トン)		2019年度	2022年度	2023年度	2024年度
1	購入した製品・サービス	2,628	4,022	3,381	4,584
2	資本財	58	175	199	253
3	Scope1、2に含まれない燃料及びエネルギー活動	106	129	139	139
4	輸送、配送 (上流)	141	125	136	349
5	事業から出る廃棄物	2	27	29	33
6	出張	11	5	13	18
7	雇用者の通勤	25	19	24	29
8	リース資産 (上流)				
9	輸送・配送 (下流)	54	59	74	115
10	販売した製品の加工	10	14	10	12
11	販売した製品の使用	18,394	21,087	20,735	33,212
12	販売した製品の廃棄	1,179	906	913	1,636
13	リース資産 (下流)				
14	フランチャイズ				
15	投資	135	92	67	24
上記の合計		22,745	26,661	25,718	40,405

(注) Yokohama TWSの温室効果ガス排出量実績 (Scope3) については、2024年度より算定範囲に含めております。なお、カテゴリ8、13、14に分類される排出量実績はございません。

第三者検証について

2024年度の温室効果ガス排出量実績 (Scope1、Scope2及びScope3) (連結) については、データの信頼性向上を目的として、SGSジャパン株式会社による第三者検証 (注) を受けております。

(注) 当社が算定したデータ及び算定方法について、検証基準 (ISO14064-3:2019及びSGSジャパン株式会社の検証手順) に基づき実施された検証であります。

(3)人的資本（人材の多様性を含む）

ガバナンス

人的資本に関するガバナンスについては、「第一部 企業情報 第2 事業の状況 2 サステナビリティに関する考え方及び取組（1）サステナビリティ全般 ガバナンス」をご参照ください。

戦略

求める人材像

当社グループは、経営戦略の実現及び持続的な企業価値の向上を図るため、基本理念、経営方針、行動指針及び企業スローガンからなる企業理念の浸透、並びに事業の方向性の共有を基盤としております。

その上で、求める人材像として「世代・性別・国籍に関わらず、厳しくとも結果にコミットし、自らの成長をもって会社の成長に貢献できる人材」を掲げ、当該人材の育成及び社内環境整備に取り組んでいく方針であります。

人材育成方針

<プロ人材の育成と「適所」適材の人員配置>

グローバルに事業展開を行う当社グループにおいて、高い達成意欲及び幅広い視野を有し、周囲に影響を及ぼしながら能力を発揮する「プロ人材」の配置は不可欠であります。当社グループでは、個人の成長が企業の発展をもたらすとの考えに基づき、プロ人材の育成及び選抜、並びに「適所」適材の人員配置等の施策を推進しております。従業員一人ひとりが教育機会を積極的に活用し、自律的に成長することを全面的に支援するとともに、将来の経営を担う経営人材の確保及び育成に注力しております。

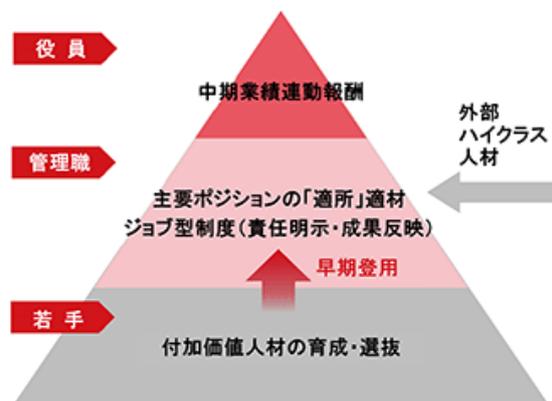
<人材育成プログラム>

グローバルな事業環境の変化に対応するため、重層的な人材育成プログラムを通じて人的資本の強化に取り組んでおります。的確に物事を判断及び実行するのに必要なマインド、能力及びスキルの習得、並びに階層別のリーダーシップや交渉力等の個別スキルの開発を目指し、実体験から学ぶ「三現教育」を実施しております。また、将来の経営人材の育成を目的とした管理職層の国内MBA派遣、並びに事務及び技術系従業員のDX人材化促進のためのDXリーダー育成教育等により、求める人材像の育成に取り組んでおります。

<コア人材の育成>

中期経営計画「YX2026」の実現を人材面から支えるため、人事制度を通じたコア人材の育成を強化しております。次世代経営者の育成に向けた施策として、次世代経営者サクセッションプランを導入し、各役員の後継者候補を指名するとともに、社外の知見も踏まえた育成計画を策定しております。当該施策の内容については、役員人事・報酬委員会及び取締役会における審議を経て実行されております。また、将来を担う部課長クラスのMBA等経営教育及び海外のプロフェッショナル経営者の下での研鑽等、インプットと実践の両面での次世代経営者の育成を行っております。

管理職層については、ポスト（ジョブ）・成果と報酬の連動性を高めており、2025年度より業績達成率と直結した賞与制度を導入しております。一方、一般層については、早期育成を主眼に体系を整理しております。具体的には、2021年度より最速30歳から管理職への配置を可能とする早期登用制度を導入しております。あわせてDX教育を「ITリテラシー/データ活用（D）× ビジネス力・企画創造（X）」と定義し、次世代管理職をDXリーダーとする方針に基づき、育成策を講じております。なお、MBA等経営教育とDXリーダー育成教育については、後述の「指標と目標」においてKPIとして設定しております。



社内環境整備方針

<多様な働き方を認める組織風土の醸成>

激変する事業環境において持続的な成長を果たすためには、人的資本の価値向上が不可欠であります。当社グループでは、多様な人材がそれぞれの分野において能力を最大限に発揮できるよう、従来の慣行や考え方にとらわれない柔軟な働き方の導入、並びに全従業員が共に活力を持ち、生き生きと職務に従事できる職場環境の整備等を通じ、働き方改革を推進しております。

ワークライフバランスを尊重し、多様な働き方を互いに認め合う組織風土を醸成することで、全ての従業員が成長を継続し、仕事と生活を両立しながら着実にキャリアを形成できるよう支援していく方針であります。

<場所・時間にとらわれない働き方の推進>

当社グループは、機能集約による業務効率化及び働き方改革を目的として、2023年3月に本社機能を東京都港区から神奈川県平塚市の平塚製造所に移転及び統合いたしました。在宅勤務制度等の諸制度の適用を拡大し、多様な状況に対応できる勤務体制を整えるとともに、企画、生産、販売、技術、及び物流の一体運営並びに迅速な意思決定を実現しております。

<ホームオフィス制度の導入>

2023年3月、本社機能の統合により遠距離通勤となった従業員及び配偶者の転勤に同行する従業員を対象に、自宅を基本的な就業場所とする「ホームオフィス制度」を導入いたしました。オフィスに固定デスクを持たず、会社負担で自宅の就業環境を整備することで、場所にとらわれない働き方を推進しております。また、配偶者の転勤に同行する従業員も本制度を利用できるように整備し、家庭の事情によるキャリアの中断を防止するとともに、多様な人材が活躍できる基盤の構築に取り組んでおります。

<東京事務所、サテライトオフィスの設置>

本社機能の平塚製造所への統合に合わせ、東京都品川区に東京事務所及びサテライトオフィスを設置いたしました。東京事務所には、株式会社ヨコハマタイヤジャパン、横浜ゴムMBジャパン株式会社の本社及び横浜ゴム株式会社の販売部門の一部を移転させております。また、フリーアドレス制を採用したサテライトオフィスの設置により、組織の壁を越えた従業員間のコミュニケーション活性化を図っております。

<在宅及びフレックス勤務の拡充>

業務効率の向上、育児及び介護等と仕事の両立支援、並びに健康への配慮に向けた長時間労働の抑制を目的として、2018年より在宅勤務制度を導入しております。2023年からは通勤負担の軽減目的でも利用できるよう要件を拡大するとともに、利用回数の上限を撤廃し、各職場で最も成果及び効率を高められる運用へ移行いたしました。また、事務及び技術系従業員については、原則として全てフレックスタイム制度の適用対象とし、コアタイムを撤廃いたしました。加えて、短時間勤務フレックスタイム制度を拡充するなど、場所や時間を問わず成果を創出できる仕組みを整えております。

<労働安全衛生>

当社グループは、事業の特性上、生産工場において大型機械を取り扱うため、設備不具合及び誤操作が重大な事故に直結するリスクを有しております。そのため、全ての設備及び作業を対象としたリスクアセスメントを計画的かつ継続的に実施し、設備面からの未然防止策を徹底しております。

また、国内外33拠点が労働安全衛生マネジメントシステム（JISHA/OSHMS又はISO45001）認証を取得しており、グループで働く全ての人々が安全かつ安心して職務に従事できるよう、安全衛生環境のさらなる向上を目指した取り組みを推進しております。

さらに、従業員が健康で長期にわたり活躍できる職場づくりのため、健康保険組合と連携した「コラボヘルス（注）」による健康経営に取り組み、健康及び体力向上を推進しております。

（注）保険者及び事業者が積極的に連携し、明確な役割分担及び良好な職場環境のもと、加入者の疾病予防及び健康増進を効率的かつ効果的に実行すること。

<従業員エンゲージメント>

中期経営計画「YX2026」の戦略及び方針が従業員に深く浸透し、実行熱意をもって遂行されているか、並びに自らの成長を通じて会社の発展に貢献できる多様な人材が活力を持ち、生き生きと職務に従事できる職場環境及び企業風土であるかを把握するため、「従業員意識調査」を継続的に実施しております。当該調査においては、単なるスコアの比較にとどまらず、その内容を重視しており、特に「戦略理解」及び「実行熱意」に重点を置いて分析を行っております。

2025年度の調査結果、及び認識された課題に対する取り組みは以下の通りであります。

項目	2024年度実績	2025年度実績
対象従業員数	5,522人	5,575人
対象従業員回答率	95.7%	94.6%
従業員エンゲージメントスコア	68.8	69.0
「YX2026」浸透度（戦略理解度）	57.0	69.6

()回答率

2025年度の回答率は94.6%（2024年度：95.7%）と引き続き高い水準を維持しており、多くの従業員が会社の方針や自らの職場環境に対して高い関心を持ち、組織への参画意欲が高いことが確認されました。

()従業員エンゲージメントスコア

ワークエンゲージメントの主要項目（働きがい、やりがい、誇り及び勤続意欲）のスコア合計を100点満点に換算した「従業員エンゲージメントスコア」は、2025年度において69.0（前年度比0.2ポイント向上）となりました。

()「YX2026」浸透度（戦略理解度）

2024年度の調査結果において、管理職層と比較した一般従業員層の戦略理解の不足、及びスタッフ部門と比較した製造部門の理解不足が課題として認識されました。この解決に向け、個人の行動と戦略の結びつきを重視し、各本部長主導による組織内の対話強化に取り組みました。

その結果、全社スコアは69.6（前年度比12.6ポイント向上）と大幅に改善いたしました。また、スタッフ部門と製造部門のスコアギャップについても19.6から6.6へと大幅に縮小しており、全社的な一体感の醸成が進んでおります。

()今後の展望

今後は、本調査の対象範囲を段階的に子会社及び海外拠点へも拡大していく予定であります。また、企業成長に対し、特に若手従業員自身の成長実感との結びつきが不十分な点を課題とし、戦略実現と各社員の貢献との関係理解を深めると共に、育成施策の充実に努めてまいります。

人材の多様性の確保

<目指すべき姿>

当社グループでは、多様な人材が互いの価値観や働き方を認め合い、従来の慣行及び考え方にとらわれない柔軟な働き方の導入、並びに全従業員が共に活力を持ち、生き生きと職務に従事できる職場環境の整備等を通じ、人材の多様性を推進することを重要な経営課題と認識しております。国籍、性別及びLGBTQ+等の属性、並びに学歴及び経験にとらわれない採用を行い、中期経営計画「YX2026」における事業戦略及び技術戦略の実現に向けて、最適な人材配置を継続してまいります。また、ワークライフバランスを尊重し、全ての従業員が成長を継続し、着実なキャリア形成を実現できる職場の構築を目指しております。

<女性の活躍推進>

諸制度の拡充、施策の実施、並びに管理職における女性比率の向上等の取り組みを通じ、女性にとって働きやすい環境づくりを推進しております。当社の2025年12月末現在における女性管理職（課長以上）比率（単体）は3.5%ですが、次期管理職候補である係長クラスは18.9%、早期登用で管理職への配置が可能な主任クラスは43.3%の女性比率となっており、将来的に女性管理職が着実に増加していくパイプラインを構築しております。今後は、キャリア開発支援セミナーの実施、仕事及び生活の両立支援制度の整備、並びに早期登用制度のさらなる活用により、女性管理職比率の一層の向上を目指してまいります。

<障がい者の雇用>

障がい者の雇用の場を創出することを目的とし、2012年に特例子会社としてヨコハマピアサポート株式会社を設立いたしました。同社では、知的障がい者を中心に32人（2025年6月1日現在）を雇用しております。横浜ゴム株式会社、ヨコハマピアサポート株式会社、株式会社ヨコハマタイヤジャパン、並びに横浜ゴムMBジャパン株式会社の4社において「関係会社特例」の認定を受けており、4社合算の障がい者雇用率は、2025年報告実績（2025年6月1日現在）で2.6%となりました。今後も、職域の拡大に向けた新たな業務開発を継続してまいります。

<シニア人材の活用>

60歳の定年後も高い就業意欲を持つ人材に対し、豊富な知識及び経験を活かす機会を提供するため、定年退職者を再雇用し、最長70歳まで活躍できる制度を導入しております。事務及び技術系従業員については、100%出資子会社であるヨコハマビジネスアソシエーション株式会社が再雇用を行い、当社へ派遣する形態をとることで、シニア人材の継続的な活躍を支援しております。

<性的マイノリティに関する取り組み>

LGBTQ+を含む多様な人材の活躍を支援するため、同性パートナー及び事実婚のパートナーを配偶者とみなし、その家族についても配偶者の家族と同等に扱う「パートナー＆ファミリーシップ制度」を2023年10月に導入いたしました。また、外部有識者による「LGBTQ+セミナー」の開催を通じて従業員の理解を深めるとともに、社内外に専用の相談窓口を設置し、制度の利用や個別の悩みに対応できる体制を整備しております。

リスク管理

従業員のコンプライアンス及び人権に関するリスク管理のため、定期的に「従業員意識調査」を実施しております。コンプライアンスの観点では、従業員一人ひとりのコンプライアンス意識の浸透状況を確認するとともに、当社のコンプライアンス体制が有効に機能しているかを検証しております。また、人権の観点では、人権尊重に関する意識の状況、人権侵害の有無、及び潜在的な人権侵害のリスクの把握を行っております。

調査結果は、取締役会へ報告後に各職場へのフィードバックを実施しております。フィードバックを受けた各職場においては、認識された課題に対する改善施策を主体的に検討及び推進しております。また、重大なリスクが認識された場合には、担当部門が迅速に防止又は軽減に向けた取り組みを実施する体制を構築しております。

指標及び目標

当社グループでは、人的資本関連のマテリアリティとして「持続的な企業価値向上を実現する人材力」を掲げ、主要な施策について、指標（KPI）及び目標を設定しております。人的資本に関連する指標及び目標は、当社グループの各連結子会社においてそれぞれ独自に設定されていることから、以下に当社グループにおける主要な事業を営む提出会社（単体）の指標、実績及び目標を記載しております。

指標（KPI）		実績			目標
		2023年度	2024年度	2025年度	
参考	女性管理職（課長以上）比率（単体）	2.0%	3.2%	3.5%	2026年度：5%
	係長クラス女性比率（単体）	14.2%	15.7%	18.9%	2030年度：10%
	主任クラス女性比率（単体）	42.8%	45.2%	43.3%	
	男性育児休業取得率（単体）	86.2%	83.7%	100.7%	2026年度：100% 2030年度：100%（取得期間の拡充）
	従業員の65歳到達後継続雇用率（単体）（注2）	64.1%	73.3%	78.5%	2026年度：65%以上 2030年度：70%以上
	能力開発研修受講率 ・MBA等経営教育受講率（単体） ・DXリーダー育成教育受講率（単体） （注3）	6.0%	8.3%	8.1%	2026年度： ・部門長の15%（累計） ・事務・技術系職員の10%（累計）
	従業員エンゲージメントスコア（注4）		68.8	69.0	2026年度：70

（注）1．「」表示は実績なしを示しております。

- 2．65歳に到達した事務職、技術職及び技能職の従業員のうち、当社又は子会社にて65歳以降も継続雇用された従業員の割合（直近3年移動平均）を示しております。
- 3．DXリーダー育成教育は、2024年度の期中から開始しております。
- 4．提出会社（単体）の従業員を対象とした「従業員意識調査」の結果から算出しております。

3 【事業等のリスク】

当社グループの経営成績、株価及び財務状況等に影響を及ぼす可能性のあるリスクは下記のようなものがあります。なお、文中における将来等に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

(1) 経済状況

当社グループの全世界における営業収入のうち、重要な部分を占める自動車用タイヤの需要は当社グループが製品を販売している国または地域の経済状況の影響を受けます。従って、日本、北米、欧州、アジアなどの主要市場における景気後退及びそれに伴う需要の減少、また、各国による通商政策の動向は、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。また、競業他社との販売競争激化による市場シェアダウン及び価格競争の熾烈化による販売価格の下落も、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 為替レートの影響

当社グループは主として円建で一般商取引、投融資活動等を行っておりますが、米ドルその他の外国通貨建でもこれらの活動を行っております。今後一層の事業のグローバル化の進行に伴い、海外事業のウエイトが高まることが予想されます。したがって、従来以上に外国通貨建の一般商取引、投融資活動等が増加し、外国為替の変動により当社グループの業績及び財務状況に影響を受ける度合いが大きくなります。為替予約の実施等、為替レートの変動によるリスクを最小限にとどめる努力を行っておりますが、当該リスクを完全に回避することはきわめて困難であります。

(3) 季節変動の影響

当社グループの業績は上半期と下半期を比較した場合、下半期の業績がよくなる傾向にあります。特に、寒冷地域で冬場の降雪時に使用する自動車用タイヤ（スタッドレスタイヤ）の販売が下半期に集中することが主な理由であります。従って、降雪時期の遅れや降雪量の減少等が、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 原材料価格の影響

当社グループの製品の主要な原材料は、天然ゴム及び石油化学製品であります。従って、天然ゴム相場の大幅な上昇及び国際的な原油価格の高騰があった場合、当社製品の製造コストに影響を受ける可能性があります。これらの影響を最小限にとどめるべく各種対策を実施しておりますが、吸収できる範囲を超えた場合は、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 資金調達力及びコストの影響

当社グループは資金調達の安定性及び流動性の保持を重視した財務運営を行っておりますが、日本を含めた世界の主要な金融市場で混乱が発生した場合、計画通りに資金調達を行うことができない可能性があります。また、格付会社より当社グループの信用格付けが大幅に下げられた場合、資金調達が制約されるとともに調達コストが増加し、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 有利子負債の影響

当社グループの資産合計に占める有利子負債の割合は、約26.8%（2025年12月31日現在）であります。グループファイナンスの実施によりグループ資金の効率化を行うことで財務体質の改善に取り組んでおりますが、今後の金利動向によっては当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。なお、当社グループの一部の借入契約には財務制限条項が付されております。

(7) 保有有価証券の影響

当社グループが保有する市場性のある有価証券のうち日本株式への投資が大きな割合を占めております。従って、日本の株式市場の変動及び低迷等による有価証券評価損の計上等で、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 投資等に係る影響

当社グループは世界的な自動車用タイヤの需要に対応すべく、北米、中国での新たな生産拠点の建設を進めております。また、日本、アジアを中心に生産能力の増強及び市場ニーズに対応するための設備投資を行っております。この投資により製品の品質向上を図るとともに需要増やニーズの多様化にも対応でき、当社グループの信頼を高め、シェアアップが期待できます。しかしながら、現地の法的規制や慣習等に起因する予測不能な事態が生じた場合、期

待した成果を得ることができなくなるため、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(9) M&A、資本・業務提携による影響

当社グループは、さらなる成長の実現に向けた競争力強化の為、他社の買収や他社との資本・業務提携を行うことがあります。2025年2月4日付にて建設・鉱山用車両向けタイヤなどの生産販売をグローバルに展開するGoodyear社のOTR事業の買収（事業譲受）を行っております。対象事業や過去に買収した会社・事業の業績が買収時の想定を下回る場合、または事業環境の変化や競合状況等により期待する成果が得られないと判断された場合にはのれんの減損損失が発生し、当社グループの業績および財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(10) 退職給付債務

当社グループの退職給付債務及び退職給付費用は割引率、年金資産の期待運用収益率等の一定の前提条件に基づいて数値計算を行っております。実際の割引率、運用収益率等が前提条件と異なる場合、つまり、金利低下、年金資産の時価の下落、運用利回りの低下等があった場合や退職金制度、年金制度を変更した場合、将来の退職給付債務の増加により、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(11) 災害等の影響

当社グループは地震等の自然災害、疾病、テロに直接又は間接的に影響を受ける可能性があります。特に、自然災害については災害に備え、各種対応策を検討し、計画的に実施しております。しかしながら、生産拠点及び原材料の主要な仕入先が所在する地域でこれら事象が発生した場合、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(11-2) 感染症の大流行

当社グループは新型コロナウイルスなどの全世界的な感染症の流行に備え、従業員の安全と社内外への感染拡大抑止を第一に対策を講じておりますが、感染症の拡大や長期化の状況によっては、当社グループが事業を展開している国・地域における活動規制や企業活動の停滞等により、当社グループ全体の事業活動、業績、及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(11-3) 地政学リスク

現下のウクライナ情勢により、ロシアの乗用車用タイヤ生産会社の生産については、状況を注視しながら判断する方針ですが、進展状況や対応によっては今後当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。また、中東情勢を始めとした地政学リスクの高まりや、それに伴う今後の各国・地域の情勢の変化により、当社グループが事業を展開している国・地域における企業活動や物流の停滞等が発生し、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(11-4) 気候変動

当社グループは温室効果ガス排出量の削減などを通じて気候変動への対策を講じておりますが、各国の温室効果ガス排出量削減目標や炭素税の導入による調達・製造コスト上昇などの「移行リスク」や気候変動による洪水や渇水による工場操業停止などの「物理的リスク」により、当社グループ全体の事業活動、業績、及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。これらのリスク管理プロセス及び詳細な分析結果については、「2 サステナビリティに関する考え方及び取組 (2) 気候変動 リスク管理 および 戦略」をご参照ください。

(12) 人権侵害

当社グループは「横浜ゴムグループ人権方針」に基づき、人権デューデリジェンスや苦情処理メカニズムの整備を進めておりますが、サプライチェーンにおける人権侵害や潜在的な負の影響の防止・軽減を適切に行うことができなかった場合、レピュテーションの毀損などにより、当社グループ全体の事業活動、業績、及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(13) 知的財産権の影響

当社グループは技術ノウハウの蓄積と知的財産権の保護に努めておりますが、第三者の知的財産権の侵害を効果的に防止できないことがあります。また、当社グループの製品または技術が、第三者から知的財産権を侵害したとして訴訟を受け、それが認められた場合には、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(14) 製品の品質による影響

当社グループは、品質管理を経営の最重要課題とし、品質管理体制の万全を期しておりますが、製品の欠陥や不良を皆無にすることは困難であります。大規模なリコールや欠陥に起因する多額の損害賠償が起きた場合には、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(15) 法律・規制・訴訟の影響

当社グループは、事業活動を行っている各国において、投資、貿易、為替管理、輸出管理、独占禁止、個人情報保護、環境保護など、当社グループが、展開している様々な事業に関連する法律や規制の適用を受けております。

将来において、国内外における新たな法律や規制の施行又は予期せぬ法律や規則の変更などにより、事業活動の制約やコストの上昇など当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

これらの他、当社グループは国内外の事業活動に関連して、訴訟や各国当局による捜査・調査の対象となる可能性があります。重大な訴訟が提起された場合や、各国当局による捜査・調査が開始された場合、当社グループの業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

(16) 情報セキュリティリスク

当社グループは、グローバルな事業展開に伴うサイバーリスクへの対策を進めておりますが、外部攻撃や災害等によるシステム障害の発生可能性を完全に排除することは困難です。万一、重要な業務の停止や情報の漏洩が生じた場合、当社グループ全体の事業活動、業績、及び財務状況に影響が及ぶ可能性があります。

4 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績の状況

	前連結会計年度	当連結会計年度	増減率
	百万円	百万円	%
売上収益	1,094,746	1,234,959	12.8
タイヤ	980,896	1,121,284	14.3
MB	105,249	105,552	0.3
その他	8,600	8,123	5.6
事業利益	134,379	166,577	24.0
タイヤ	127,157	154,979	21.9
MB	8,577	11,090	29.3
その他	1,360	518	-
調整額	5	11	-
営業利益	119,157	152,901	28.3
税引前利益	115,359	157,186	36.3
親会社の所有者に 帰属する当期利益	74,919	105,398	40.7

(注) 事業利益は、売上収益から売上原価、販売費及び一般管理費を控除して算出しております。

当期における当社グループをとり巻く環境は、国内では、米国関税引き上げを巡る影響はあったものの、年後半にかけて影響は一巡し、雇用や所得環境の改善により、個人消費は緩やかに持ち直しています。また、エネルギー価格の低下などによるコスト減を背景に景況感は全体としては底堅く推移しています。

海外においては、米国は、関税政策を巡る動きが落ち着きつつあるものの、個人消費を中心に景気は減速傾向にあります。欧州は、関税引き上げによる外需の不振が景気の重しとなり、また、中国では外需は好調を維持しているものの、消費や固定資産投資がマイナス成長となるなど内需は減速傾向にあります。

こうした状況の中、当社グループは、既存事業における強みの「深化」と新しい価値の「探索」をさらに推し進め、変革の「総仕上げ」を目指す中期経営計画「Yokohama Transformation 2026 (YX2026)」の取り組みにより、全事業領域で好調な実績となりました。当期の連結売上収益は、1兆2,349億59百万円（前期比12.8%増）、利益面では、連結事業利益は1,665億77百万円（前期比24.0%増）、連結営業利益は1,529億1百万円（前期比28.3%増）、また、親会社の所有者に帰属する当期利益は1,053億98百万円（前期比40.7%増）と、5期連続の増収増益かつ過去最高の業績を更新しました。

タイヤセグメントの売上収益は1兆1,212億84百万円（前期比14.3%増）で、当社グループの連結売上収益の90.8%を占めました。YX2026で掲げる「Best Alternative戦略」が、OHT（オフハイウェイタイヤの略）を含むタイヤセグメント全体で成果を創出し収益構造が大きく転換しています。

タイヤ消費財における新車用の売上収益は、国内での新規納入車種の拡大に加え、欧米においてもSUV・CUV車種を中心に、プレミアムカーへの新車装着の獲得や、その他の新規納入も増加したことにより前期を上回りました。

タイヤ消費財の市販用の売上収益は、戦略的なOE（新車装着）リターンの刈り取りに加え、国内におけるかねてからの丁寧な販売活動の効果や、欧州各国におけるハイインチ品販売への注力、北米におけるオンロード系SUV・CUV用タイヤ販売の強化などにより高付加価値商品販売が伸長したほか、各地域で新規取引先の開拓や既存顧客との取引拡大が順調に進んだことで前期を上回りました。

OHT（オフハイウェイタイヤ）の売上収益は、2025年2月に買収したGoodyear社のOTR（Off-The-Road）事業の業績が加わったこともあり、前期を上回りました。農機用タイヤは、新車用においては、厳しい環境の中でも顧客との関係強化を図ることでシェア向上を実現したほか、市販用においては、当社のマルチブランド戦略の強みを活かし、「Mitas（ミタス）」「Alliance（アライアンス）」「Galaxy（ギャラクシー）」ブランドを中心に、各地域において継続して販売拡大に努めたことで、欧州・北米の主要市場で需要を上回る販売伸長を果たしました。

MB（マルチプル・ビジネス）セグメントの売上収益は1,055億52百万円（前期比0.3%増）で、当社グループの連結売上収益の8.5%を占めました。

ホース配管事業の売上収益は、国内建設機械メーカーの需要減はあったものの、北米自動車メーカーの需要増により前年同期を上回りました。

工業資材事業の売上収益は、コンベヤベルトの安定的な受注や、海洋商品における旺盛な需要の取り込み、防衛

装備品の受注増などにより、前年同期を上回りました。

全社の事業利益は、Goodyear社OTR事業の連結化に伴う一過性費用の計上はありましたが、タイヤ消費財での販売数量増や、「ADVAN（アドバン）」、「GEOLANDAR（ジオランダー）」、ウィンタータイヤをはじめとする高付加価値商品（AGW）やハイインチ品の販売増に加え、MB事業における既存事業の収益性改善、抜本的コスト改善の積み増しや構造改革などの内部努力が寄与し大幅な増益となりました。

(2) 財政状態の状況

当連結会計年度末における資産合計は、前連結会計年度末に比べて2,628億16百万円増加し、1兆9,983億60百万円となりました。

流動資産は営業債権の増加等により、8,261億68百万円（前期比10.2%増）となりました。非流動資産は有形固定資産の増加等により、1兆1,721億92百万円（前期比18.9%増）となりました。

流動負債は有利子負債の増加等により、4,470億41百万円（前期比19.3%増）となりました。また、非流動負債についても有利子負債の増加等により、5,110億89百万円（前期比11.9%増）となりました。

資本合計は親会社の所有者に帰属する当期利益の計上等により1兆402億31百万円（前期比15.1%増）となりました。

(3) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末に比べて288億23百万円減少し、1,073億91百万円となりました。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動による資金の増加は、1,356億30百万円（前連結会計年度比411億33百万円の収入増加）となりました。

これは主として、税引前利益1,571億86百万円、退職給付信託の一部返還を受けたこと等による退職給付に係る資産及び負債の増減額191億56百万円、法人税等の支払額571億25百万円の計上等であります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動による資金の減少は、2,412億98百万円（前連結会計年度比2,399億6百万円の支出増加）となりました。

これは主として、子会社の取得を含む事業譲受による支出1,405億27百万円、有形固定資産の取得による支出1,116億26百万円等であります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動による資金の増加は、683億17百万円（前連結会計年度は632億13百万円の支出）となりました。

これは主として、長期借入れによる収入1,424億87百万円、長期借入金の返済による支出556億49百万円、配当金の支払額158億61百万円等であります。

（資本の財源及び資金の流動性に係る情報）

当社グループの重要な資本的支出の予定及びその資金の調達源については「第3 設備の状況 3 設備の新設、除却等の計画」に記載のとおりであります。

(4)生産、受注及び販売の状況

生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	生産金額(百万円)	前年同期比(%)
タイヤ	825,479	3.9
M B	74,742	14.0
その他	304	10.0
合計	900,525	4.6

(注)1.金額は、販売価格を基礎として算出しております。

2.上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

受注状況

当社は、ごく一部を除いてすべて見込生産であります。

販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	販売金額(百万円)	前年同期比(%)
タイヤ	1,121,284	14.3
M B	105,552	0.3
その他	8,123	5.6
合計	1,234,959	12.8

(注)1.セグメント間の取引については、相殺消去しております。

2.上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(5)重要な会計方針並びに重要な会計上の見積り及び仮定

当社グループの連結財務諸表は、IFRSに準拠して作成しております。連結財務諸表の作成に当たって、必要と思われる見積りは、合理的な基準に基づいて実施しております。

なお、当社グループの連結財務諸表で採用する重要な会計方針、会計上の判断、見積り及び仮定は、「第5. 経理の状況 連結財務諸表注記 3. 重要性のある会計方針 4. 重要な会計上の判断、見積り及び仮定」に記載しております。

5 【重要な契約等】

(企業結合等関係)

「第5 経理の状況 連結財務諸表注記(33.企業結合)」に記載しております。

(金銭消費貸借契約)

当社は、財務上の特約が付された金銭消費貸借契約を締結しております。

契約に関する内容等は、「第5 経理の状況 連結財務諸表注記(19.社債及び借入金)」に記載しております。

6 【研究開発活動】

当社グループの研究開発は、会社の基盤技術に関する研究開発活動を研究先行開発本部が、直接商品に係る研究開発活動をタイヤ、MB及びその他の技術部門が担当となり、世界的な技術の先端に挑戦し、世界初の商品を市場に提供することで、お客様に満足いただくべく努力を重ねています。

当連結会計年度における研究開発費の総額は、21,382百万円であります。

当社研究先行開発本部においては、環境貢献企業における研究部門として、精緻でかつ高度な分析・解析技術をベースに物質構造や反応機構等の解明による新素材開発やシミュレーション技術の開発を行い、環境にやさしいタイヤ材料の開発や電子材料用素材・省エネルギー関連への適用技術の開発などを中心に技術の先端に挑戦しています。また、機械学習（AI）を活用した開発の高度化や効率化にも積極的に取り組んでいます。

研究先行開発本部の研究開発費の金額は、929百万円であります。

セグメントごとの研究開発活動を示すと、次のとおりであります。

(1) タイヤ

既存事業における強みの「深化」と、大変革時代のニーズに応える新しい価値の「探索」を同時に推進し、「YX2026」の次世代の成長に向けた「変革」を図ることを目標とし以下のような活動をしました。

当連結会計年度における研究開発費の金額は、18,387百万円であります。

1) AIでタイヤ打音から空気圧を判定する技術の実証実験を開始

トラック・バス用タイヤの打音からAI（人工知能）を活用して空気圧状態を判定する技術を開発し、実証実験を開始しました。

トラック・バス用タイヤの空気圧の日常点検において、依然としてハンマーによる打音点検が主流となっております。しかし、打音のみで空気圧が適正かを判断することは熟練のドライバーでも容易ではなく、手軽かつ正確に空気圧の状態を判定できる方法が求められています。こうしたニーズに応え、㈱METRIKAと協力して、さまざまな環境音の中からタイヤの打音を識別し、打音に基づいて空気圧を予測するAIアルゴリズムを開発しました。さらに、専用のアプリケーションを試作し、専用機器の設置や判定スキルの習得なしで、誰でも高精度な空気圧点検が可能になります。今後は実証実験を通じて、IoTを活用して最適な商品および運用プランの提案を迅速に行う横浜ゴム独自の次世代タイヤマネジメントシステム「T.M.S（ティーエムエス）」との連携も計画しています。

2) 植物原料由来などのエタノールから高効率でブタジエンを生成する技術のベンチ設備を導入

当社と日本ゼオン㈱（以下、ゼオン）は、植物原料由来などのエタノールからブタジエンを高効率で生成する技術を実証するためのベンチ設備 1を山口県周南市のゼオン徳山工場内に建設することを決定しました。ベンチ設備は、2026年から稼働を開始し、ブタジエンの確保並びに量産に向けた各種データを収集していきます。

今回実施する実証実験は、植物原料由来などのエタノールを高効率な触媒によってブタジエンに変換する技術を実証するもので、植物原料由来などの合成ゴムを量産化する技術確立の第一歩となります。ゼオンはベンチ設備で生成したブタジエンからポリブタジエンゴム（ブタジエンゴム）を試作し、当社はそのブタジエンゴムを使用したタイヤの試作および走行テストを実施し、大規模実証に向けたデータ収集を行います。

商業化に向けた連続実証設備（パイロット設備）へ移行するために必要なデータを取得する大規模設備

3) ゴム摩擦研究の第一人者であるB. N. J. Persson博士とマルチスケール凹凸路面でのゴム摩耗予測に関する世界初の理論モデルを構築

ゴムの摩擦・接触に関する研究の第一人者であるBo Nils Johan Persson（ボ・ニルス・ヨハン・ペルソン）博士との共同研究により、凹凸路面上のゴム摩耗率と摩耗粉粒子のサイズ分布を予測する理論モデルを世界で初めて構築しました。本研究は2025年2月21日付、物理学術誌「The Journal of Chemical Physics」（米国物理協会）において、掲載論文の中で最も注目に値する研究が選ばれる表紙論文に選ばれました。

当社は長年のゴム研究における実績と高い技術開発力が認められ、マルチスケールコンサルティングと契約し、Persson博士と共にゴムと路面の摩擦・摩耗に関する研究を進めてきました。このたび世界で初めて、理論化が難しかった凹凸路面上のマルチスケール（ナノ～センチレベル）におけるゴム摩耗挙動の理論モデルを構築しました。ドライおよびウェット滑走下でのゴムの摩耗挙動を様々な接触圧と速度で計測した結果、理論モデルが予測する摩耗率（単位滑走距離あたりの質量損失）と摩耗粉粒子のサイズ分布が実験結果と合致し、本理論がそ

これらの予測に使用できることを確認しました。

当社は今後もPersson博士およびマルチスケールコンサルティングとの研究を進め、高次元の耐摩耗性能を実現したタイヤ開発を追求するとともに、EVなど高重量な電動車の増加に伴い、ますます重要性を増すタイヤ摩耗による環境課題の解決に貢献していきます。

4) 天然ゴムの持続可能な生産・利用を目指す国際共同研究に協力

当社が協力会社として参画する国際共同研究「ゴムノキ葉枯れ病防除のための複合的技術開発（以下、本研究）」の成果が2025年12月9日、インドネシア大学で開催された「5th Joint Coordinating Committee Meeting (toward application of joint technologies for new breeding of natural rubber trees)」で発表されました。本研究はゴムノキの病害抑制により天然ゴムの持続可能な生産・利用を目指すもので、外務省と文部科学省の支援のもと、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）、独立行政法人国際協力機構（JICA）が共同で実施している「地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）」の研究課題に採択されています。

当社はプロジェクトが立ち上げられた2020年より協力会社として本研究に参画し、2024年からはスクリーニングにより選定された殺菌剤が天然ゴムの品質に与える影響の調査を開始。すでに大規模農園でのフィールド評価において、適切に散布・使用すれば殺菌剤がゴムの特性および加硫物性に影響を及ぼさないことが確認できており、現在は本研究がターゲットとする小規模農園での影響調査に協力しています。当社は「持続可能な天然ゴムの調達方針」の中で、小規模農家を含むサプライチェーンに関わる方々への支援を掲げており、本研究への参画により、天然ゴムの生産および農家の収入の安定化に貢献します。なお、SATREPSの研究課題では天然ゴム種子の有効利用により環境問題解決を目指す「未利用天然ゴムの種の持続的カスケード利用による地球温暖化およびプラスチック問題緩和策に関する研究」にも連携機関として参画しています。

<OHT事業>

OHTのすべてのカテゴリーにブランドを持つマルチブランド戦略に基づき、各ブランドの提供価値の最大化を目指して研究開発活動を行っています。

Trelleborg、Mitasの両ブランドで事業展開するYokohama TWSは、市場で最も先進的な技術の開発を通じて、農業機械用タイヤや産業車両用タイヤを中心にプレミアムサプライヤーとしての地位を強化し続けています。また、Alliance、Galaxy等のブランドの農業機械・建設車両用タイヤなどを展開するYokohama ATG（=Y-ATG、=旧YOHT）は、開発リードタイムの短さを活かして、ニッチ商品の早期開発・投入などを通じて、バリューセグメントでのプレゼンスを高めています。

1) アダプティブ・タイヤ・マネジメント・システム（ATMS）

ATMSは、荷重、圧力、温度などの作業条件をリアルタイムに検知し、常に最適なトラクターの車両設定を提案することで、農業の生産性の向上を実現する当社独自のシステムです。対応車種の拡大に向け、現在OEM各社による検証が進められています。

2) 製品・材料開発

厳しい使用条件下における農機用タイヤの耐久性と性能向上を目的とした先進材料技術への投資を行っています。また、持続可能なコストでバイオ素材とリサイクル素材の採用を推進する取り組みを継続しています。2025年6月には、特定製品の5,000時間走行保証プログラムを開始しました。

3) ラバートラック

世界的な需要拡大傾向にあるラバートラック市場にて、従来の農業における生産性の概念を再定義するような次世代ソリューションの提供を目指し、革新的な製品の開発に取り組んでいます。

(2)MB

「成長性・安定性の高いポートフォリオへの変革」をテーマに掲げ、安定収益の確保を目指した技術開発を積極的に行いました。

当連結会計年度における研究開発費の金額は、1,850百万円であります。

1) 柔軟性とコンパクト性を追求した高圧ホース「レベックスC（CWP）」シリーズを新発売

建設・土木機械や工作機械、産業機械まで幅広く使用できる高圧ホース「レベックス」シリーズの新たなライ

ンアップとして、柔軟性とコンパクト性を追求した「レベックスC (CWP)」シリーズを2025年1月から日本国内で販売を開始しました。最高使用圧力35MPa、内径19mmと25mmの2サイズからスタートし、今後は他のサイズも拡充していく計画です。新商品の「レベックスC (CWP)」は、従来品である「レベックス (NWP)」の特徴である優れた耐久性、耐熱性、耐摩耗性、耐候性を踏襲しながら、外径をよりコンパクトに、柔軟性の向上（曲げ剛性の低減）や10%以上の軽量化（25mmサイズの場合、当社比）などを達成。耐久性能と扱いやすさを高いレベルで両立させました。

ISO18752 BC級相当のインパルス試験に合格。これにより、配管スペースが狭く屈曲が必要な内部配管など、これまで高圧ホースの取り回しが難しかった配管でもよりスムーズな作業が可能となります。

2) 省エネルギー性能を高めた難燃性コンベヤベルト「FLAME GUARD ECO」を発売

難燃性コンベヤベルトとして好評を博している「FLAME GUARD」シリーズから省エネルギー性能を高めたコンベヤベルト「FLAME GUARD ECO (フレイムガード・エコ)」を発売しました。

「FLAME GUARD ECO」は火災防止のために難燃性コンベヤベルトが必要とされる港湾や火力発電所の石炭搬送ラインでの使用を想定し開発しました。省エネ性能向上にあたっては、世界トップレベルの省電力性能を実現した横浜ゴムのコンベヤベルト「ECOTEX」で培った技術を活用し、ゴム配合を最適化。これにより、エネルギーロス発生の一因であるベルトがローラーを乗り越える時のゴム変形を小さくし、走行抵抗を抑制しコンベヤの消費電力削減に貢献します。難燃性と省エネ性能の両立により、安全な操業に貢献するとともに、エネルギーコスト削減やCO2排出量削減による環境負荷低減に寄与します。

特殊配合ゴムにより自己消火性を持つ「FLAME GUARD」シリーズとして、難燃性、難燃超耐摩耗性、難燃重耐油性、難燃中温耐熱性、難燃高温耐熱性のコンベヤベルトを品揃えしています。今回、ベルトがローラー上を通過する際に発生する乗り越え抵抗を大幅に低減させた「FLAME GUARD ECO」の発売により、さらに強力な商品ラインアップとなりました。

上記のほか、ゴルフクラブ等のスポーツ用品に係る研究開発費が 216百万円あります。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループは、成長市場、成長分野および研究開発を中心とした設備投資を実施しました。

タイヤ事業では、新商品の上市およびタイヤの高性能化に対応するため、品質向上等に向けた投資を実施しました。また、当社国内工場においては生産性向上および製造設備の増強、海外子会社においては増産のための工場拡張等を行いました。

MB事業では、海外子会社において自動車用ホースアセンブリ増産のための工場拡張及び生産能力の増強等を図りました。

この結果、当期において実施した当社グループの設備投資総額は1,100億円となりました。

2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (人)
			建物 及び構築物	機械装置 ・運搬具	土地 (面積千㎡)	その他 (注)1	合計	
本社・平塚製造所 (神奈川県平塚市)他 (注)2	タイヤ、MB、 その他	生産・その他設 備	17,476	13,427	7,643 (1,771)	7,799	46,344	2,037
三重工場 (三重県伊勢市)	タイヤ	生産設備	2,773	7,045	2,211 (257)	5,303	17,331	951
三島工場 (静岡県三島市)	"	"	1,872	3,080	120 (113)	3,294	8,366	603
新城工場 (愛知県新城市)	"	"	9,712	15,759	3,742 (351)	6,157	35,370	1,158
茨城工場 (茨城県小美玉市)	MB	"	1,086	2,124	538 (146)	100	3,848	208
尾道工場 (広島県尾道市)	タイヤ	"	2,184	1,488	1,610 (194)	344	5,627	364
長野工場 (長野県下伊那郡)	MB	"	1,260	821	619 (68)	76	2,777	238

(2) 国内子会社

会社名・事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (人)
			建物 及び構築物	機械装置 ・運搬具	土地 (面積千㎡)	その他 (注)1	合計	
㈱ヨコハマタイヤジャパン 本社(東京都港区)他	タイヤ	販売設備	4,265	643	11,881 (161)	8,931	25,720	2,775
日本ジャイアントタイヤ㈱ 本社・工場(兵庫県たつの市)	"	生産・その他 設備	6,593	10,502	622 (269)	4,074	21,790	352
YTMX Japan合同会社 工場(メキシコ コアウイラ 州)	"	"	-	-	-	9,799	9,799	1

(3) 在外子会社

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (人)
				建物及び 構築物	機械装置 ・運搬具	土地 (面積千㎡)	その他 (注)1	合計	
Yokohama Tire Manufacturing Virginia LLC.	本社・工場 (米国 バージニア 州)	タイヤ	生産・その他設 備	1,814	3,858	210 (240)	942	6,824	575
Yokohama Tire Philippines, Inc.	本社・工場 (フィリピン ク ラーク特別経済区)	"	"	15,434	11,748	- (447)	7,872	35,053	3,572
杭州優科豪馬 輪胎有限公司	本社・工場 (中華人民共和國 浙江省)	"	"	1,030	5,076	- (133)	1,557	7,662	727
Yokohama Tire Manufacturing (Thailand)Co.,Ltd.	本社・工場 (タイ ラヨン県)	"	"	3,397	9,262	3,476 (2,118)	5,171	21,307	1,736
蘇州優科豪馬 輪胎有限公司	本社・工場 (中華人民共和國 江蘇省)	"	"	4,079	10,638	- (202)	3,489	18,206	72
LLC Yokohama R.P.Z.	本社・工場 (ロシア リベック 州)	"	"	1,482	191	- (290)	212	1,885	715
Yokohama Tire Manufacturing Mississippi LLC.	本社・工場 (米国 ミシシッピ 州)	"	"	10,521	6,996	2,271 (2,306)	960	20,748	768
Yokohama Tyre Vietnam Inc.	本社・工場 (ベトナム ビン ジュン省)	"	"	405	1,063	- (88)	230	1,699	457
Yokohama India Private Limited	本社・工場 (インド ハリアナ 州)	"	"	2,800	7,174	2,085 (100)	1,096	13,156	941
Yokohama Tire Corporation	本社 (米国 カリフォル ニア州)	"	"	428	1,274	- (5)	5,528	7,230	899
ATC Tires Private Ltd.	本社・工場 (インド マハー ラシュトラ州)	"	"	7,299	32,602	- (950)	10,031	49,931	3,244
ATC Tires AP Private Ltd.	本社・工場 (インド アンドラ プラデシュ州)	"	"	7,311	26,416	1,725 (393)	17,234	52,687	1,949
Yokohama TWS Lanka (Pvt.) Ltd.	本社・工場 (スリランカ 西部 州)	"	"	119	1,191	12 (30)	2,235	3,557	684
Yokohama TWS Tyres Lanka (Pvt.) Ltd.	本社・工場 (スリランカ 西部 州)	"	"	362	668	50 (50)	353	1,433	143
Yokohama TWS LK (Pvt.) Ltd.	本社・工場 (スリランカ 西部 州)	"	"	107	312	1 (20)	541	961	193
Yokohama TWS North America, Inc.	本社・工場 (米国 デラウェア 州)	"	"	5,212	10,254	1,009 (734)	3,906	20,382	324
Yokohama TWS Czech Republic a.s.	本社・工場 (チェコ共和国 プ ラハ)	"	"	9,217	8,223	7,696 (346)	5,994	31,129	1,082
Yokohama TWS S.p.A.	本社・工場 (イタリア ラツィ オ州)	"	"	2,493	6,108	791 (240)	3,723	13,115	740

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (人)
				建物及び 構築物	機械装置 ・運搬具	土地 (面積千㎡)	その他 (注)1	合計	
Yokohama TWS Serbia d.o.o.	本社・工場 (セルビア ルマ)	タイヤ	生産・その他設 備	2,415	3,727	11 (119)	847	7,000	474
Yokohama TWS (Xingtai) Co., Ltd.	本社・工場 (中華人民共和国 河北省)	"	"	492	2,011	- (85)	847	3,350	273
Yokohama TWS (Hebei) Co., Ltd.	本社・工場 (中華人民共和国 河北省)	"	"	414	1,305	- (171)	1,268	2,988	225
Yokohama TWS Brazil Industria e Comercio de Borrachas e Polimeros Ltda.	本社・工場 (ブラジル バイー ア州)	"	"	145	518	0 (101)	234	898	158
Yokohama TWS Slovenija d.o.o.	本社・工場 (スロベニア ク ラーニ)	"	"	-	664	- (9)	222	886	181
Yokohama TWS Latvia LSEZ SIA	本社・工場 (ラトビア リア パーヤ)	"	"	-	1,517	- (31)	4,393	5,909	170
YOKOHAMA TWS ROMANIA S.R.L.	本社・工場 (ルーマニア メヘディンティ)	"	"	1,621	3,996	334 (272)	932	6,882	50
Yokohama Tire Mexico Real Estate, S.A. DE C.V.	本社・工場 (メキシコ コアウ イラ州)	"	"	-	9	4,568 (608)	8,882	13,458	-
杭州錢塘優科豪馬輪胎 有限公司	本社・工場 (中華人民共和国 浙江省)	"	"	-	-	- (337)	32,334	32,334	71
Yokohama Industries Americas Inc.	本社・工場 (米国 ケンタッ キー州)	MB	"	973	1,395	131 (182)	1,053	3,551	387
Yokohama Industries Americas de Mexico, S. de R.L. de C. V.	本社・工場 (メキシコ アグ アスカリエンテス 州)	"	"	1,378	936	456 (27)	3,072	5,842	516

- (注) 1 帳簿価額のうち「その他」は、工具・器具・備品、使用権資産及び建設仮勘定の合計です。
 なお、金額には消費税等を含んでおりません。
- 2 「本社・平塚製造所(神奈川県平塚市)他」には、茨城県久慈郡のタイヤテストコースや北海道旭川市のタイヤテストセンター等を含んでおります。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1)重要な設備の新設等

区分	セグメントの名称	事業所(所在地)	設備の内容	投資予定金額(百万円)		資金調達方法	着手及び完了予定		完成後の増加能力		
				総額	既支払額		着手	完了			
(提出会社)	タイヤ	平塚製造所 (神奈川県平塚市)	生産設備	6,840	2,123	自己資金	2025/1	2026/12			
		三重工場 (三重県伊勢市)	"	7,576	4,185	"	"	"			
		三島工場 (静岡県三島市)	"	6,958	2,978	"	"	"			
		新城工場 (愛知県新城市)	"	13,106	6,583	"	"	"			
		尾道工場 (広島県尾道市)	"	928	488	"	"	"			
	MB	平塚製造所 (神奈川県平塚市)	生産設備	3,250	1,555	自己資金	2025/01	2026/12			
		茨城工場 (茨城県小美玉市)	"	479	271	"	"	"			
		長野工場 (長野県下伊那郡)	"	406	213	"	"	"			
	(子会社)	タイヤ	ATC Tires AP Private Ltd. Yokohama Tire Mexico Real Estate, S.A. DE C.V. 杭州錢塘優科豪 馬輪胎有限公司	本社・工場 (インド・アンドラ プラデシュ州)	生産設備	41,360	37,048	自己資金 および借入金	2020/9	2026/12	生産能力 47千 ⁺ 本/年 ゴム量ベース
			本社・工場 (メキシコ・コアウ イラ州)	"	52,100	23,535	自己資金 および借入金	2024/10	2027/3	生産能力 5百万本/年	
本社・工場 (中華人民共和国・浙 江省)			"	36,700	25,861	自己資金 および借入金	2024/7	2026/6	生産能力 9百万本/年		

(注) 上記金額には消費税等を含んでおりません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	400,000,000
計	400,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2025年12月31日)	提出日現在 発行数(株) (2026年3月25日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	166,396,381	166,396,381	東京証券取引所 プライム市場	単元株式数は 100株であります。
計	166,396,381	166,396,381		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当する事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当する事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当する事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当する事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減額 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2025年5月30日 (注)	3,152	166,396		38,909		31,953

(注) 自己株式の消却による減少であります。

(5) 【所有者別状況】

(2025年12月31日現在)

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満 株式の状況 (株)
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数 (人)		78	30	222	368	37	10,912	11,647	
所有株式数 (単元)		961,670	80,042	68,530	347,394	588	204,422	1,662,646	131,781
所有株式数 の割合(%)		57.839	4.814	4.121	20.894	0.035	12.294	100.00	

(注) 1 自己株式8,693,419株は、「個人その他」に86,934単元、「単元未満株式の状況」に19株含まれておりま
 ず。

2 上記「その他の法人」には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が1単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

(2025年12月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を 除く。)の 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
日本マスタートラスト信託銀行 株式会社(信託口)	東京都港区赤坂1丁目8番1号	29,993	19.01
株式会社日本カストディ銀行 (信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番12号	25,023	15.86
朝日生命保険相互会社	東京都新宿区四谷1丁目6番1号	10,905	6.91
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区大手町1丁目5番5号	6,001	3.80
野村信託銀行株式会社(投信 口)	東京都千代田区大手町2丁目2番2号	2,697	1.71
S M B C日興証券株式会社	東京都千代田区丸の内3丁目3番1号	2,523	1.60
株式会社横浜銀行	神奈川県横浜市西区みなとみらい3丁目1番 1号	2,499	1.58
J Pモルガン証券株式会社	東京都千代田区丸の内2丁目7番3号	2,223	1.40
横浜ゴム取引先持株会	神奈川県平塚市追分2番1号	2,216	1.40
第一生命保険株式会社	東京都千代田区有楽町1丁目13番1号	1,924	1.22
計		86,008	54.53

(注) 1. 上記のほか、当社所有の自己株式が8,693千株あります。

2. 2021年5月7日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書(変更報告書)において、株式会社三菱UFJ
 フィナンシャル・グループ(株式会社三菱UFJ銀行他)が2021年4月26日現在で以下の株式を保有している
 旨、2025年9月19日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書(変更報告書)において、三井住友信託
 銀行株式会社他が2025年9月15日現在で以下の株式を保有している旨、また、2025年10月17日付で公衆の縦覧
 に供されている大量保有報告書(変更報告書)において、野村證券株式会社他が2025年10月14日現在で以下
 の株式を保有している旨がそれぞれ記載されているものの、当社として2025年12月31日現在における実質所
 有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

なお、大量保有報告書(変更報告書)の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
株式会社三菱UFJフィナンシャ ル・グループ(株式会社三菱UFJ 銀行他)	東京都千代田区丸の内1丁目4番5号	6,404	3.84
三井住友信託銀行株式会社他	東京都千代田区丸の内1丁目4番1号	10,026	6.03
野村證券株式会社他	東京都中央区日本橋1丁目9番1号	18,253	10.97

3. 2025年9月12日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書(変更報告書)において、株式会社みずほ銀行他が2025年9月5日現在で以下の株式を保有している旨が記載されているものの、当社として2025年12月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況は株主名簿上の所有株式数に基づき記載しております。

なお、大量保有報告書(変更報告書)の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区大手町1丁目5番5号	7,859	4.72
アセットマネジメントOne株式会社	東京都千代田区丸の内1丁目8番2号	12,570	7.55
アセットマネジメントOneインターナショナル	30 Old Bailey, London, EC4M 7AU, UK	1,214	0.73
計		21,644	13.01

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

(2025年12月31日現在)

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 8,693,400		
完全議決権株式(その他)	普通株式 157,571,200	1,575,712	
単元未満株式	普通株式 131,781		
発行済株式総数	166,396,381		
総株主の議決権		1,575,712	

(注) 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が100株含まれております。

また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数1個が含まれております。

【自己株式等】

(2025年12月31日現在)

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 横浜ゴム株式会社	神奈川県平塚市追分2番1号	8,693,400		8,693,400	5.22
計		8,693,400		8,693,400	5.22

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

会社法第155条第3号及び会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当する事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

会社法第155条第3号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2025年2月19日)での決議状況 (取得期間 2025年2月20日～2025年8月31日)	2,400,000	6,000,000,000
当事業年度前における取得自己株式		
当事業年度における取得自己株式	1,838,000	5,999,734,100
残存決議株式の総数及び価額の総額	562,000	265,900
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	23.42	0.01
当期間における取得自己株式		
提出日現在の未行使割合(%)	23.42	0.01

(注) 当期間における取得自己株式には2026年3月1日から有価証券報告書提出日までの取得株式数は含めておりません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	1,753	8,760,671
当期間における取得自己株式	213	1,362,020

(注) 当期間における取得自己株式には2026年3月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	60,579	188,521,848		
消却の処分を行った取得自己株式	3,152,700	5,678,313,838		
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他				
保有自己株式数	8,693,419		8,693,632	

(注) 当期間における保有自己株式数には2026年3月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び買増請求による売渡を含む取得株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、将来の事業展開と経営体質の強化のために必要な内部留保を図りつつ、配当につきましては、安定した配当を継続することを基本方針としております。

また、当社の剰余金の配当は、中間配当及び期末配当の年2回行うことを基本的な方針としております。

なお、当社は、会社法第459条第1項の規定に基づき、取締役会の決議によって剰余金の配当を行うことができる旨を定款に定めておりますが、期末配当の最終決定は、株主の皆様の意見を反映できるよう株主総会において決定することを基本としております。

内部留保資金の用途につきましては、今後の事業展開への備えと研究開発費用として活用することとしております。

上記基本方針のもと、当事業年度の期末配当につきましては、業績及び財務状況を勘案、1株当たり86円を、2026年3月27日開催予定の定時株主総会で決議して実施する予定であります。これにより、年間配当金につきましては、既に実施した中間配当金と合わせまして、1株当たり134円の予定であります。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金総額(百万円)	1株当たりの配当額(円)
2025年8月12日 取締役会決議	7,570	48
2026年3月27日 定時株主総会決議(予定)	13,562	86

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

・コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

横浜ゴムグループは、「企業理念」の下に健全で透明性と公平性の有る経営を実現するコーポレート・ガバナンス体制を築き、さらにこの体制の充実と強化に努めております。

これにより、企業価値の継続的な向上が図れる経営体質とし、すべてのステークホルダーから「ゆるぎない信頼」を得られる経営を目指します。

株主の権利・平等性の確保

当社は、株主の権利が実質的に確保されるよう適切な対応を行うとともに、株主がその権利を適切に行使することができる環境の整備を行っています。

また、当社は、株主の実質的な平等性を確保しており、特に、少数株主や外国人株主については、株主の権利の実質的な確保、権利行使に係る環境や実質的な平等性の確保に課題や懸念が生じやすい面があることから、十分な配慮を行っています。

株主以外のステークホルダーとの適切な協働

会社の持続的な成長と中長期的な企業価値の創出は、従業員、顧客、取引先、債権者、地域社会をはじめとする様々なステークホルダーによるリソースの提供や貢献の結果であることを十分に認識し、これらのステークホルダーとの適切な協働に努めます。

取締役会・経営陣は、これらのステークホルダーの権利・立場や健全な事業活動倫理を尊重する企業文化・風土の醸成に向けてリーダーシップを発揮します。

適切な情報開示と透明性の確保

当社は、会社の財政状態・経営成績等の財務情報や、経営戦略・経営課題、リスクやガバナンスに係る情報等の非財務情報について、法令に基づく開示を適切に行うとともに、法令に基づく開示以外の情報提供も積極的に行っています。

その際、取締役会は、開示・提供される情報が株主との間で建設的な対話を行ううえでの基盤となることも踏まえ、そうした情報（とりわけ非財務情報）が、正確で利用者にとって分かりやすく、情報として有用性の高いものとなるように努めています。

取締役会等の責務

当社は、経営の意思決定・監督体制と業務の執行体制を分離し、効率的な経営・執行体制の確立を図るとともに社外取締役を選任し、透明性の高い経営の実現に取り組んでいます。

6名の社外取締役を選任することにより、取締役に対する実効性の高い監督体制を構築しています。また、このうち2名は監査等委員である社外取締役として選任し、取締役の職務執行に対する独立性の高い監査体制を構築しています。

株主との対話

当社は、持続的な成長と中長期的な企業価値向上のためには、株主を含む投資家などと積極的な対話を行い、その意見や要望を経営に反映させ、当社を成長させていくことが重要であると認識しています。

そのため、IR・SR体制を整備し、当社の経営戦略や経営計画に対する理解を得るため、経営陣幹部が出席する決算説明会を年4回行うなど、株主や投資家への積極的な情報発信に努めています。

企業統治の体制

(企業統治の体制の概要とその体制を採用する理由)

当社は、取締役の職務執行の監査等を担う監査等委員を取締役会における議決権を持つ構成員とすることにより、取締役会の監督機能を強化し、更なる監視体制の強化を通じて、より一層のコーポレート・ガバナンスの充実を図るため、2023年3月30日開催の第147回定時株主総会の決議をもって監査役会設置会社から監査等委員会設置会社へ移行しております。

当社における企業統治の体制は、会社法上の機関（株主総会、代表取締役、取締役会、監査等委員会、会計監査人）に加え、経営の監督と業務の執行を明確化し経営の意思決定及び業務執行の迅速化を徹底するため、執行役員制度を採用しております。

そして、トップマネジメントの戦略機能を強化するため、取締役を主要メンバーとする経営会議を設け、事業計画の達成状況の把握と事業戦略に関する協議を行っております。

なお、当社は、役員の人事、処遇の透明性と公平性を確保すべく、構成員として社外取締役を含む「役員人事・報酬委員会」を設置し、審議の上取締役会にて決定する体制を採用しております。当委員会は代表取締役会長兼CEO、代表取締役社長兼COO、及び独立社外取締役3名の計5名により構成されています。（役員人事・報酬委員会の構成は「役員の報酬等」の項をご参照。）

当社は、コンプライアンス体制を確立し、企業倫理、法令遵守、情報セキュリティ、個人情報保護、環境保護等に対する従業員の意識をさらに高め、企業としての社会的責任を果たすために、「コンプライアンス委員会」、「個人情報保護管理委員会」、「リスクマネジメント委員会」の各委員会及び「中央防災会議」、「環境推進会議」等を設けております。そして、その活動内容を定期的に社長以下社内取締役で構成される「CSR会議」にて報告し、内容を共有しています。

(企業統治に関する事項)

・内部統制システムの整備の状況

1．当社及び当社グループ会社各社（以下、総称して「当社グループ」といいます）の取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- (1) 当社グループの取締役及び使用人は、法令及び定款を遵守し、また横浜ゴムグループの「企業理念」「行動指針」に従い、忠実に職務を果たします。さらに、上記「行動指針」に反社会的勢力や団体とは一切の関係を遮断することを定め、毅然とした態度で反社会的勢力を排除します。
- (2) 当社は、コンプライアンス担当取締役を委員長とするコンプライアンス委員会及びその実行部門としてのコンプライアンス推進室を設置し、当社グループにおけるコンプライアンスに係る諸施策を継続して実施するとともに、その活動状況を取締役会及び監査等委員会に報告します。
- (3) 当社の内部監査部門は、コンプライアンス担当部署と連携のうえ、当社グループへの内部監査を実施します。
- (4) 当社グループ（国内）の取締役及び使用人は、内部通報窓口としてのコンプライアンス・ホットラインを利用して当社のコンプライアンス推進室または外部の弁護士に対して直接通報を行うことができ、通報をしたことによって不利益な取り扱いを受けないことを確保します。
- (5) 当社は、当社グループに重大な法令若しくは定款違反またはその他コンプライアンスに係る重大な事実が発見された場合、直ちにコンプライアンス委員会を招集し、委員長及び監査等委員会に報告のうえ、外部専門家等と協力しながら解決を図る体制を構築します。

2．当社の取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

- (1) 当社は、取締役の職務の執行に係る文書その他の重要な情報について、「文書管理規則」、「営業秘密管理規則」、「個人情報管理規則」及び「情報セキュリティ管理規則」に基づき、適切に作成、保存及び管理します。
- (2) 当社の取締役は、常時これら保存された情報を閲覧できるものとします。

3．当社グループの損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- (1) 当社は、当社グループを取り巻くリスクからの防衛体制を強固なものとするべく、リスクマネジメント担当役員を議長とする「リスクマネジメント委員会」を設置し、「リスクマネジメント委員会規則」に基づき、経営に重大な影響を及ぼすリスクを横断的に管理し、適切に対応します。
- (2) 当社は、当社グループのコンプライアンス、安全衛生、災害、環境、情報セキュリティ、輸出管理等に係わるそれぞれのリスクカテゴリーごとに 専門の委員会を設置し、リスクの管理を行います。

- (3) 前項に基づき設置された各委員会の事務局は、自委員会が所管するリスクの管理状況について、定期的に、取締役会や経営会議等において報告します。
 - (4) 当社は、当社グループにおいてリスク事象が発生した場合は、直ちに当該事象に対応する委員会を招集し、委員長及び監査等委員会に報告のうえ、外部専門家等と協力しながら解決を図る体制を構築します。
4. 当社グループの取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- (1) 当社は、執行役員制度を導入し、取締役会の意思決定機能及び監督機能の強化を図ります。
 - (2) 当社は、取締役会の運営を定める「取締役会規則」及び社内各組織の機能や運営基準を定める社則を定め、これら規則に基づいて取締役会を開催します。
 - (3) 当社は、当社グループの経営方針及び経営戦略に係わる重要事項については、「経営会議規則」に基づき、経営会議にて十分に審議したうえで、取締役会に諮ります。
 - (4) 当社は、当社グループの経営計画を定め、この目標達成に向けて取締役及び各部門が実施すべき具体的な課題及び施策を明確化します。
5. 当社グループにおける業務の適正を確保するための体制
- (1) 当社グループの予算は、当社の経営会議での承認を得たうえで執行します。また、当社グループの事業内容は、定期的に取締役会及び経営会議に報告します。
 - (2) 当社は、「関係会社会計処理要領」の規定に基づき、当社グループの決算を実施します。
 - (3) 当社の内部監査部門は、当社グループに対して、会計監査、業務監査及びコンプライアンス監査を計画的に実施し、その結果を取締役、監査等委員会及び担当部署に報告する体制を構築します。
 - (4) 当社は、当社グループ会社各社が所属する事業部門に、各グループ会社の内部統制を担当する部署を定め、特定のグループ会社において問題が発生した場合は、当該グループ会社が自ら当該部署に報告する仕組みを構築します。
 - (5) 当社は、当社グループ会社各社に対して、当社グループ会社各社の経営上の重要事項に関して、当社の事前承認を取得し、または、当社へ事後報告をする体制を構築します。
6. 当社の監査等委員会の職務を補助すべき取締役及び使用人に関する事項
- 当社は、「監査等委員会監査等基準」に基づき、監査等委員会事務局を設置します。
7. 当社の監査等委員会の職務を補助すべき取締役及び使用人の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性及び当該使用人に対する監査等委員会の指示の実効性の確保に関する事項
- (1) 当社は、「監査等委員会監査等基準」に基づき、監査等委員会事務局に所属する取締役及び使用人について、当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性を確保します。
 - (2) 監査等委員会事務局に所属する取締役及び使用人の人事異動、人事評価等については、当社の監査等委員会の意見を尊重し、同意を必要とします。
 - (3) 監査等委員会事務局に所属する取締役及び使用人は、当社の業務執行に係る役職を兼務しないこととします。
 - (4) 監査等委員会事務局に所属する取締役及び使用人は、当社の監査等委員に同行し、または監査等委員会の指示を受けて、当社の会計監査人や当社グループ会社各社の監査役と定期的に意見交換をする場に参加し、必要とする資料の提出を要求するなど、情報を収集する権限を有します。
8. 当社グループの取締役及び使用人並びに当社グループ会社各社の監査役が当社の監査等委員会に報告するための体制その他監査等委員会への報告に関する体制
- (1) 当社の監査等委員は、当社の取締役会、経営会議、各委員会及びその他の重要な会議に出席し、業務執行に関する報告を受けます。
 - (2) 前項に加え、当社の監査等委員会の要請があった場合は、当社の取締役及び使用人並びに当社グループ会社各社の取締役、監査役及び使用人は、「監査等委員会監査等基準」に基づき、当社の監査等委員会に必要な報告を行うものとします。
 - (3) 当社の監査等委員会は、各部門及び当社グループ会社各社への計画的なヒヤリングを通じて、当社グループの情報を入手し、実態を把握する体制を確保します。
 - (4) 当社グループは、本条各項にしたがって当社の監査等委員会に報告を行った者が、当該報告をしたことを理由として不利な取り扱いを受けることはない体制を確保します。
 - (5) 当社の監査等委員会は、年2回開催される「グループ監査役会」において、当社グループ会社各社（国内）の監査役から情報を入手し、実態を把握する体制を確保します。
9. その他当社の監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- (1) 当社の監査等委員会は、「監査等委員会監査等基準」に基づき、当社グループの代表取締役、会計監査人とそれぞれ定期的に意見交換を実施し、協議する体制を確保します。
- (2) 当社の監査等委員会は、当社の取締役会にて「監査等委員会監査等基準」に基づいた監査方針の説明を行い、経営に対して実施する監査の重点事項を説明する体制を確保します。
- (3) 当社は、法令違反、コンプライアンス上の問題、内部通報に関する問題及び当社の業務に影響を与える重要な事項が発生した場合、当社の取締役が、直ちに監査等委員会に報告する体制を確保します。
- (4) 当社は、当社の監査等委員の職務の執行（監査等委員会の職務の執行に関するものに限る。）上必要と認める費用の前払または償還について、監査等委員の請求等に従い、速やかに処理します。

・リスク管理体制の整備の状況

当社グループを取り巻くさまざまなリスクに対する防衛体制を強固なものとするべく、「リスクマネジメント委員会」を設置し、啓発活動、リスク項目の点検等を実施しております。

・子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社グループの決算関連事務は、当社が規定する要領に基づき実施され、当社の経営会議での承認を得たうえで執行され、当社グループの事業内容は、定期的に取り締役会及び経営会議に報告されております。

また、当社の内部監査部門は、当社グループに対して、会計監査、業務監査及びコンプライアンス監査を計画的に実施し、その結果を取締役、監査等委員会及び担当部署に報告する体制を構築しているほか、当社グループ会社各社が所属する事業部門には、各グループ会社の内部統制を担当する部署を定め、グループ会社が自ら当該部署に報告する仕組みを構築しております。

・責任限定契約の内容

当社は、非業務執行取締役として有能な人材を迎えることができるよう、会社法第427条第1項に基づき、非業務執行取締役との間において、会社法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。

当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、法令が定める額としております。

なお、当該責任限定が認められるのは、当該非業務執行取締役が責任の原因となった職務の遂行について、善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

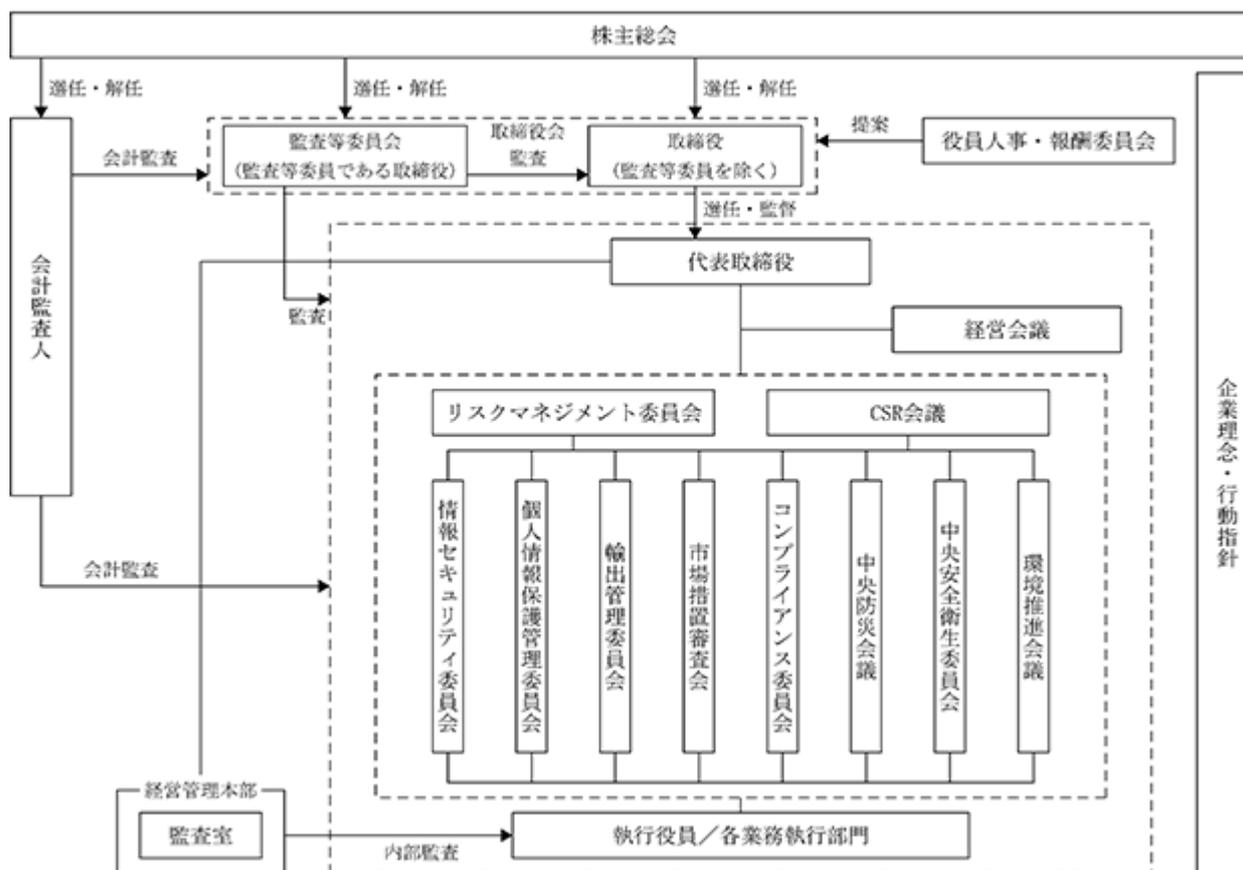
・役員等賠償責任保険契約の内容

当社は、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、取締役等が業務に起因して損害賠償責任を負った場合における損害等を填補することとしております。

なお、当該保険契約の保険料は、全額を当社が負担しております。

当社におけるコーポレート・ガバナンスの状況概要図は、次のとおりです。

コーポレートガバナンス体制



取締役の定数

当社の取締役（監査等委員である取締役を除く）は15名以内、監査等委員である取締役は5名以内とする旨を定款で定めております。

剰余金の配当等

当社は、経済情勢の変化に対応して財務政策等の経営諸施策を機動的に遂行することを可能とするため、会社法第459条第1項の規定に基づき、剰余金の配当、自己株式の取得に関する事項等を、取締役会の決議によってできる旨を定款で定めております。

取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の過半数を有する株主が出席し、出席した当該株主の議決権の過半数をもって行う旨、及び累積投票によらない旨を定款で定めております。

取締役の責任免除の概要

当社は、会社法第426条第1項に基づき、任務を怠ったことによる取締役の損害賠償を、法令の限度において、取締役会の決議をもって免除することができる旨、定款に定めております。これは、取締役が期待される役割を十分に発揮できることを目的としております。

株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会の円滑な運営を行うことを目的として会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。

・取締役会

取締役会（議長：代表取締役会長兼CEO 山石昌孝）は、月1回の定時取締役会と、随時開催される臨時取締役会において、機動的かつ十分な検討を経て、意思決定を行っています。2025年度は、取締役会を14回開催しています。

〔2025年度 取締役会開催状況及び出席率〕

	氏名	開催状況及び出席率
代表取締役会長兼CEO（議長）	山石 昌孝	100%（14回/14回）
代表取締役社長兼COO	清宮 眞二	100%（14回/14回）
取締役専務執行役員兼Co-CEO	Nitin Mantri	92.9%（13回/14回）
取締役常務執行役員	宮本 知昭	100%（14回/14回）
取締役執行役員	結城 正博	100%（14回/14回）
社外取締役	清水 恵	100%（14回/14回）
社外取締役	古河 潤一	92.9%（13回/14回）
社外取締役	高田 寿子	85.7%（12回/14回）
社外取締役	佐々木 伸彦	100%（10回/10回）
取締役監査等委員（常勤）	松尾 剛太	100%（14回/14回）
社外取締役監査等委員	河野 宏和	92.9%（13回/14回）
社外取締役監査等委員	木村 博紀	92.9%（13回/14回）

佐々木伸彦氏は就任後の出席状況です。

2025年度に開催した取締役会では、会社法により決議が求められている重要な財産の処分及び譲受け、重要な使用人

の選解任、重要な組織の設置・変更・廃止、決算の報告の他、中期経営計画、事業投資、ESG・サステナビリティ、IR・SRの取り組み状況、資本効率性、リスクマネジメント及びコンプライアンス、内部統制等を主要なテーマとして議論しました。

・役員人事・報酬委員会

役員人事・報酬委員会（委員長：代表取締役会長兼CEO 山石昌孝）は、2名の代表取締役と3名の独立社外取締役の計5名で構成し、取締役会の諮問に応じ、取締役候補者の指名や取締役の報酬等に係る事項について、審議を行い、取締役会に助言を行います。2025年度は、役員人事・報酬委員会を4回開催しています。

〔2025年度 役員人事・報酬委員会開催状況及び出席率〕

	氏名	開催状況及び出席率
代表取締役会長兼CEO（委員長）	山石 昌孝	100%（4回/4回）
代表取締役社長兼COO	清宮 眞二	100%（4回/4回）
社外取締役	清水 恵	100%（4回/4回）
社外取締役	高田 寿子	100%（1回/1回）
社外取締役監査等委員	河野 宏和	100%（4回/4回）

高田寿子氏は就任後の出席状況です。

2026年3月27日付にて河野宏和氏が委員長に就任する予定です。

(2) 【役員の状況】

a . 2026年3月25日（有価証券報告書提出日）現在の当社の役員の状況は、以下のとおりであります。

男性 10名 女性 2名 （役員のうち女性の比率 16.7%）

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 会長兼CEO (経営全般/地域事業/ 企画・管理/MB/経営企 画本部長)	山石昌孝	1962年6月5日	1986年4月 当社入社 2007年6月 当社MD推進室長就任 2008年11月 当社GD100推進室長就任 2010年1月 当社秘書室長就任 2012年1月 ヨコハマ ヨーロッパ GmbH 代表取締役社長就任 2013年10月 当社経営企画本部長代理就任 同年10月 当社経営企画室長就任 同年10月 ㈱アクティ 代表取締役社長就任 2014年3月 当社執行役員就任 同年10月 当社タイヤ管掌補佐就任 2015年3月 当社取締役就任 同年3月 当社タイヤ企画本部長就任 同年3月 ヨコハマ・モータースポーツ・インターナショナル㈱代表取締役社長就任 同年4月 当社経営企画部長就任 2016年3月 当社経営企画本部長就任 同年3月 当社IT企画本部担当就任 同年7月 当社常務執行役員就任 同年10月 当社タイヤ管掌就任 2017年3月 当社代表取締役社長就任 2024年3月 当社代表取締役会長兼CEO就任 (現任)	(注) 2	187
代表取締役 社長兼COO (技術/生産/品質保 証/IT/TBR事業/プロギ ア/タイヤ生産本部長)	清宮真二	1964年12月20日	1989年4月 当社入社 2012年4月 当社タイヤ技術管理部長就任 2014年10月 当社タイヤ第一設計部長就任 2017年3月 当社タイヤ消費財開発本部長代理就任 同年3月 当社タイヤ第二設計部長就任 2019年3月 当社執行役員就任 同年3月 当社タイヤ製品開発本部長就任 同年3月 当社タイヤ第一設計部長就任 2021年3月 当社技術統括補佐就任 2022年3月 当社取締役就任 同年3月 当社技術統括就任 同年3月 当社品質保証本部担当就任 2023年3月 当社常務執行役員就任 同年3月 当社技術・生産統括就任 同年3月 当社IT企画本部担当就任 2024年3月 当社代表取締役社長兼COO就任 (現任)	(注) 2	40
取締役 兼Co-CEO (OHT事業/インド事業)	Nitin Mantri	1970年3月29日	2001年3月 The Boston Consulting Group入 社 2003年8月 Cummins Inc.入社 2012年6月 Cummins Fuel Systems 、 President就任 2017年2月 ATC Tires Private Limited入社 同年5月 同社取締役CEO就任 2018年3月 当社執行役員就任 2019年10月 Yokohama India Private Limited 取締役会長就任(現任) 2020年3月 当社取締役就任(現任) 2021年3月 当社OHT事業部長就任(現任) 同年3月 ヨコハマ・オフハイウェイタイヤ ㈱代表取締役就任(現任) 2022年3月 当社常務執行役員就任 2023年3月 Yokohama Tyre VietnamInc. 取締 役会長就任(現任) 2024年3月 当社専務執行役員兼Co-CEO就任 (現任)	(注) 2	19

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 タイヤ国内リプレイス営業本部長 兼 経営管理本部担当 兼 CSR本部担当 兼 平塚製造所長	宮本知昭	1966年9月23日	1990年4月 当社入社 2013年4月 ヨコハマ・モータースポーツ・インターナショナル㈱専務取締役就任 2015年4月 当社タイヤ国内REP営業企画部長就任 2015年7月 ㈱ヨコハマタイヤジャパン取締役就任(現任) 2018年3月 当社タイヤ国内REP営業本部長代理就任 同 年3月 当社タイヤ国内REP営業企画部長就任 2018年8月 当社タイヤ国内リプレイス営業本部長代理就任 同 年8月 当社タイヤ国内リプレイス営業企画部長就任 2019年3月 当社執行役員就任 同 年3月 当社タイヤ国内リプレイス営業本部長就任(現任) 2022年3月 当社常務執行役員就任(現任) 2023年3月 当社取締役就任(現任) 同 年3月 当社タイヤ消費財製品企画本部長就任 同 年3月 当社経営管理本部担当就任(現任) 同 年8月 当社平塚製造所長就任(現任) 2025年1月 当社CSR本部担当就任(現任)	(注) 2	15
取締役 経理部・IR室担当 兼 タイヤ企画本部長	結城正博	1968年10月11日	1991年4月 当社入社 2012年1月 当社秘書室長就任 2013年9月 Yokohama Tire Philippines, Inc.取締役副社長就任 同 年9月 Yokohama Tire Sales Philippines, Inc.取締役社長就任 2015年4月 当社タイヤ海外営業企画部長就任 2016年10月 当社タイヤ企画部長就任 2018年3月 当社タイヤ企画本部長代理就任 2019年3月 当社執行役員就任 同 年3月 当社タイヤ企画本部長就任 2020年3月 Yokohama Rubber(China)Co.,Ltd.取締役会長就任 2023年3月 当社取締役就任(現任) 同 年3月 当社経営企画本部長就任 同 年3月 当社品質保証本部担当就任 同 年6月 神奈川中央交通㈱取締役(現任) 同 年11月 当社経理部担当就任 2024年3月 当社タイヤ企画本部副本部長就任 同 年5月 当社経理部・IR室担当就任(現任) 2025年1月 当社タイヤ企画本部長就任(現任)	(注) 2	12

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役	清水 恵	1968年7月22日	1993年3月 司法研修所修了 同年4月 西村眞田法律事務所入所 (～1995年3月) 1999年4月 西村総合法律事務所再入所 2004年1月 西村ときわ法律事務所(現西村あ さひ法律事務所・外国法共同事 業)パートナー弁護士(現任) 2005年6月 ハーバード大学ロースクール卒業 (LL.M.) 同年9月 Paul, Weiss, Rifkind, Wharton & Garrison LLP (New York) にて 執務(～2006年3月) 2015年12月 (株)EduLab監査役就任 2018年3月 当社監査役就任 2022年12月 (株)EduLab取締役監査等委員就任 (現任) 2023年3月 当社取締役就任(現任)	(注)2	
取締役	古河 潤一	1968年3月27日	1990年4月 朝日生命保険相互会社入社 2007年4月 朝日ライフアセットマネジメン ト(株)出向 企画総務部長就任 2008年8月 古河林業(株)山林事業本部長就任 2009年10月 同社常務取締役就任 2010年4月 同社代表取締役社長就任(現 任) 2015年6月 白銅(株)社外取締役就任(現任) 2019年6月 中央不動産(株)(現中央日本土地 建物(株))取締役就任(現任) 2020年4月 中央日本土地建物グループ(株)取 締役就任(現任) 2023年3月 当社取締役就任(現任)	(注)2	1
取締役	高田 寿子	1970年7月10日	1993年3月 ゴールドマン・サックス証券会社 入社 1998年8月 ソニー(株)入社 2000年8月 UBS証券会社入社 2005年12月 GCA(株)(現フーリハン・ローキー (株))入社 2014年4月 オムロン(株)入社 2021年3月 同社CEO室長 2021年4月 同社執行役員 2024年3月 当社取締役就任(現任) 2025年4月 (株)アドバンテスト経営執行役員 CFO(現任)	(注)2	0

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役	佐々木 伸 彦	1955年 1月28日	1979年 4月 1986年 6月 2010年 7月 2012年 9月 2013年10月 2015年 9月 2016年 4月 2018年 4月 2019年 4月 2024年 4月 2025年 3月	通商産業省入省 カリフォルニア大学バークレー校 政治学修士課程修了 通商政策局長就任 経済産業審議官就任 東京海上日動火災保険(株)顧問就任 富士通(株)顧問就任 同社執行役員専務就任 同社執行役員副会長就任 日本貿易振興機構(ジェトロ)理 事長就任 一般財団法人日中経済協会理事 長就任(現任) 当社取締役就任(現任)	(注) 2	0
取締役 監査等委員 (常勤)	松 尾 剛 太	1966年 4月19日	1989年 4月 2010年 6月 2013年10月 2015年 1月 同 年 1月 2016年 3月 2017年 1月 2017年 3月 2018年 3月 2019年 3月 2023年 3月	当社入社 当社経理部副部長就任 当社スポーツマーケティング部長 就任 (株)プロギア取締役副社長就任 当社スポーツ企画室長就任 当社経理部長就任 当社執行役員就任 ヨコハマゴム・ファイナンス(株)代 表取締役社長就任 当社取締役就任 当社常務執行役員就任 当社取締役監査等委員就任(現 任)	(注) 3	43
取締役 監査等委員	河 野 宏 和	1957年 4月22日	1980年 3月 1982年 3月 1987年 3月 同 年 4月 1991年 4月 同 年 5月 同 年 7月 1998年 4月 2009年10月 同 年10月 2011年 6月 2013年 5月 2014年 6月 2015年 6月 同 年 6月 2018年 3月 2023年 3月 2023年 4月 2025年 1月	慶應義塾大学工学部管理工学科 卒業 同大学大学院工学研究科修士課 程修了 同大学大学院工学研究科博士課 程単位取得退学 同大学大学院経営管理研究科助 手 同大学助教授 同大学工学博士 ハーバード大学 ビジネス・ス クール訪問研究員(～1992年 7 月) 慶應義塾大学教授 同大学大学院経営管理研究科委 員長就任 同大学ビジネス・スクール校長 就任 当社独立委員会委員就任(～2014 年 3月) (公社)日本経営工学会会長就任 (～2017年 5月) (株)岡三証券グループ監査役就任 同社取締役監査等委員就任 スタンレー電気(株)取締役就任(現 任) 当社取締役就任 当社取締役監査等委員就任(現 任) 慶應義塾大学名誉教授・特任教授 (現任) 三木ブリー(株)取締役就任(現任)	(注) 3	

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)	
取締役 監査等委員	木村博紀	1962年1月19日	1984年4月	朝日生命保険相互会社入社	(注)3	
			2012年4月	同社執行役員資産運用統括部門財務・不動産専管部門長就任		
			2013年4月	同社執行役員資産運用統括部門長就任		
			2013年7月	同社取締役執行役員資産運用統括部門長就任		
			2014年4月	同社取締役執行役員資産運用部門長就任		
			2014年6月	関東電化工業㈱監査役就任		
			2015年4月	朝日生命保険相互会社取締役常務執行役員資産運用企画部証券運用部担当就任		
			2016年4月	同社取締役常務執行役員経営企画部主計部担当就任		
			2016年6月	日本ビストンリング㈱監査役就任		
			2017年4月	朝日生命保険相互会社代表取締役社長就任		
2019年3月	当社監査役就任					
2020年6月	日本ゼオン㈱監査役就任(現任)					
2021年6月	日本ビストンリング㈱(現リケンNPR㈱)取締役監査等委員就任(現任)					
2023年3月	当社取締役監査等委員就任(現任)					
2024年4月	朝日生命保険相互会社代表取締役会長就任					
2025年4月	朝日生命保険相互会社取締役会長就任(現任)					
計					319	

- (注) 1 取締役 清水 恵、古河潤一、高田寿子、佐々木伸彦、河野宏和及び木村博紀は、社外取締役であります。
- 2 取締役（監査等委員である取締役を除く。）の任期は、2024年12月期に係る定時株主総会終結の時から2025年12月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 3 監査等委員である取締役の任期は、2024年12月期に係る定時株主総会終結の時から2026年12月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 4 当社では、取締役会の活性化及び意思決定の迅速化並びに業務執行の効率化及びグループ経営の強化を図るために執行役員制度を導入しております。2026年3月25日（有価証券報告書提出日）現在、執行役員は20名で、上記記載のNitin Mantri、宮本知昭及び結城正博の3名の他、以下の17名で構成されております。

瀧本 真一（専務執行役員 タイヤ日本事業本部長 兼 タイヤ直需営業本部長）
Jeff Barna（専務執行役員 Yokohama Corporation of North America取締役社長兼CEO
兼 Yokohama Tire Corporation取締役社長兼CEO
兼 Yokohama Tire (Canada) Inc.取締役会長
兼 Yokohama Tire Mexico S. de R.L. de C.V.取締役会長）
中村 善州（常務執行役員 Yokohama Asia Co., Ltd. 取締役会長
兼 Yokohama Tire Manufacturing (Thailand) Co., Ltd.取締役会長）
矢羽田雄彦（常務執行役員 ㈱ヨコハマタイヤジャパン代表取締役社長
兼 タイヤ国内リプレイス営業本部副本部長）
森本 剛央（常務執行役員 Yokohama Tire Manufacturing Mississippi, LLC.取締役社長
兼 Yokohama Tire Manufacturing Virginia, LLC.取締役会長）
梁取 和人（常務執行役員 調達本部長 兼 Yokohama Rubber Singapore Pte. Ltd.取締役社長）
榎林 浩行（常務執行役員 品質保証本部長）
石光 真吾（常務執行役員 経営管理本部長 兼 平塚製造所長代理
兼 ヨコハマピアサポート㈱代表取締役社長）
政友 毅（常務執行役員 タイヤ海外営業本部長 兼 タイヤ海外営業企画部長）
塩入 博之（執行役員 タイヤ消費財商品企画本部長）
Anil Gupta（執行役員 ATC Tires Pvt. Ltd.取締役COO 兼 Yokohama India Pvt. Ltd.取締役副会長）
松田将一郎（執行役員 タイヤ製品開発本部長）
浜谷 孝行（執行役員 MB事業本部長 兼 工業資材事業部長
兼 横浜ゴムMBジャパン㈱代表取締役社長）
Angelo Noronha（執行役員 President and CEO - Yokohama ATG）
藤田 資二（執行役員 研究先行開発本部長）
范 明（執行役員 CEO補佐 兼 Yokohama Rubber (China) Co., Ltd. 取締役会長兼社長
兼 Yokohama Tire Sales (Shanghai) Co., Ltd.取締役会長兼社長
兼 Hangzhou Yokohama Tire Co., Ltd. 取締役会長
兼 Suzhou Yokohama Tire Co., Ltd.取締役会長）
Gregorio Borgo（執行役員 Consultant and Acting President of Yokohama Europe GmbH
兼 Consultant of Yokohama TWS）

b. 2026年3月27日開催予定の定時株主総会の議案（決議事項）として、「取締役（監査等委員である取締役を除く。）9名選任の件」を提案しており、当該議案が承認可決されますと、当社の役員の状況は以下のとおりとなる予定です。なお、役員の役職等につきましては、当該定時株主総会の直後に開催が予定される取締役会の決議事項の内容（役職等）を含めて記載しております。

男性 10名 女性 2名（役員のうち女性の比率 16.7%）

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 会長兼CEO (経営全般/地域事業/ 企画・管理/MB)	山石昌孝	1962年6月5日	1986年4月 当社入社 2007年6月 当社MD推進室長就任 2008年11月 当社GD100推進室長就任 2010年1月 当社秘書室長就任 2012年1月 ヨコハマ ヨーロッパ GmbH 代表取締役社長就任 2013年10月 当社経営企画本部長代理就任 同 年10月 当社経営企画室長就任 同 年10月 ㈱アクティ 代表取締役社長就任 2014年3月 当社執行役員就任 同 年10月 当社タイヤ管掌補佐就任 2015年3月 当社取締役就任 同 年3月 当社タイヤ企画本部長就任 同 年3月 ヨコハマ・モータースポーツ・インターナショナル㈱代表取締役社長就任 同 年4月 当社経営企画部長就任 2016年3月 当社経営企画本部長就任 同 年3月 当社IT企画本部担当就任 同 年7月 当社常務執行役員就任 同 年10月 当社タイヤ管掌就任 2017年3月 当社代表取締役社長就任 2024年3月 当社代表取締役会長兼CEO就任 (現任)	(注) 2	187
代表取締役 社長兼COO (技術/生産/品質保 証/IT/TBR事業/プロギ ア)	清宮眞二	1964年12月20日	1989年4月 当社入社 2012年4月 当社タイヤ技術管理部長就任 2014年10月 当社タイヤ第一設計部長就任 2017年3月 当社タイヤ消費財開発本部長代理就任 同 年3月 当社タイヤ第二設計部長就任 2019年3月 当社執行役員就任 同 年3月 当社タイヤ製品開発本部長就任 同 年3月 当社タイヤ第一設計部長就任 2021年3月 当社技術統括補佐就任 2022年3月 当社取締役就任 同 年3月 当社技術統括就任 同 年3月 当社品質保証本部担当就任 2023年3月 当社常務執行役員就任 同 年3月 当社技術・生産統括就任 同 年3月 当社IT企画本部担当就任 2024年3月 当社代表取締役社長兼COO就任 (現任)	(注) 2	40
取締役 兼Co-CEO (OHT事業/インド事業)	Nitin Mantri	1970年3月29日	2001年3月 The Boston Consulting Group入 社 2003年8月 Cummins Inc.入社 2012年6月 Cummins Fuel Systems、 President就任 2017年2月 ATC Tires Private Limited入社 同 年5月 同社取締役CEO就任 2018年3月 当社執行役員就任 2019年10月 Yokohama India Private Limited 取締役会長就任(現任) 2020年3月 当社取締役就任(現任) 2021年3月 当社OHT事業部長就任(現任) 同 年3月 ヨコハマ・オフハイウェイタイヤ ㈱代表取締役就任(現任) 2022年3月 当社常務執行役員就任 2023年3月 Yokohama Tyre VietnamInc. 取締 役会長就任(現任) 2024年3月 当社専務執行役員兼Co-CEO就任 (現任)	(注) 2	19

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 タイヤ国内リプレイス営業本部担当 兼 経営管理本部担当 兼 CSR本部担当 兼 平塚製造所長	宮本知昭	1966年9月23日	1990年4月 当社入社 2013年4月 ヨコハマ・モータースポーツ・インターナショナル㈱専務取締役就任 2015年4月 当社タイヤ国内REP営業企画部長就任 2015年7月 ㈱ヨコハマタイヤジャパン取締役就任(現任) 2018年3月 当社タイヤ国内REP営業本部長代理就任 同 年3月 当社タイヤ国内REP営業企画部長就任 2018年8月 当社タイヤ国内リプレイス営業本部長代理就任 同 年8月 当社タイヤ国内リプレイス営業企画部長就任 2019年3月 当社執行役員就任 同 年3月 当社タイヤ国内リプレイス営業本部長就任 2022年3月 当社常務執行役員就任(現任) 2023年3月 当社取締役就任(現任) 同 年3月 当社タイヤ消費財製品企画本部長就任 同 年3月 当社経営管理本部担当就任(現任) 同 年8月 当社平塚製造所長就任(現任) 2025年1月 当社CSR本部担当就任(現任) 2026年3月 当社タイヤ国内リプレイス営業本部担当就任(現任)	(注) 2	15
取締役 経理部・IR室担当 兼 タイヤ企画本部担当	結城正博	1968年10月11日	1991年4月 当社入社 2012年1月 当社秘書室長就任 2013年9月 Yokohama Tire Philippines, Inc.取締役副社長就任 同 年9月 Yokohama Tire Sales Philippines, Inc.取締役社長就任 2015年4月 当社タイヤ海外営業企画部長就任 2016年10月 当社タイヤ企画部長就任 2018年3月 当社タイヤ企画本部長代理就任 2019年3月 当社執行役員就任 同 年3月 当社タイヤ企画本部長就任 2020年3月 Yokohama Rubber(China)Co.,Ltd.取締役会長就任 2023年3月 当社取締役就任(現任) 同 年3月 当社経営企画本部長就任 同 年3月 当社品質保証本部担当就任 同 年6月 神奈川中央交通㈱取締役(現任) 同 年11月 当社経理部担当就任 2024年3月 当社タイヤ企画本部副本部長就任 同 年5月 当社経理部・IR室担当就任(現任) 2025年1月 当社タイヤ企画本部長就任 2026年3月 当社タイヤ企画本部担当就任(現任)	(注) 2	12

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役	清水 恵	1968年7月22日	1993年3月 同 年4月 1999年4月 2004年1月 2005年6月 同 年9月 2015年12月 2018年3月 2022年12月 2023年3月 司法研修所修了 西村眞田法律事務所入所 (～1995年3月) 西村総合法律事務所再入所 西村ときわ法律事務所(現西村あ さひ法律事務所・外国法共同事 業)パートナー弁護士(現任) ハーバード大学ロースクール卒業 (LL.M.) Paul, Weiss, Rifkind, Wharton & Garrison LLP (New York) にて 執務(～2006年3月) ㈱EduLab監査役就任 当社監査役就任 ㈱EduLab取締役監査等委員就任 (現任) 当社取締役就任(現任)	(注) 2	
取締役	古河 潤一	1968年3月27日	1990年4月 2007年4月 2008年8月 2009年10月 2010年4月 2015年6月 2019年6月 2020年4月 2023年3月 朝日生命保険相互会社入社 朝日ライフアセットマネジメン ト㈱出向 企画総務部長就任 古河林業㈱山林事業本部長就任 同社常務取締役就任 同社代表取締役社長就任(現 任) 白銅㈱社外取締役就任(現任) 中央不動産㈱(現中央日本土地 建物㈱)取締役就任(現任) 中央日本土地建物グループ㈱取 締役就任(現任) 当社取締役就任(現任)	(注) 2	1
取締役	高田 寿子	1970年7月10日	1993年3月 1998年8月 2000年8月 2005年12月 2014年4月 2021年3月 2021年4月 2024年3月 2024年4月 ゴールドマン・サックス証券会社 入社 ソニー㈱入社 UBS証券会社入社 GCA㈱(現フーリハン・ローキー ㈱)入社 オムロン㈱入社 同社CEO室長 同社執行役員 当社取締役就任(現任) ㈱アドバンテスト経営執行役員 CFO(現任)	(注) 2	0

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役	佐々木 伸 彦	1955年 1月28日	1979年 4月 1986年 6月 2010年 7月 2012年 9月 2013年10月 2015年 9月 2016年 4月 2018年 4月 2019年 4月 2024年 4月 2025年 3月	通商産業省入省 カリフォルニア大学バークレー校 政治学修士課程修了 通商政策局長就任 経済産業審議官就任 東京海上日動火災保険(株)顧問就任 富士通(株)顧問就任 同社執行役員専務就任 同社執行役員副会長就任 日本貿易振興機構(ジェトロ)理 事長就任 一般財団法人日中経済協会理事 長就任(現任) 当社取締役就任(現任)	(注) 2	0
取締役 監査等委員 (常勤)	松 尾 剛 太	1966年 4月19日	1989年 4月 2010年 6月 2013年10月 2015年 1月 同 年 1月 2016年 3月 2017年 1月 2017年 3月 2018年 3月 2019年 3月 2023年 3月	当社入社 当社経理部副部長就任 当社スポーツマーケティング部長 就任 (株)プロギア取締役副社長就任 当社スポーツ企画室長就任 当社経理部長就任 当社執行役員就任 ヨコハマゴム・ファイナンス(株)代 表取締役社長就任 当社取締役就任 当社常務執行役員就任 当社取締役監査等委員就任(現 任)	(注) 3	43
取締役 監査等委員	河 野 宏 和	1957年 4月22日	1980年 3月 1982年 3月 1987年 3月 同 年 4月 1991年 4月 同 年 5月 同 年 7月 1998年 4月 2009年10月 同 年10月 2011年 6月 2013年 5月 2014年 6月 2015年 6月 同 年 6月 2018年 3月 2023年 3月 2023年 4月 2025年 1月	慶應義塾大学工学部管理工学科 卒業 同大学大学院工学研究科修士課 程修了 同大学大学院工学研究科博士課 程単位取得退学 同大学大学院経営管理研究科助 手 同大学助教授 同大学工学博士 ハーバード大学ビジネス・ス クール訪問研究員(～1992年 7 月) 慶應義塾大学教授 同大学大学院経営管理研究科委 員長就任 同大学ビジネス・スクール校長 就任 当社独立委員会委員就任(～2014 年 3月) (公社)日本経営工学会会長就任 (～2017年 5月) (株)岡三証券グループ監査役就任 同社取締役監査等委員就任 スタンレー電気(株)取締役就任(現 任) 当社取締役就任 当社取締役監査等委員就任(現 任) 慶應義塾大学名誉教授・特任教授 (現任) 三木ブリー(株)取締役就任(現任)	(注) 3	

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)	
取締役 監査等委員	木村博紀	1962年1月19日	1984年4月	朝日生命保険相互会社入社	(注)3	
			2012年4月	同社執行役員資産運用統括部門財務・不動産専管部門長就任		
			2013年4月	同社執行役員資産運用統括部門長就任		
			2013年7月	同社取締役執行役員資産運用統括部門長就任		
			2014年4月	同社取締役執行役員資産運用部門長就任		
			2014年6月	関東電化工業㈱監査役就任		
			2015年4月	朝日生命保険相互会社取締役常務執行役員資産運用企画部証券運用部担当就任		
			2016年4月	同社取締役常務執行役員経営企画部主計部担当就任		
			2016年6月	日本ビストンリング㈱監査役就任		
			2017年4月	朝日生命保険相互会社代表取締役社長就任		
			2019年3月	当社監査役就任		
2020年6月	日本ゼオン㈱監査役就任(現任)					
2021年6月	日本ビストンリング㈱(現リケンNPR㈱)取締役監査等委員就任(現任)					
2023年3月	当社取締役監査等委員就任(現任)					
2024年4月	朝日生命保険相互会社代表取締役会長就任					
2025年4月	朝日生命保険相互会社取締役会長就任(現任)					
計					319	

- (注) 1 取締役 清水 恵、古河潤一、高田寿子、佐々木伸彦、河野宏和及び木村博紀は、社外取締役であります。
- 2 取締役（監査等委員である取締役を除く。）の任期は、2025年12月期に係る定時株主総会終結の時から2026年12月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 3 監査等委員である取締役の任期は、2024年12月期に係る定時株主総会終結の時から2026年12月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 4 当社では、取締役会の活性化及び意思決定の迅速化並びに業務執行の効率化及びグループ経営の強化を図るために執行役員制度を導入しております。2026年3月27日開催予定の定時株主総会後の取締役会の決議事項によれば、執行役員は20名で、上記記載のNitin Mantri、宮本知昭及び結城正博の3名の他、以下の17名で構成される予定です。

瀧本 真一（専務執行役員 タイヤ日本事業本部長）
Jeff Barna（専務執行役員 Yokohama Corporation of North America取締役社長兼CEO
兼 Yokohama Tire Corporation取締役社長兼CEO
兼 Yokohama Tire (Canada) Inc.取締役会長
兼 Yokohama Tire Mexico S. de R.L. de C.V.取締役会長）
中村 善州（常務執行役員 Yokohama Asia Co., Ltd. 取締役会長
兼 Yokohama Tire Manufacturing (Thailand) Co., Ltd.取締役会長）
矢羽田雄彦（常務執行役員 ㈱ヨコハマタイヤジャパン代表取締役社長
兼 タイヤ国内リプレイス営業本部副本部長）
森本 剛央（常務執行役員 Yokohama Tire Manufacturing Mississippi, LLC.取締役社長）
梁取 和人（常務執行役員 調達本部長 兼 Yokohama Rubber Singapore Pte. Ltd.取締役社長）
榎林 浩行（常務執行役員 品質保証本部長）
石光 真吾（常務執行役員 経営管理本部長 兼 平塚製造所長代理
兼 ヨコハマピアサポート㈱代表取締役社長）
政友 毅（常務執行役員 タイヤ海外営業本部長 兼 タイヤ海外営業企画部長）
浜谷 孝行（常務執行役員 MB事業本部長 兼 工業資材事業部長
兼 横浜ゴムMBジャパン㈱代表取締役社長）
范 明（常務執行役員 CEO補佐 兼 Yokohama Rubber (China) Co., Ltd. 取締役会長兼社長
兼 Yokohama Tire Sales (Shanghai) Co., Ltd.取締役会長兼社長
兼 Hangzhou Yokohama Tire Co., Ltd. 取締役会長
兼 Suzhou Yokohama Tire Co., Ltd.取締役会長）
Gregorio Borgo（常務執行役員 Consultant and Acting President of Yokohama Europe GmbH
兼 Consultant of Yokohama TWS）
塩入 博之（執行役員 タイヤ消費財商品企画本部長）
Anil Gupta（執行役員 ATC Tires Pvt. Ltd.取締役COO 兼 Yokohama India Pvt. Ltd.取締役副会長）
松田将一郎（執行役員 タイヤ製品開発本部長）
Angelo Noronha（執行役員 President and CEO - Yokohama ATG）
藤田 資二（執行役員 研究先行開発本部長）

社外取締役

(社外取締役の員数並びに社外取締役と当社との人的・資本的・取引関係その他の利害関係)

当社は、経営の監督及び監視のために、社外取締役を6名選任しております。

社外取締役木村博紀氏は、朝日生命保険相互会社の取締役会長であり、借入等の取引関係を有しておりますが、同社は会社法施行規則第2条第3項第19号ロにいう「主要な取引先」に該当するものではなく、かつ、その取引条件も当社と関係を有しない他の事業者と同様のものであります。

また、当社の株式を社外取締役の古河潤一氏が1,500株、高田寿子氏が600株、佐々木伸彦氏が500株それぞれ所有しております。

なお、上記以外の社外取締役清水 恵氏及び河野宏和氏とも当社との間には特別な利害関係はありません。

(社外取締役が当社の企業統治において果たす機能及び役割)

社外取締役には、豊富な経験や国際的な視野に立った見識を当社の経営に活かしていただくべく、当社の経営陣とは独立した中立の立場から、経営判断が会社内部者の論理に偏ることがないように、チェック機能を担っていただくことを期待しております。

また、監査等委員である社外取締役には、経営の健全性を確保し、その透明性をあげるために、経営者としての高い見識や行政機関等での経験に基づく専門知識などに加え、豊富な経験を活かした外部的視点から、当社の経営を監視することを担っていただいております。

(社外取締役を選任するための独立性に関する基準または方針の内容)

当社においては、社外取締役を選任するための独立性に関する基準は定めておりませんが、選任にあたっては、東京証券取引所における独立役員の独立性に関する判断基準を参考にしております。

なお、社外取締役清水 恵氏、古河潤一氏、高田寿子氏、佐々木伸彦氏、河野宏和氏及び木村博紀氏は、東京証券取引所等の定める独立役員の要件を満たしており、一般株主と利益相反関係になることはありません。

(社外取締役の選任状況)

役 職	氏 名	主な職業	選任の理由
社外取締役	清水 恵	西村あさひ法律事務所・外国法共同事業 パートナー弁護士	長年に亘り日本を代表する大手法律事務所におけるパートナー弁護士としての豊富な経験及び知識や法律の専門家目線を当社の経営全般に活かしていただくことを期待し、選任しております。
	古河 潤一	古河林業(株)代表取締役 社長	企業経営の経験および幅広い見識等を有する経営者で、財務・会計に関する知見やバランス感覚を活かした見識を当社の経営に反映していただくことを期待し、選任しております。
	高田 寿子	(株)アドバンテスト経営 執行役員CFO	国内外の企業での勤務経験が豊富であり、M&A含む経営戦略の知識・経験を、当社の経営に反映していただくことを期待し、選任しております。
	佐々木伸彦	一般財団法人日中経済 協会理事長	省庁における豊富な経験や企業経営に係る見識を国際的な視野に立ち、当社の経営全般に活かしていただくことを期待し、選任しております。
	河野 宏和	慶應義塾大学名誉教 授・特任教授	長年に亘り日米の大学において専門に研究されている経営工学及び経営管理に関する豊富な学問的知識により当社の監査体制をさらに強化していただくことを期待し、選任しております。
	木村 博紀	朝日生命保険相互会社 取締役会長	金融機関の経営者としての業務経験及び他社での社外役員としての豊富な経験と高い見識を活かし、より客観的な監査をしていただくことを期待し、選任しております。

(社外取締役による監督または監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係)

社外取締役（監査等委員である取締役を除く。）は、監査室からの内部監査の報告、内部統制の整備・運用状況等に関する報告、監査等委員会からの監査報告を定期的に分けることにより、当社グループの現状と課題を把握し、必要に応じて取締役会において意見を表明します。

監査等委員会は、上記の報告を同様に受けているほか、効率的かつ効果的に監査等委員会監査を行うために、会計監査人及び内部監査部門である監査室並びに子会社の監査役との情報交換を含む協力関係を維持しております。

(3) 【監査の状況】

監査等委員会監査の状況

1) 監査等委員会の組織、人員及び手続き

当社は、2023年3月30日開催の第147回定時株主総会における定款の変更決議により、監査役会設置会社から監査等委員会設置会社に移行しました。

監査等委員会は、経営監査機能強化の観点から、監査等委員3名のうち2名を社外取締役とし、独立して公正な監査を行うことが可能な体制を確保しております。

このうち、監査等委員である社外取締役木村博紀氏は、朝日生命保険相互会社の経理部門、財務部門及び資産運用部門にて、財務及び会計に関する業務を経験しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

また、監査の実効性を高め、かつ監査業務を円滑に遂行できるよう、監査等委員会事務局に所属する従業員を配置しております。

監査等委員会は、取締役の職務の執行の監査、監査方針ならびに監査計画、業務及び財産の状況の調査方法、監査報告の作成、取締役（監査等委員を除く）の選任若しくは解任又は辞任についての意見の決定、取締役（監査等委員を除く）の報酬等の意見の決定、その他法令及び定款に定められた職務の執行に関する事項を主な検討事項としております。

また、会計監査に関わる項目としては、会計監査人の選任及び解任並びに不再任に関する議案の内容の決定、監査報酬の同意可否、四半期・年度決算に対する会計監査人の監査意見・提言等の検討を行います。

2) 常勤監査等委員及び監査等委員会の活動状況

当事業年度において、当社は監査等委員会を8回開催しており、個々の監査等委員の出席状況については、次のとおりです。

	氏名	開催状況及び出席率
取締役監査等委員（常勤）	松尾 剛太	100%（8回/8回）
取締役監査等委員（常勤）	内田 寿夫	100%（3回/3回）
取締役監査等委員（社外）	河野 宏和	100%（8回/8回）
取締役監査等委員（社外）	亀井 淳	100%（3回/3回）
取締役監査等委員（社外）	木村 博紀	100%（8回/8回）

常勤取締役監査等委員 内田寿夫と社外取締役監査等委員 亀井 淳は、2025年3月28日付で任期満了により退任いたしました。

また、監査等委員会における主な決議事項、協議事項、報告事項は以下のとおりです。

決議事項	監査等委員会の委員長（議長）の選定、常勤監査等委員の選定、選定・特定監査等委員の選定、監査方針及び監査計画と職務分担、会計監査人の解任又は不再任の決定、会計監査人の報酬等の同意、取締役（監査等委員を除く）の選任若しくは解任又は辞任についての意見の決定、取締役（監査等委員を除く）の報酬等についての意見の決定、監査報告の作成、等
協議事項	取締役会に対する監査報告、株主総会に提出する議案及び書類、内部統制システムの整備・運用状況、会計監査人の選解任の中間評価、会計監査人の監査報告書、会計監査人の非監査業務 等
報告事項	常勤監査等委員による監査実施報告、監査室の監査計画・監査結果報告、会計監査人の報告（監査及び四半期レビュー計画、四半期レビュー結果・経過報告、期末監査結果等）、コンプライアンス委員会報告、Y X 2 0 2 6 進捗報告 等

常勤の監査等委員は、監査等委員会で定めた監査方針ならびに監査計画に従い、取締役、執行役員、その他グループ会社を含めた使用人との意思疎通をはかり情報収集を行うとともに、取締役会等その他の重要な会議（注1）へ出席し、取締役及び使用人からその職務の執行状況や、内部監査部門や内部統制部門から定期的に報告を受

け、重要な決裁書類等の閲覧により業務及び財産の状況を調査し、その結果を社外の監査等委員に報告しております。会計監査人からは、期初に監査方針・計画の説明を受け、四半期・期末に監査結果の報告を受けるなど密接な連携の中で、当期の監査上の主要な検討事項（KAM）に関する説明を受け、質疑を行っております。また、会計監査人の監査の方法及び相当性の監視、検証を行っております。

監査等委員会は、監査等委員会で定めた監査方針ならびに監査計画に従い、取締役の職務の執行の適法性・妥当性の監査を実施し、また、内部統制システムの整備・運用状況の監視を行い、定期的に取り締役にその状況の報告や提言を行っております。なお、監査等委員会は、代表取締役との間で定期的に会合を開催し、意見交換を実施しております。また、会計監査人からは期初に監査方針・計画の説明を受け、四半期・期末に監査結果の報告を受けるなど密接な連携の中で、会計監査人の選任及び解任並びに不再任の判断、また、会計監査人の監査の方法及び相当性の監視や検証を行っております。

(注1)取締役会以外の重要な会議への出席は、経営会議、CSR会議、リスクマネジメント委員会、コンプライアンス委員会、環境推進会議、個人情報保護管理委員会、情報セキュリティ委員会、輸出管理委員会、中央防災会議、中央安全衛生委員会などすべての会議・委員会に出席し、必要な意見を述べています。

内部監査の状況

当社の内部監査部門である監査室（15名）は、監査計画に基づいて、監査等委員及び会計監査人と連携し、公正で独立性を保った立場で部門・事業所・グループ会社の業務遂行の適法性と妥当性について監査を行っております。代表取締役に対し定期的に監査結果の報告と改善提案を行っており、また、デュアルレポートラインにより監査等委員に対しても毎月監査結果の報告により連携を密にして監査機能の強化を行っております。

会計監査の状況

1) 監査法人の名称

EY新日本有限責任監査法人

2) 継続監査期間

1977年以降

上記継続監査期間は、当社において調査可能な範囲での期間であり、実際の継続監査期間は上記を超えている可能性があります。

3) 業務を執行した公認会計士

柴田 憲 一
松本 雄 一
山本 正 男

4) 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士	9名
その他	40名

5) 監査法人の選定方針と理由

会計監査人が会社法第340条第1項各号のいずれかに該当すると認められる場合、監査等委員全員の同意に基づき会計監査人の適格性、独立性および専門性を害する事由の発生による、適正な監査の遂行が困難であると認められる場合、その他監査等委員会が解任または不再任が相当と認める事由が発生した場合、監査等委員会は、株主総会に提出する会計監査人の解任または不再任の議案内容を決定します。

当社の監査等委員会にて慎重に審議した結果、EY新日本有限責任監査法人につき、上記に該当する事項は確認されていないこと、また、同監査法人の監査能力及び監査品質について特段指摘すべき事由はないことから、同法人を再任することといたしました。

6) 監査等委員及び監査等委員会による監査法人の評価

監査等委員及び監査等委員会は、会計監査人であるEY新日本有限責任監査法人に対し、品質管理、独立性、専門性等の評価基準に基づいて、定期的な評価を行うとともに、経理部門や内部監査部門の意見も踏まえ、監査は適正に実施されていると評価いたしました。

監査報酬の内容等

1) 監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)
提出会社	147	23	168	6
連結子会社	19	-	19	-
計	166	23	187	6

2) 監査公認会計士等と同一のネットワーク(Ernst & Young)に対する報酬(上記、1)を除く)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)
提出会社	-	513	-	578
連結子会社	507	97	496	377
計	507	610	496	955

3) その他重要な報酬の内容

前連結会計年度

該当する事項はありません。

当連結会計年度

該当する事項はありません。

4) 監査公認会計士等の非監査業務の内容

前連結会計年度

当社及び連結子会社は会計監査人に対して、国際財務報告基準(IFRS)並びに税務に関する助言業務等を委託した対価を支払っております。

当連結会計年度

当社及び連結子会社は会計監査人に対して、国際財務報告基準(IFRS)並びに税務に関する助言業務等を委託した対価を支払っております。

5) 監査報酬の決定方針

会計監査人に対する報酬の額は、会計監査人から提示された監査計画の内容や監査時間数等を勘案した上で決定しております。

6) 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査等委員会は、会計監査人が作成した当期の監査計画における監査時間・配員計画等の内容、報酬額の見積り等の相当性を確認し、加えて過年度の監査計画に対する職務執行状況も考慮し、検討した結果、会計監査人の報酬等につき、会社法第399条第1項に基づき同意いたしました。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

1) 取締役報酬

基本方針及び算定方法

当社は取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬等の額の決定に関する方針を定めており、その内容は、透明性と公平性を確保すべく、諮問機関である役員人事・報酬委員会を設置し、その審議のうえ取締役会にて決定するというものであります。取締役会は、当事業年度に係る取締役の個人別の報酬等について、内容が当該方針と整合していることを確認し、当該方針に沿うものであると判断しております。

なお、当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬限度額は、2023年3月30日開催の第147回定時株主総会で定められた年額570百万円以内です。

報酬体系

取締役（社外取締役及び監査等委員である取締役を除く。）の報酬は、固定報酬となる基本報酬、短期の業績連動報酬として「会社業績（会社の業績とそれに応じた個人業績等）の対公表値及び業績の伸長率等の達成度と連動した賞与、及び、取締役（社外取締役及び監査等委員である取締役を除く。）に、株価変動のメリットとリスクを株主の皆様と共有し、株価上昇及び企業価値向上への貢献意欲を従来以上に高めるため、2018年3月29日開催の第142回定時株主総会の決議（2023年3月30日開催の第147回定時株主総会において監査等委員会設置会社への移行に伴い同一の内容を決議）により導入した、中長期の業績連動報酬となる譲渡制限付株式報酬から構成されています。この譲渡制限付株式報酬に関する報酬の総額は、報酬限度額とは別枠として年額300百万円以内です。

なお2025年度は、業績等を総合的に勘案し、当該報酬限度額の範囲内で決定、支給いたしました。

役位ごとの固定報酬と短期・中長期の業績連動報酬の支給割合

役職毎の各報酬の支給割合は、毎年の業績に応じて変動いたします。

役員報酬の内容

提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）				対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	業績連動報酬			
			賞与	譲渡制限付 株式報酬	中期業績 連動報酬	
取締役（監査等委員及び社外取締役を除く）	537	198	95	149	95	6
監査等委員 (社外取締役を除く)	46	32	13			2
社外役員	81	81				8

役員人事・報酬委員会の構成

指名委員会又は報酬委員会に相当する任意の委員会（2025年12月31日現在）

委員会の名称	全委員	社内取締役	社外取締役	委員長
役員人事・報酬委員会	5名	山石昌孝 清宮眞二	清水 恵 高田寿子 河野宏和	山石昌孝 (代表取締役)

当委員会は代表取締役会長、社長、及び独立社外取締役3名の計5名により構成されています。

役員人事・報酬委員会は、2025年度は4回開催され、役員の人事及び報酬について、取締役会に進言しています。

なお、2026年3月27日以降の委員会の体制（予定）は以下のとおりです。

委員会の名称	全委員	社内取締役	社外取締役	委員長
役員人事・報酬委員会	5名	山石昌孝 清宮眞二	清水 恵 高田寿子 河野宏和	河野宏和 (社外取締役)

提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等連結報酬等の総額が1億円以上であるもの

氏名	連結報酬等の総額(百万円)	役員区分	会社区分	報酬等の種類別の総額(百万円)			
				基本報酬	賞与	譲渡制限付株式報酬	中期業績連動報酬
山石 昌孝	169	取締役	提出会社	56	33	50	30
清宮 眞二	168	取締役	提出会社	55	33	50	30
Nitin Mantri	518	取締役	提出会社	32		20	8
		取締役	連結子会社 Yokohama Off-Highway Tire K.K		(注) 93		
		取締役	連結子会社 ATC Tires Private Ltd.	30			
		取締役	連結子会社 Yokohama TWS Holding AB		(注) 132		
		取締役	連結子会社 Yokohama Off-Highway Tires America Inc.	115	89		

注：2025年度から2029年度に係る長期インセンティブプランの2025年度に係る費用計上額を記載

・中期業績連動報酬

(ア) 中期業績連動報酬制度の概要

当社は、第149期会計年度より、2024年3月28日の定時株主総会で選任された当社の社外取締役及び監査等委員を除く取締役（以下、「対象取締役」という）、および同年3月28日時点の執行役員（以下「対象執行役員」という）の全員を対象とし、中期経営計画の定量目標の達成意欲を従来以上に高めることを目的として、2024年2月21日の役員人事・報酬委員会での諮問、及び同年2月26日の監査等委員会の確認を経て、同年3月26日の取締役会の決議により、中期業績連動報酬制度を策定いたしました。

対象者

役位	人数
代表取締役	2名
取締役専務執行役員	1名
取締役常務執行役員	2名
取締役執行役員	1名
執行役員	17名

(イ) 中期業績連動報酬の算定方法

当社グループの中期経営計画の定量目標である、2024年度から2026年度末までの3ヵ年（以下「対象期間」という）の連結事業利益（売上収益から売上原価および販売費及び一般管理費を差し引いた金額）の合計4,105億円を基準とし、対象取締役および対象執行役員の全員について、以下の計算式で中期業績連動報酬を算定することとしております。

対象期間の累積連結事業利益 ÷ 4,105億円 × 100	算定方法
120%以上	月額報酬 × 12ヶ月 × 支給係数1.5
100%以上120%未満	月額報酬 × 12ヶ月 × 支給係数1
90%以上100%未満	月額報酬 × 12ヶ月 × 支給係数0.25
90%未満	支給しない

なお、達成率が90%以上の場合、達成度に比例して0.25～1.5の間でインセンティブ率を変動させます。また、月額報酬は、役位別に定められる2024年4月度の月額報酬とし、対象期間の途中で役位が変更となった場合

は、対象役位時の月額報酬を基準に在任期間に応じ按分支給します。

(ウ) 中期業績連動報酬の限度額

対象取締役について、個人の限度額は最大8,478万円としております。

(エ) 中期業績連動報酬の支給方法

対象期間終了後に最初に開催する定時株主総会で、中期業績連動報酬の金額の算定の基礎とした累積連結事業利益の数値が確定した日の翌日から一ヶ月を経過する日までに現金で支給することとしております。

なお、2024年3月28日以降の対象期間の途中で、対象取締役または対象執行役員が退任した場合、および社外取締役を除く取締役または執行役員に新たに選任された場合は、以下の算式で按分した上で、同時期に支給することとしております。

(いずれも円未満は切り捨てとし、月の途中で選任・退任した場合は在任月数を1ヶ月に繰り上げる。)

退任の場合

(月額報酬×12ヶ月×支給係数)×(対象期間中の在任月数÷36ヶ月)

選任の場合

(選任月の月額報酬×12ヶ月×支給係数)×(対象期間中の在任月数÷36ヶ月)

2) 監査等委員である取締役の報酬

基本方針及び算定方法

当社は監査等委員である取締役の報酬等の額の決定に関する方針を定めており、その内容は、監査の透明性と公平性に加え、経営からの独立性を確保すべく、監査等委員会で協議し、全員の同意をもって決定するというものであります。

なお、当社の監査等委員である取締役の報酬限度額は、2024年3月28日開催の第148回定時株主総会で定められた年額130百万円以内です。

報酬体系

監査等委員である取締役の報酬は、固定報酬と賞与(社外取締役を除く)で構成することとしております。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、純投資目的以外の目的である投資株式（政策保有株式）のみ保有しています。

専ら株式の価値の変動または、株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする純投資目的である投資株式は、保有していません。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a . 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

1) 政策保有に関する方針

当社は、企業の拡大・持続的発展のためには、様々な企業との協力関係が不可欠であると考え、当社の企業価値を向上させるための中長期的な視点に立ち、重要な協力関係にある企業との戦略上の結びつきや、取引先との事業上の協力関係等を総合的に勘定し、政策的に必要とする株式については保有していく方針です。

2) 政策保有の適否の検証

当社は、年1回、中長期的な観点で個別の政策保有株式について、取引の性質や規模等に加え保有に伴う便益やリスクを定性・定量両面から検証を行い、取締役会へ報告しております。

なお、当事業年度は、2025年2月の取締役会における検証を踏まえ、3銘柄の株式を全数売却、3銘柄の株式を一部売却しました。

b . 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	34	486
非上場株式以外の株式	42	20,362

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	
非上場株式以外の株式	1	0	継続的な取引関係強化の為に取引先持株会に加入しています。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	-	-
非上場株式以外の株式	6	52,000

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果及び株式数が 増加した理由(注)1	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)みずほフィナンシャルグループ	754,693	754,693	主要取引金融機関である発行会社傘下の子会社との間で、資金調達や資金決済取引等を行っており、財務取引に係る関係の維持・強化を図るため、継続保有しております。	無 (注)2
	4,302	2,923		
(株)イエローハット(注)3	1,188,316	594,158	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、同事業の拡大を目的とした関係の維持・強化を図るため、継続保有しております。	有
	1,949	1,596		
(株)ADEKA	443,200	443,200	当社の主要原料である配合剤の取引先であり、事業の安定的な操業継続等を目的とし、継続保有しております。また、当社は古河グループ(古河三水会)の理事会社として、グループ各社それぞれの企業活動の強化促進に努め、活動を通じて有形無形のメリットを享受しております。	有
	1,718	1,255		
古河機械金属(株)	415,475	415,475	当社の油圧ホース製品の主要取引先であり、事業の安定的な操業継続等を目的とし、継続保有しております。また、当社は古河グループ(古河三水会)の理事会社として、グループ各社それぞれの企業活動の強化促進に努め、活動を通じて有形無形のメリットを享受しております。	有
	1,598	667		
三谷商事(株)	619,704	619,704	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、同事業の拡大を目的とした関係の維持・強化を図るため、継続保有しております。	有
	1,425	1,206		
(株)しずおかフィナンシャルグループ	523,446	523,446	主要取引金融機関である発行会社傘下の子会社との間で、資金調達や資金決済取引等を行っており、財務取引に係る関係の維持・強化を図るため、継続保有しております。	無 (注)2
	1,273	672		
古河電気工業(株)	110,000	110,000	当社は古河グループ(古河三水会)の理事会社として、グループ各社それぞれの企業活動の強化促進に努め、活動を通じて有形無形のメリットを享受しております。	有
	1,101	735		
出光興産(株)	856,000	856,000	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、同事業の拡大を目的とした関係の維持・強化を図るため、継続保有しております。	無
	1,013	886		
神奈川中央交通(株)	240,000	240,000	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、同事業の拡大を目的とした関係の維持・強化を図るため、継続保有しております。	有
	900	913		
(株)ロジネットジャパン	143,748	143,748	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、同事業の拡大を目的とした関係の維持・強化を図るため、継続保有しております。	無
	594	422		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果及び株式数が 増加した理由(注)1	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)横浜フィナン シャルグループ	415,595	415,595	主要取引金融機関である発行会社傘下の子 会社との間で、資金調達や資金決済取引等 を行っており、財務取引に係る関係の維持・ 強化を図るため、継続保有しております。	無 (注)2
	538	362		
(株)オートバック スセブン	313,632	313,632	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	517	460		
三愛オブリ(株)	210,250	210,250	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	有
	444	398		
日本ゼオン(株)	221,600	2,139,400	当社の主要原料である合成ゴムの取引先で あり、事業の安定的な操業継続等を目的と し、継続保有しております。また、当社は 古河グループ(古河三水会)の理事会社と して、グループ各社それぞれの企業活動の 強化促進に努め、活動を通じて有形無形の メリットを享受しております。	有
	397	3,207		
山九(株)	46,207	46,207	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	有
	391	253		
東武鉄道(株)	137,208	137,208	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	362	352		
YHI International Ltd	6,960,000	6,960,000	アジア市場における当社の市販用タイヤの 主要取引先であり、当社とマレーシアにお いて合弁会社を設立し、市場シェア拡大と 成長基盤の構築を図っています。	無
	335	393		
神姫バス(株) (注)4	120,000	60,000	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	有
	232	207		
富士急行(株)	102,303	102,303	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	212	229		
(株)百五銀行	181,334	181,334	当社の取引金融機関として、資金調達や資 金決済取引等を行っており、財務取引に係 る関係の維持・強化を図るため、継続保有 しております。	有
	208	115		
伊藤忠エネクス (株)	102,686	102,686	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	195	168		
セイノーホール ディングス(株)	81,441	81,441	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	192	193		
センコー(株)	66,700	66,700	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	130	99		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果及び株式数が 増加した理由(注)1	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
大和自動車交通 (株)	80,000	80,000	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	93	57		
太平洋工業(株)	14,547	14,547	当社のタイヤ関連商品の取引先であり、事 業の安定的な操業継続等を目的とし、継続 保有しております。	有
	47	20		
京成電鉄(株) (注)5	33,750	11,250	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	44	48		
広島電鉄(株)	63,000	63,000	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	38	40		
日新商事(株)	25,000	25,000	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	有
	31	22		
東海汽船(株)	8,800	8,800	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	28	25		
三重交通グルー プホールディン グス(株)	48,614	48,614	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	26	24		
北海道コカ・ コーラボトリン グ(株)	5,082	5,082	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。	無
	20	14		
丸全昭和運輸(株)	1,063	1,042	当社の市販用タイヤの主要取引先であり、 同事業の拡大を目的とした関係の維持・強 化を図るため、継続保有しております。また、 株式数の増加は、取引先持株会に加入 しているためであります。	無
	9	6		
(株)ふくおかフィ ナンシャルグ ループ	153	153	主要取引金融機関である発行会社傘下の子 会社との間で、資金調達や資金決済取引等 を行っており、財務取引に係る関係の維持・ 強化を図るため、継続保有しております。	無
	1	1		
(株)SUBARU	100	100	当社の新車向けタイヤの主要取引先であ り、同事業の拡大を目的とした関係の維持・ 強化を図るため、継続保有しております。	無
	0	0		
トヨタ自動車(株)	100	-	当社の新車向けタイヤの主要取引先であ り、同事業の拡大を目的とした関係の維持・ 強化を図るため、保有しております。	無
	0	-		
いすゞ自動車(株)	100	100	当社の新車向けタイヤ及び自動車用ホース 製品の主要取引先であり、同事業の拡大を 目的とした関係の維持・強化を図るため、 継続保有しております。	無
	0	0		
スズキ(株)	100	100	当社の新車向けタイヤの主要取引先であ り、同事業の拡大を目的とした関係の維持・ 強化を図るため、継続保有しております。	無
	0	0		
本田技研工業(株)	100	3,000,000	当社の新車向けタイヤの主要取引先であ り、同事業の拡大を目的とした関係の維持・ 強化を図るため、継続保有しております。	無
	0	4,605		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果及び株式数が 増加した理由(注)1	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
マツダ(株)	100	100	当社の新車向けタイヤ及び自動車用ホース 製品の主要取引先であり、同事業の拡大を 目的とした関係の維持・強化を図るため、 継続保有しております。	無
	0	0		
日産自動車(株)	138	138	当社の新車向けタイヤの主要取引先であ り、同事業の拡大を目的とした関係の維 持・強化を図るため、継続保有してありま す。	無
	0	0		
日野自動車(株)	100	100	当社の新車向けタイヤ及び自動車用ホース 製品の主要取引先であり、同事業の拡大を 目的とした関係の維持・強化を図るため、 継続保有しております。	無
	0	0		
三菱自動車工業 (株)	100	100	当社の新車向けタイヤの主要取引先であ り、同事業の拡大を目的とした関係の維 持・強化を図るため、継続保有してありま す。	無
	0	0		
東京製綱(株)	-	267,121	該当事業年度末日において、同社株式は保 有しておりません。	無
	-	349		
富士通(株)	-	150,000	当該事業年度末日において、同社株式は保 有しておりません。	無
	-	420		

(注)1 各銘柄の定量的な保有効果の記載は困難ですが、当社では、2025年12月31日を基準として、2026年2月の取締役会等において、取引の性質や規模等に加え保有に伴う便益やリスクを定性・定量両面から検証を行い、必要な対応を実施しています。

(注)2 発行会社は当社株式を保有しておりませんが、同子会社が当社株式を保有しております。

(注)3 (株)イエローハットは2025年4月1日付けで、普通株式1株につき2株の割合で株式分割をしています。

(注)4 神姫バス(株)は2025年10月1日付けで、普通株式1株につき2株の割合で株式分割をしています。

(注)5 京成電鉄(株)は2025年1月1日付けで、普通株式1株につき3株の割合で株式分割をしています。

みなし保有株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果及び株式数が 増加した理由(注)1	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)みずほフィナンシャルグループ	320,000	320,000	主要取引金融機関である発行会社傘下の子会社との間で、資金調達や資金決済取引等を行っており、財務取引に係る関係の維持・強化を図るため、継続保有しております。	無 (注)2
	1,824	1,239		
古河電気工業(株)	50,000	50,000	当社は古河グループ(古河三水会)の理事会社として、グループ各社それぞれの企業活動の強化促進に努め、活動を通して有形無形のメリットを享受しております。	有
	501	334		
トヨタ自動車(株)	-	12,492,975	該当事業年度末日において、同社株式は保有していません。	無
	-	39,303		
日本ゼオン(株)	-	3,400,000	該当事業年度末日において、同社株式は保有していません。	有
	-	5,097		

(注)1 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算していません。

(注)2 発行会社は当社株式を保有していませんが、同子会社が当社株式を保有しております。

保有目的が純投資目的である投資株式

該当する事項はありません。

当事業年度に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当する事項はありません。

第5 【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。)第312条の規定により、国際財務報告基準(以下「IFRS」という。)に準拠して作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2025年1月1日から2025年12月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2025年1月1日から2025年12月31日まで)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備を行っております。その内容は以下のとおりであります。(1) 会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更についての確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、研修等に参加することによって専門知識の蓄積に努めております。

(2) IFRSの適用については、国際会計基準審議会が公表するプレスリリースや基準書を随時入手し、最新の基準の把握を行っております。また、IFRSに基づく適正な連結財務諸表等を作成するため、IFRSに準拠したグループ会計方針等を作成し、それらに基づいて会計処理を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結財政状態計算書】

		(単位：百万円)	
	注記	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
資産			
流動資産			
現金及び現金同等物	8	136,215	107,391
営業債権及びその他の債権	9,32	281,020	333,987
その他の金融資産	11,32	9,059	8,576
棚卸資産	10	280,633	319,055
その他の流動資産	7	23,445	39,818
小計		730,372	808,828
売却目的で保有する非流動資産	12	19,342	17,340
流動資産 合計	19	749,714	826,168
非流動資産			
有形固定資産	13,15, 16,19	517,516	634,266
のれん	14,16	296,814	332,899
無形資産	14,15, 16	72,455	126,438
その他の金融資産	11,32	49,354	44,072
繰延税金資産	17	8,276	7,488
その他の非流動資産	21	41,415	27,029
非流動資産 合計	19	985,830	1,172,192
資産 合計		1,735,544	1,998,360

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
負債及び資本			
負債			
流動負債			
営業債務及びその他の債務	18,32	108,517	112,706
社債及び借入金	19,32	101,476	135,230
その他の金融負債	7,15, 20,32	32,477	33,577
未払法人所得税		38,767	53,896
その他の流動負債	7	93,610	111,632
流動負債 合計		374,847	447,041
非流動負債			
社債及び借入金	19,32	336,546	400,540
その他の金融負債	15,20, 32	42,663	44,286
退職給付に係る負債	21	17,227	16,734
繰延税金負債	17	44,357	29,365
その他の非流動負債		15,892	20,163
非流動負債 合計		456,684	511,089
負債 合計		831,531	958,130
資本			
資本金	22	38,909	38,909
資本剰余金	22	31,386	29,967
利益剰余金	22	619,730	709,386
自己株式	22	15,441	15,662
その他の資本の構成要素		219,387	268,251
親会社の所有者に帰属する持分 合計		893,971	1,030,851
非支配持分		10,042	9,379
資本合計		904,013	1,040,231
負債及び資本合計		1,735,544	1,998,360

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
売上収益	6, 7	1,094,746	1,234,959
売上原価	13, 14, 21, 30	704,995	788,154
売上総利益		389,750	446,805
販売費及び一般管理費	13, 14, 21, 24, 30	255,371	280,228
事業利益	6	134,379	166,577
その他の収益	25	6,081	4,612
その他の費用	16, 26	21,304	18,288
営業利益		119,157	152,901
金融収益	27	5,554	17,649
金融費用	27	9,352	13,364
税引前利益		115,359	157,186
法人所得税費用	17	39,228	50,401
当期利益		76,130	106,785
当期利益の帰属			
親会社の所有者		74,919	105,398
非支配持分		1,211	1,386
当期利益		76,130	106,785
基本的1株当たり当期利益(円)	29	467.81	668.55
希薄化後1株当たり当期利益(円)	29	466.57	666.55

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	注記	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
当期利益		76,130	106,785
その他の包括利益			
純損益に振り替えられることのない項目			
その他の包括利益を通じて測定する 金融資産の公正価値の純変動	28,32	13,241	4,403
確定給付制度の再測定	21,28	7,876	2,104
純損益に振り替えられる可能性のある 項目			
キャッシュ・フロー・ヘッジ	28	530	1,237
在外営業活動体の換算差額	28	77,499	49,067
税引後その他の包括利益合計		99,146	54,338
当期包括利益		175,276	161,122
当期包括利益の帰属			
親会社の所有者		173,585	159,574
非支配持分		1,692	1,549
当期包括利益		175,276	161,122

【連結持分変動計算書】

前連結会計年度(自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)

(単位:百万円)

	注記	親会社の所有者に帰属する持分					
		資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	その他の資本の構成要素	
						在外営業活動体の換算差額	キャッシュ・フロー・ヘッジ
2024年1月1日 残高		38,909	31,255	510,004	11,587	121,674	305
当期利益				74,919			
その他の包括利益	28					77,053	530
当期包括利益		-	-	74,919	-	77,053	530
自己株式の取得	22				3,921		
自己株式の処分	22						
株式報酬取引	22,30		131		66		
自己株式の消却							
剰余金の配当	23			15,434			
支配の喪失とならない子会社に対する非支配株主との取引							
利益剰余金への振替				50,262			
その他				21			
所有者との取引額等合計		-	131	34,808	3,855	-	-
2024年12月31日 残高		38,909	31,386	619,730	15,441	198,727	225

	注記	親会社の所有者に帰属する持分				非支配持分	資本合計
		その他の資本の構成要素			合計		
		その他の包括利益を通じて測定する金融資産の公正価値の純変動	確定給付制度の再測定	合計			
2024年1月1日 残高		49,614	-	170,983	739,565	9,231	748,795
当期利益				-	74,919	1,211	76,130
その他の包括利益	28	13,215	7,868	98,666	98,666	480	99,146
当期包括利益		13,215	7,868	98,666	173,585	1,692	175,276
自己株式の取得	22			-	3,921		3,921
自己株式の処分	22			-	-		-
株式報酬取引	22,30			-	197		197
自己株式の消却				-	-		-
剰余金の配当	23			-	15,434	880	16,314
支配の喪失とならない子会社に対する非支配株主との取引				-	-		-
利益剰余金への振替		42,394	7,868	50,262	-		-
その他				-	21		21
所有者との取引額等合計		42,394	7,868	50,262	19,178	880	20,058
2024年12月31日 残高		20,435	-	219,387	893,971	10,042	904,013

当連結会計年度(自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)

(単位:百万円)

	注記	親会社の所有者に帰属する持分					
		資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	その他の資本の構成要素	
						在外営業活動体の換算差額	キャッシュ・フロー・ヘッジ
2025年1月1日 残高		38,909	31,386	619,730	15,441	198,727	225
当期利益				105,398			
その他の包括利益	28					48,947	1,237
当期包括利益		-	-	105,398	-	48,947	1,237
自己株式の取得	22				6,008		
自己株式の処分	22		0		0		
株式報酬取引	22,30		79		109		
自己株式の消却			488	5,190	5,678		
剰余金の配当	23			15,863			
支配の喪失とならない子会社に対する非支配株主との取引			1,011				
利益剰余金への振替				5,311			
その他							
所有者との取引額等合計		-	1,419	15,742	221	-	-
2025年12月31日 残高		38,909	29,967	709,386	15,662	247,674	1,012

	注記	親会社の所有者に帰属する持分				非支配持分	資本合計
		その他の資本の構成要素			合計		
		その他の包括利益を通じて測定する金融資産の公正価値の純変動	確定給付制度の再測定	合計			
2025年1月1日 残高		20,435	-	219,387	893,971	10,042	904,013
当期利益				-	105,398	1,386	106,785
その他の包括利益	28	4,381	2,084	54,175	54,175	162	54,338
当期包括利益		4,381	2,084	54,175	159,574	1,549	161,122
自己株式の取得	22			-	6,008		6,008
自己株式の処分	22			-	0		0
株式報酬取引	22,30			-	189		189
自己株式の消却				-	-		-
剰余金の配当	23			-	15,863	664	16,527
支配の喪失とならない子会社に対する非支配株主との取引				-	1,011	1,547	2,558
利益剰余金への振替		3,227	2,084	5,311	-		-
その他				-	-		-
所有者との取引額等合計		3,227	2,084	5,311	22,693	2,211	24,905
2025年12月31日 残高		21,589	-	268,251	1,030,851	9,379	1,040,231

【連結キャッシュ・フロー計算書】

		(単位：百万円)	
	注記	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー			
		115,359	157,186
		66,157	73,622
		11,449	3,160
	21	849	19,156
		5,029	4,380
		5,415	8,535
		1,860	442
		22,571	32,971
		3,535	7,173
		12,273	2,876
		2,798	17,876
		155,060	196,825
		4,944	4,283
		5,487	8,353
		60,021	57,125
		94,496	135,630
投資活動によるキャッシュ・フロー			
		1,638	5,188
		1,398	2,345
		76,965	111,626
		4,139	1,767
		825	658
		209	24
		73,613	8,378
		526	-
	33	-	140,527
		1,912	1,451
		1,392	241,298
財務活動によるキャッシュ・フロー			
	31	4,801	15,610
	31	10,094	142,487
	31	48,058	55,649
	31	10,036	9,751
		3,921	6,007
		197	187
	23	15,429	15,861
		861	2,700
		63,213	68,317
現金及び現金同等物に係る換算差額			
		8,149	8,528
現金及び現金同等物の増減額(は減少)			
		38,040	28,823
現金及び現金同等物の期首残高			
	8	97,613	136,215
連結の範囲の変更に伴う現金及び現金同等物の増減額(は減少)			
		561	-
現金及び現金同等物の期末残高			
	8	136,215	107,391

【連結財務諸表注記】

1. 報告企業

横浜ゴム株式会社(以下「当社」という)は、日本に所在する株式会社であります。当社の連結財務諸表は、当社及び連結子会社(以下「当社グループ」という)から構成されており、2025年12月31日に終了する年度の連結財務諸表は、2026年3月25日に取締役会によって承認されております。当社グループの主な事業内容は、「注記6.セグメント情報」に記載しております。

2. 作成の基礎

(1) IFRSに準拠している旨

当社グループの連結財務諸表は、国際会計基準審議会によって公表されたIFRSに準拠して作成しております。当社は、連結財務諸表規則第1条の2第1号に掲げる「指定国際会計基準特定会社」の要件を全て満たしているため、同第312条の規定を適用しております。

(2) 測定の基礎

連結財務諸表は、「注記3.重要性のある会計方針」に記載している金融商品等を除き、取得原価を基礎として作成しております。

(3) 表示通貨及び単位

連結財務諸表は、当社の機能通貨である日本円を表示通貨としており、百万円未満の端数は四捨五入して表示しております。

3. 重要性のある会計方針

(1) 連結の基礎

子会社とは、当社グループが支配を有する事業体をいいます。当社グループでは、ある事業体への関与により生じる変動リターンに対するリスク又は権利を有し、かつ、当該事業体に対するパワーを通じてその変動リターンに影響を及ぼす能力がある場合に、支配していると判断しております。

子会社はすべて、取得日すなわち当社グループが支配を獲得した日から、当社グループが支配を喪失する日まで連結しております。

子会社が適用する会計方針が当社グループの適用する会計方針と異なる場合には、必要に応じ当該子会社の財務諸表の調整を行っております。

支配の喪失を伴わない子会社に対する持分変動があった場合には、資本取引として会計処理しており、利得又は損失を認識しておりません。一方、支配の喪失を伴う子会社に対する持分変動があった場合には、子会社の資産及び負債、子会社に関連する非支配持分及びその他の包括利益累計額の認識を中止しております。

子会社の包括利益は、非支配持分が負の残高となる場合であっても、当社持分と非支配持分に帰属させております。当社グループ間の債権債務残高及び内部取引高、並びに当社グループ間の取引から生じた未実現損益は、連結財務諸表の作成に際して消去しております。

(2) 企業結合

企業結合の会計処理は取得法によっております。当社グループは、企業結合ごとに、公正価値又は被取得企業の識別可能純資産に対する持分割合相当額のいずれかにより、被取得企業に対する非支配持分を測定するかを選択しております。企業結合において取得した識別可能資産及び引き受けた識別可能負債と偶発債務は、取得日における公正価値で測定しております。また、発生した取得費用は、発生時に費用処理しております。

のれんは、移転された企業結合の対価、被取得企業の非支配持分の金額及び取得企業が以前に保有していた被取得企業の資本持分の公正価値の合計額が、取得日における識別可能資産及び負債の正味価額を上回る場合にその超過額として測定しております。

(3) 外貨換算

外貨建取引

外貨建取引は、取引日における直物為替レートにより当社及び子会社の各機能通貨に換算しております。

期末日における外貨建貨幣性資産及び負債は、期末日の為替レートで機能通貨に再換算し、当該換算及び決済に

より生じる換算差額は純損益として認識しております。但し、発生する換算差額がその他の包括利益で認識される資産及び負債に関しては、それらから生じる換算差額はその他の包括利益として認識し、その累計額はその他の資本の構成要素に認識しております。

在外営業活動体の換算

在外営業活動体の資産及び負債は期末日の為替レートにより、収益及び費用は連結会計期間中の為替レートが著しく変動していない限り、期中平均為替レートにより円換算しております。在外営業活動体の財務諸表の換算により発生する換算差額は、その他の包括利益として認識し、その累計額はその他の資本の構成要素に認識しております。

(4)金融商品

デリバティブ以外の金融資産

()当初認識及び測定

営業債権及びその他の債権を、これらの発生日に当初認識しております。その他のすべての金融資産は、当社グループが当該金融資産の契約当事者となった取引日に当初認識しております。すべての金融資産は、純損益を通じて公正価値で測定される金融資産に分類される場合を除き、公正価値に取引コストを加算した金額で当初測定しております。金融資産は償却原価で測定される金融資産と、純損益又はその他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産に分類し、当初認識時にその分類を決定しております。金融資産は、以下の要件をともに満たす場合には、償却原価で測定される金融資産に分類しております。

- ・契約上のキャッシュ・フローを回収するために金融資産を保有することを目的とする事業モデルの中で保有されている。
- ・契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払いのみであるキャッシュ・フローが所定の日に生じる。

償却原価で測定される金融資産以外の金融商品は公正価値で測定される金融資産に分類しております。

公正価値で測定される資本性金融資産は、その他の包括利益を通じて認識することを選択する場合には、その指定を行い、取消不能なものとして継続的に適用しております。

公正価値で測定される負債性金融資産は、以下の要件を満たす場合にその他の包括利益を通じて公正価値で測定される金融資産に分類し、満たさない場合は純損益を通じて公正価値で測定される金融資産に分類しております。

- ・契約上のキャッシュ・フローの回収と売却の両方によって目的が達成される事業モデルに基づいて保有されている。
- ・金融資産の契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払のみであるキャッシュ・フローが所定の日に生じる。

()事後測定

償却原価で測定される金融資産は、実効金利法による償却原価により測定しております。

公正価値で測定される資本性金融資産のうち、その他の包括利益を通じて公正価値で測定すると指定したもののについては、公正価値の変動額をその他の包括利益として認識しており、当該金融資産の認識の中止が行われる場合、又は公正価値が著しく下落した場合、過去に認識したその他の包括利益は利益剰余金に直接振り替えております。

また、公正価値で測定される負債性金融資産のうち、その他の包括利益を通じて公正価値で測定すると分類したもののについては、公正価値の変動額を、減損利得又は減損損失及び為替差損益を除き、当該金融資産の認識の中止が行われるまで、その他の包括利益として認識しております。当該金融資産の認識の中止が行われる場合、過去に認識したその他の包括利益は純損益に振り替えております。

なお、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融資産からの配当金については、金融収益として認識しております。

()金融資産の減損

償却原価で測定する金融資産に係る減損については、当該金融資産に係る予想信用損失に対して貸倒引当金を認識しております。

予想信用損失は、契約に基づいて当社グループが受け取るべき契約上のキャッシュ・フローと、当社グルー

プが受け取ると見込んでいるキャッシュ・フローとの差額を当初の実効金利で割り引いたものであります。各期末日において、金融商品に係る信用リスクが当初認識以降に著しく増大したかどうかを評価しており、当該信用リスクが当初認識以降に著しく増大していない場合には、当該金融商品に係る貸倒引当金を12ヶ月の予想信用損失に等しい金額で測定しております。また、当該金融商品に係る信用リスクが当初認識以降に著しく増大している場合には、当該金融資産に係る貸倒引当金を全期間の予想信用損失に等しい金額で測定しております。但し、営業債権等については、常に貸倒引当金を全期間の予想信用損失に等しい金額で測定しております。

金融資産に係る貸倒引当金の繰入額は、純損益で認識しております。貸倒引当金を減額する事象が発生した場合は、貸倒引当金の戻入額を純損益で認識しております。

金融商品の予想信用損失は、以下のものを反映する方法で見積もっております。

- ・一定範囲の生じ得る結果を評価することにより算定される、偏りのない確率加重金額
- ・貨幣の時間価値
- ・過去の事象、現在の状況及び将来の経済状況の予測についての、期末日において過大なコストや労力をかけずに利用可能な合理的で裏づけ可能な情報

()認識の中止

金融資産からのキャッシュ・フローを受領する権利が消滅する場合、又は金融資産のキャッシュ・フローを受け取る契約上の権利を譲渡し、当該金融資産の所有に係るリスクと経済価値が実質的に移転する場合に、金融資産の認識を中止しております。

デリバティブ以外の金融負債

()当初認識及び測定

当社グループが発行した負債証券はその発行日に当初認識しております。負債証券以外の金融負債は、当該金融負債の契約当事者となる取引日に当初認識しております。すべての金融負債は、償却原価で測定される金融負債に分類しており、公正価値に取引コストを減算した金額で当初測定しております。

()事後測定

金融負債は、実効金利法による償却原価で事後測定しております。

()認識の中止

金融負債は消滅した時、すなわち、契約中に特定された債務が免責、取消し、又は失効となった時に認識を中止しております。

金融資産と金融負債の相殺

金融資産及び負債は、当社グループが残高を相殺する法的権利を有しており、かつ純額で決済するか、又は資産の回収と負債の決済を同時に行う意図を有する場合にのみ、連結財政状態計算書上で相殺し、純額で表示しております。

デリバティブ及びヘッジ会計

当社グループは、為替リスクや金利リスクをそれぞれヘッジするために、為替予約等のデリバティブを利用しております。これらのデリバティブは、契約が締結された時点の公正価値で当初測定し、その後も公正価値で事後測定しております。デリバティブの公正価値の変動額についての会計処理は、適格なヘッジ手段に指定される場合はヘッジ目的とヘッジ指定により決定され、適格なヘッジ手段に指定されない場合のデリバティブの公正価値の変動は純損益として認識しております。

(5)現金及び現金同等物

現金及び現金同等物は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(6)棚卸資産

棚卸資産は、取得原価と正味実現可能価額のうちいずれか低い額により測定しております。原価の算定に当たっ

ては主として加重平均法を使用しております。

(7)有形固定資産

有形固定資産は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額で表示しております。取得原価には、当該資産の取得に直接関連する費用、解体・除去及び土地の原状回復費用及び適格資産の取得、建設又は生産に直接起因する借入費用が含まれております。

有形固定資産の取得後に発生した支出については、当該支出に関連する将来の経済的便益が当社グループに流入する可能性が高く、当該支出が信頼性をもって測定できる場合に限り、資産として認識しております。

有形固定資産を当初認識時に取得原価で認識しており、測定に原価モデルを採用しております。

減価償却については、見積耐用年数にわたり、定額法を採用しております。

主要な有形固定資産の見積耐用年数は以下のとおりであります。

- ・建物及び構築物 5年～50年
- ・機械装置及び運搬具並びに工具、器具及び備品 2年～10年

資産の減価償却方法、残存価額及び見積耐用年数は各連結会計年度末に見直しを行い、変更があった場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって適用しております。

処分により発生する利得及び損失は、処分金額と当該資産の帳簿価額との差額により算出され、純損益に含めております。

(8)のれん及び無形資産

のれん

のれんは取得原価から減損損失累計額を控除した金額で表示しております。のれんは償却を行わず、減損テストを実施しております。減損については「(10)非金融資産の減損」に記載をしております。

その他の無形資産

個別に取得した無形資産は、当初認識時に取得原価で測定しており、企業結合で取得した無形資産は取得日現在における公正価値で測定しております。無形資産の認識後の測定においては原価モデルを採用し、取得原価から償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額で表示しております。

耐用年数を確定できる無形資産については、それぞれ見積耐用年数にわたって、定額法で償却しております。

主要な無形資産の見積耐用年数は以下のとおりであります。

- ・顧客関係資産 11～13年
- ・ソフトウェア 主として5年

資産の償却方法、残存価額及び見積耐用年数は期末日に見直しを行い、変更があった場合は、会計上の見積りの変更として将来に向かって適用しております。

(9)リース

使用権資産は、リース期間にわたり定期的に、減価償却を行っております。

リース料は、リース負債残高に対して一定の利子率となるように、金融費用とリース負債残高の返済部分とに配分しております。金融費用は連結損益計算書上、使用権資産に係る減価償却費と区別して表示しております。

リース取引におけるリース負債は、リース開始日におけるリース料総額の未決済分の割引現在価値として測定を行っております。使用権資産については、リース負債の当初測定に当初直接コスト、前払リース料等を調整し、リース契約に基づき要求される原状回復義務等のコストを加えた額で当初の測定を行っております。

契約がリースであるか否か、又は契約にリースが含まれているか否かについては、法的にはリースの形態をとらないものであっても、契約の実質に基づき判断しております。

なお、リース期間が12ヶ月以内に終了するリース及び原資産が少額であるリースについて、当該リースに関連したリース料を、リース期間にわたり定額法又は他の規則的な基礎のいずれかにより費用として認識しております。

(10)非金融資産の減損

各資産について減損の兆候の有無の判定を行い、ある事象や状況の変化によりその帳簿価額が回収不可能であるような兆候がある場合、減損テストを実施しております。耐用年数を確定できない無形資産及びのれんについては、減損の兆候の有無にかかわらず、毎年その資産の属する資金生成単位ごとに回収可能価額を見積り、減損テストを実施しております。

減損テストは、資産又は資金生成単位ごとに回収可能価額を見積もり、帳簿価額と比較することによって行っております。減損テストを実施する際には、個々の資産は、そのキャッシュ・フローが相互に独立して識別可能な最小単位でグループ分けしております。のれんについては、企業結合のシナジーによる便益を得ることが期待される各資金生成単位又は資金生成単位グループに配分しております。回収可能価額とは、資産の売却費用控除後の公正価値と、使用価値のいずれか高い金額であります。使用価値の算定において、見積将来キャッシュ・フローは、貨幣の時間的価値及び当該資産の固有のリスクを反映した割引率を用いて現在価値に割り引いております。

のれんを除く、過去に減損を認識した有形固定資産及び無形資産については、期末日において減損が戻入れとなる可能性について評価を行っております。

(11)退職後給付

当社グループは確定拠出制度及び確定給付制度を有しています。

確定拠出制度

確定拠出制度は、雇用主が一定額の掛金を他の独立した企業に拠出し、その拠出額以上の支払については法的又は推定的債務を負わないため、確定拠出制度に支払うべき拠出額を、従業員が関連する勤務を提供した期間に費用として認識しております。

確定給付制度

確定給付制度債務の現在価値及び関連する当期勤務費用並びに過去勤務費用を、予測単位積増方式を使用し、制度ごとに個別に算定しております。

割引率は、将来の毎年度の給付支払見込日までの期間を基に割引期間を設定し、割引期間に対応した期末日時点の優良社債の利回りに基づき算定しております。

確定給付制度債務の現在価値から制度資産の公正価値を控除した金額を、負債又は資産として認識しております。

勤務費用、過去勤務費用及び確定給付負債(資産)の純額に係る利息費用は純損益として認識しております。確定給付制度に係る負債又は資産の再測定額は、発生した期においてその他の包括利益として一括認識した後、直ちに利益剰余金に振り替えております。

(12)引当金

当社グループは、過去の事象の結果として現在の法的又は推定的債務を負っており、当該債務を決済するために経済的便益を有する資源の流出が生じる可能性が高く、その債務の金額について信頼性をもって見積もることができる場合に引当金を計上しております。引当金は、貨幣の時間的価値が重要な場合には、見積将来キャッシュ・フローを貨幣の時間的価値及び当該債務に特有のリスクを反映した税引前の利率を用いて現在価値に割り引いております。

(13)収益

当社グループでは、以下の5ステップアプローチに基づき、顧客への財やサービスの移転との交換により、その権利を得ると見込む対価を反映した金額で収益を認識しております。

- ステップ1：顧客との契約を識別する。
- ステップ2：契約における履行義務を識別する。
- ステップ3：取引価格を算定する。
- ステップ4：別個の履行義務へ取引価格を配分する。
- ステップ5：履行義務の充足時に、収益を認識する。

物品の販売による収益は、物品に対する支配が顧客に移転した時点で認識しており、将来予想される返品、値引き、割戻し等については収益を減額しております。返品額は過去のデータ等に基づいて予想返品率を見積り算出しております。値引き、割戻し額については、契約等に基づいて将来の支払額を見積り算出しております。注記7、収益もあわせてご参照ください。

(14)法人所得税

法人所得税費用は、当期税金と繰延税金とで構成されております。これらは、企業結合から生じた項目、その他の包括利益で認識される項目、及び資本に直接認識される項目を除き、純損益で認識しております。

当期税金は期末日において施行され又は実質的に施行されている税率及び税法に基づいて、当期の課税所得について納付すべき税額、又は還付されると見込まれる税額を測定しております。

繰延税金は、期末日現在における資産及び負債の税務基準額と会計上の帳簿価額との差額（一時差異）に対して資産負債法により繰延税金資産及び負債を計上しております。

ただし、例外として以下の一時差異に対しては、繰延税金資産及び負債を計上しておりません。

- ・のれんの当初認識から生じる一時差異
- ・企業結合以外の取引における会計上又は税務上のいずれの損益にも影響を及ぼさない取引かつ取引時に同額の将来加算一時差異と将来減算一時差異を生じさせない取引によって発生する資産又は負債の当初認識による差異
- ・子会社又は関連会社に対する投資に係る将来加算一時差異のうち、解消時期をコントロールでき、かつ予測可能な将来に当該一時差異が解消しない可能性が高い場合

繰延税金資産及び負債は、それらの一時差異が解消されると見込まれる連結会計年度の課税所得に対して適用されると予測される税率を用いて測定しております。繰延税金資産は、未使用の税務上の繰越欠損金、税額控除及び将来減算一時差異のうち、将来課税所得に対して利用できる可能性が高いものに限り認識しております。繰延税金資産及び負債は、当社グループが当期税金資産及び負債を相殺する法律上強制力のある権利を有しており、かつ、同一の税務当局によって同一の納税主体に課されている場合又は異なる納税主体に課されているものの、これらの納税主体が当期税金資産及び負債を純額ベースで決済することを意図している場合、相殺しております。

また、当社及び一部の国内連結子会社はグループ通算制度を適用しております。

なお、当社グループは、経済協力開発機構（OECD）が公表した第2の柱モデルルールを導入するために制定又は実質的に制定された税法から生じる法人所得税に係る繰延税金資産及び繰延税金負債に関して、IAS第12号「法人所得税」の認識及び情報開示に対する例外を適用しています。

(15) 資本

資本金及び資本剰余金

当社が発行する資本性金融商品は、発行価額を資本金及び資本剰余金に計上しております。また、その発行に直接起因する取引費用は資本から控除しております。

自己株式

自己株式を取得した場合には、取得原価を資本の控除項目として認識しております。自己株式を処分した場合には、帳簿価額と処分時の対価との差額を資本剰余金として認識しております。

(16) 株式報酬

当社グループは、当社の社外取締役を除く取締役に対する持分決済型の株式に基づく報酬として、譲渡制限付株式報酬制度を採用しております。受領したサービスの対価は、付与日における当社株式の公正価値で測定しており、付与日から権利確定期間にわたり連結損益計算書において費用として認識し、同額を連結財政状態計算書において資本の増加として認識しております。

(17) 非継続事業

当社グループは、経営上意思決定を行う単位としての事業について、すでに処分された場合、あるいは売却目的保有として分類すべき要件を満たした場合に、当該事業を非継続事業として分類することとしております。

4. 重要な会計上の判断、見積り及び仮定

当社グループは、IFRSに準拠した連結財務諸表を作成するために、会計方針の適用並びに資産、負債、収益及び費用の報告額に影響を及ぼす判断、会計上の見積り及び仮定を用いております。見積り及び仮定は、過去の実績や状況に応じ合理的と考えられる様々な要因に基づく経営者の最善の判断に基づいております。実際の結果は、その性質上、これらの見積り及び仮定と異なる場合があります。

なお、これらの見積り及びその基礎となる仮定は継続して見直しております。これらの見積りの見直しによる影響は、見積りを見直した期間及びその影響を受ける将来の期間において認識されます。

現下のウクライナ情勢及び中東問題に関しましては、未だ収束時期は不透明なものの、当社グループの経営環境に重大な影響はないものと仮定しております。

また、米国輸入関税につきましては、販売価格の見直しや販売数量増、その他コストダウンなどの内部改善による

関税影響の吸収を見込んでおり、こちらも当社グループの経営環境に重大な影響はないものと仮定しております。

しかしながら、見積りに用いた上記の仮定は不確定要素が多く、経営環境への影響が変化した場合には、その見積り及び仮定に影響を及ぼす可能性があります。

連結財務諸表に重要な影響を与える会計方針を適用する過程で行った判断に関する情報は、以下のとおりであります。

- ・連結子会社の範囲(注記3．重要性のある会計方針(1)連結の基礎)
- ・収益認識(注記3．重要性のある会計方針(13)収益, 注記7．収益)

連結財務諸表で認識する金額に重要な影響を与える見積り及び仮定は、以下のとおりであります。

- ・棚卸資産の評価(注記10．棚卸資産)

棚卸資産は、取得原価で測定しておりますが、期末日における正味実現価値が取得価額より下落している場合には、当該正味実現可能価額で測定し、取得原価との差額を原則として売上原価に認識しております。正味実現可能価額は、通常の事業過程における見積販売価格から完成までに要する見積原価及び見積販売費用を控除して算定しております。

当該見積りは、将来の不確実な市場環境の変動等に影響を受ける可能性があり、正味実現可能価額が著しく下落した場合には、損失が発生する可能性があります。

- ・非金融資産の減損(注記16．非金融資産の減損)

非金融資産に係る減損テストは、回収可能価額の算定について、資金生成単位の売却費用控除後の公正価値算定上の仮定、又は使用価値算定のための資金生成単位の将来キャッシュ・フローの見積りや、割引率等の仮定など、多くの仮定、見積りのもとに実施されており、将来の不確実な経済条件の変動等の結果によって、減損損失額に重要な修正を生じさせるリスクがあります。当連結会計年度において、減損の兆候を識別した重要な資金生成単位の見積り及び仮定は、注記16.非金融資産の減損に含めております。

- ・繰延税金資産の回収可能性(注記17．法人所得税)

法人所得税の算定に際しては、税法規定の解釈や過去の税務調査の経緯等、様々な要因について見積り及び判断が必要となります。そのため、法人所得税の計上額と、実際負担額が異なる可能性があります。また、繰延税金資産は、将来減算一時差異を利用できる課税所得が生じる可能性が高い範囲内で認識しておりますが、課税所得が生じる時期及び金額は、将来の不確実な経済条件の変動によって影響を受ける可能性があり、実際に生じた時期及び金額が見積りと異なった場合、翌連結会計年度以降において認識する金額に重要な変動を与えるリスクがあります。

- ・確定給付制度債務の測定(注記21．従業員給付)

確定給付制度債務の現在価値及び関連する勤務費用等は、数理計算上の仮定に基づいて算定されております。数理計算上の仮定には、割引率や昇給率等、様々な変数についての見積り及び判断が求められます。

当社グループは、これらの変数を含む数理計算上の仮定の適切性について、外部の年金数理人からの助言を得ております。

数理計算上の仮定は、経営者の最善の見積りと判断により決定しておりますが、将来の不確実な経済条件の変動の結果や関連法令の改正・公布によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、翌年度以降の連結財務諸表において認識する金額に重要な変動を与えるリスクがあります。

- ・金融商品の評価(注記32．金融商品)

当社グループは、特定の金融商品の公正価値を測定する際に、レベル3に分類された金融商品については、市場で観察可能ではないインプットを利用する評価技法を用いております。観察可能でないインプットは、将来の不確実な経済条件の変動の結果によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、翌連結会計年度以降において認識する金額に重要な変動を与えるリスクがあります。

- ・偶発債務(注記37．偶発債務)

偶発債務は、連結会計年度末日におけるすべての利用可能な証拠を勘案し、その発生可能性及び金額的影響を考慮した上で、将来の事業に重要な影響を及ぼしうる項目を開示しております。

5. 未適用の新たな基準書及び解釈指針

連結財務諸表の承認日までに新設又は改訂が行われた新基準書及び新解釈指針のうち、当連結会計年度において当

社グループが早期適用していない主なものは、以下のとおりです。新たな基準書及び解釈指針の適用による当社グループへの影響は検討中です。

基準書	基準名	発効日 (以後開始年度)	当社グループの 適用時期	新設・改定の概要
IFRS 第18号	財務諸表における 表示及び開示	2027年1月1日	2027年12月期	財務業績に関するより透明性と比較 可能性の高い情報を提供する財務諸 表の表示及び開示に関する規定

6. セグメント情報

(1) 報告セグメントの概要

当社グループの事業セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、当社の取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、製品・サービス別の事業部を置き、各事業部は取り扱う製品・サービスについて国内及び海外の総合的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。

各報告セグメントに属する主要な製品

報告セグメント	主要製品
タイヤ	乗用車用、トラック・バス用、小型トラック用、農業機械用、鉱山・建設車両用、産業車両用、林業機械用などの各種タイヤ、チューブ、アルミホイール、自動車関連用品
M B	コンベヤベルト、各種ホース、防舷材、オイルフェンス、マリンホース、航空部品

(2) セグメント収益及び業績に関する情報

報告されているセグメントの会計処理の方法は、「注記3. 重要性のある会計方針」における記載と同一であります。

報告セグメントの数値は事業利益ベースの数値であります。セグメント間の売上収益は市場実勢価格に基づいております。

前連結会計年度(自 2024年 1月 1日 至 2024年12月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント		その他 (注) 1	計	調整額 (注) 3	連結
	タイヤ	M B				
売上収益						
外部顧客	980,896	105,249	8,600	1,094,746	-	1,094,746
セグメント間	1,215	124	19,116	20,455	20,455	-
合計	982,112	105,373	27,716	1,115,201	20,455	1,094,746
セグメント利益 (事業利益) (注) 2	127,157	8,577	1,360	134,374	5	134,379
その他の収益及び費用						15,223
営業利益						119,157
(その他の重要な項目) (注) 4						
減価償却費及び償却費	51,869	3,227	162	55,257	792	56,050
減損損失	11,449	-	-	11,449	-	11,449
資本的支出	73,781	3,932	696	78,409	798	79,207

- (注) 1 「その他」の区分に含まれる事業は、スポーツ事業等であります。
 2 セグメント利益(事業利益)は、売上収益から売上原価、販売費及び一般管理費を控除して算出しておりません。
 3 セグメント利益の調整額は、セグメント間取引消去等によるものであります。
 4 使用権資産に関する減価償却費及び資本的支出は含めておりません。

当連結会計年度(自 2025年 1月 1日 至 2025年12月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント		その他 (注) 1	計	調整額 (注) 3	連結
	タイヤ	M B				
売上収益						
外部顧客	1,121,284	105,552	8,123	1,234,959	-	1,234,959
セグメント間	1,212	127	21,801	23,140	23,140	-
合計	1,122,496	105,678	29,923	1,258,098	23,140	1,234,959
セグメント利益 (事業利益) (注) 2	154,979	11,090	518	166,587	11	166,577
その他の収益及び費用						13,676
営業利益						152,901
(その他の重要な項目) (注) 4						
減価償却費及び償却費	59,818	3,226	233	63,277	825	64,102
減損損失	3,160	-	-	3,160	-	3,160
資本的支出	103,134	5,736	284	109,154	796	109,950

- (注) 1 「その他」の区分に含まれる事業は、スポーツ事業等であります。
 2 セグメント利益(事業利益)は、売上収益から売上原価、販売費及び一般管理費を控除して算出しておりません。
 3 セグメント利益の調整額は、セグメント間取引消去等によるものであります。
 4 使用権資産に関する減価償却費及び資本的支出は含めておりません。

(3) 製品及びサービスの区分ごとの外部顧客への売上収益

製品及びサービスの区分が報告セグメント区分と同一であるため、記載を省略しております。

(4) 地域別に関する情報

外部顧客への売上収益

地域別の外部顧客への売上収益は、「注記7. 収益」に記載しております。

非流動資産

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
日本	170,464	244,258
米国	80,996	89,759
インド	232,952	233,603
中国	44,390	71,968
フィリピン	31,199	34,788
欧州	267,212	334,968
その他	74,842	100,905
合計	902,055	1,110,250

(注) 非流動資産は当社グループ各社の所在地を基礎としております。また、その他の金融資産、退職給付に係る資産及び繰延税金資産は含んでおりません。

(5) 主要な顧客に関する情報

外部顧客への売上収益のうち、連結損益計算書の売上収益の10%以上を占める取引はありません。

7. 収益

(1) 分解した収益とセグメント収益の関連

前連結会計年度(自2024年1月1日 至2024年12月31日)

(単位:百万円)

	タイヤ	M B	その他	合計
地域別				
日本	234,026	54,969	6,665	295,660
北米	296,936	24,376	303	321,615
アジア	141,856	14,309	1,632	157,798
欧州	230,632	2,670	-	233,302
その他	77,446	8,925	-	86,372
合計	980,896	105,249	8,600	1,094,746

(注) 売上収益は顧客の所在地を基礎とし、セグメント間の内部取引控除後の金額を表示しております。

なお、北米は主に米国(302,123百万円)であります。

当連結会計年度(自2025年1月1日 至2025年12月31日)

(単位:百万円)

	タイヤ	M B	その他	合計
地域別				
日本	257,867	54,559	6,240	318,665
北米	330,493	22,798	394	353,685
アジア	160,094	14,853	1,489	176,435
欧州	270,492	3,683	-	274,175
その他	102,340	9,659	-	111,999
合計	1,121,284	105,552	8,123	1,234,959

(注) 売上収益は顧客の所在地を基礎とし、セグメント間の内部取引控除後の金額を表示しております。

なお、北米は主に米国(324,419百万円)であります。

当社グループは、タイヤ、M B及びその他の事業を有する製造業であり、タイヤ事業を中心に複数のビジネスを行っております。これらのビジネスでは、当社グループ自体が顧客との契約主体となります。

タイヤ、M Bいずれの事業においても、主要な顧客である自動車メーカー、小売業者、その他の事業者に対して計上される収益の履行義務は、当社グループの製品が顧客へ納品された時点で充足されるものであり、この時点で収益を計上しております。これは当社グループの製品が納品された時点で、顧客は自己の意思で製品を使用、売却することができるようになり、そこから生じる便益を得ることができることから、製品の支配が移転したと考えられるためです。

顧客への納品後、主として1年以内に支払いを受けているため、約束した対価の金額に重要な金融要素は含まれておりません。

当社グループは、タイヤ、M Bいずれの事業においても、各顧客との取引開始時点で製品の取引価格を決定しております。取引には数ヵ月から1年までの一定期間の取引数量等に応じた割戻しや販売手数料を支給するものがあり、これらの変動対価の金額は契約条件等に基づき見積もり取引価格を調整しており、この調整に係る返金負債は「その他の金融負債」に含まれております。顧客に支払う変動対価の金額は合理的に見積り可能であることから、認識した収益の累計額の重大な戻入れが生じることはなく、変動対価の見積りが制限されることはない判断しております。

タイヤ、M Bいずれの事業においても、製品保証は、販売時に存在していた欠陥を修理する以上のサービスを提供する等のサービス型の製品保証は提供していないため、製品保証を独立した履行義務として区別せず、取引価格の一部を製品保証に配分しておりません。

タイヤ事業において、主として日本で販売する冬季用タイヤ製品は、冬から春にかけて返品を受けるなど収益の戻入れが生じるため、将来、返品が見込まれる部分を見積もって収益を減額し、返品される製品を回収する権利について返品資産を認識し「その他の流動資産」に計上しております。

(2) 契約残高

当社グループの契約残高は、顧客との契約から生じた債権(受取手形及び売掛金)及び契約負債(前受金)があります。顧客との契約から生じた債権の残高は「注記9. 営業債権及びその他の債権」に記載しております。「その他の流動負債」に計上している契約負債の残高は以下のとおりであります。

なお、前連結会計年度及び当連結会計年度において、過去の期間に充足した履行義務から認識した収益の額に重要性はありません。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
契約負債	1,951	3,015

(3) 残存履行義務に配分する取引価格

当社グループにおいては、個別の契約期間が1年を超える重要な取引はありません。当社グループはIFRS第15号第121項の実務上の便法を適用し、当初の予想残存期間が1年以内の残存履行義務に関する情報は開示しておりません。

また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(4) 顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産

当社グループにおいては、資産として認識しなければならない、契約を獲得するための増分コスト及び履行に係るコストはありません。

8. 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物の内訳は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
現金及び預金	111,100	88,956
預入期間が3ヶ月以内の定期預金	25,114	18,435
合計	136,215	107,391

9. 営業債権及びその他の債権

営業債権及びその他の債権の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
受取手形及び売掛金	260,266	311,720
その他	23,930	25,674
貸倒引当金	3,176	3,406
合計	281,020	333,987

連結財政状態計算書では、貸倒引当金控除後の金額で表示しております。

営業債権及びその他の債権は、償却原価で測定する金融資産に分類しております。

信用リスク管理、営業債権及びその他の債権の公正価値は、注記「32. 金融商品」に記載しております。

10. 棚卸資産

棚卸資産の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
商品及び製品	193,366	225,267
仕掛品	14,339	15,079
原材料及び貯蔵品	72,928	78,709
合計	280,633	319,055

棚卸資産の評価減の金額は、前連結会計年度及び当連結会計年度においてそれぞれ2,414百万円及び3,369百万円
 あります。

11. その他の金融資産

その他の金融資産の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
償却原価で測定する金融資産		
貸付金	402	445
その他	8,020	8,393
貸倒引当金	169	172
純損益を通じて公正価値で測定する非デリバティブ金融資産		
その他	174	175
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する非デリバティブ金融資産		
株式	40,486	39,078
その他	605	605
デリバティブ資産	8,896	4,125
合計	58,413	52,649
流動資産	9,059	8,576
非流動資産	49,354	44,072
合計	58,413	52,649

連結財政状態計算書では、貸倒引当金控除後の金額で表示しております。

デリバティブ資産はヘッジ会計を適用しているものを除き、純損益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類しています。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融資産の主な銘柄及び公正価値等は以下のとおりであります。

前連結会計年度 (2024年12月31日)

(単位：百万円)

銘柄	金額
本田技研工業(株)	4,605
日本ゼオン(株)	3,207
(株)イエローハット	2,968
(株)みずほフィナンシャルグループ	2,923
(株)ADEKA	1,255

当連結会計年度 (2025年12月31日)

(単位：百万円)

銘柄	金額
(株)みずほフィナンシャルグループ	4,302
(株)イエローハット	3,596
(株)ADEKA	1,718
古河機械金属(株)	1,598
三谷商事(株)	1,425

株式は主に政策投資目的で保有しているため、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融資産に指定しております。

保有資産の効率化及び有効活用を図るため、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融資産の売却(認識の中止)を行っております。

各年度における売却時の公正価値及び資本でその他の包括利益として認識されていた累積損益は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
公正価値	73,623	8,351
資本でその他の資本の構成要素として認識されていた累積損益(注)	42,395	3,228

(注) 資本でその他の資本の構成要素として認識されていた累積損益は、売却した場合に利益剰余金に振り替えております。

(注) 資本でその他の資本の構成要素として認識されていた累積損益は、税引後の数字で算出されております。

資本性金融商品から認識される受取配当金の内訳は以下のとおりです。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
期中に認識を中止した投資	1,086	195
期末日現在で保有する投資	1,175	873
合計	2,261	1,068

12. 売却目的で保有する資産

売却目的で保有する資産及び直接関連する負債の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
売却目的で保有する資産		
有形固定資産	19,342	17,340
合計	19,342	17,340

前連結会計年度および当連結会計年度における売却目的で保有する資産は、タイヤ事業セグメントに含まれる当社の連結子会社であるAlliance Tire Company Limited(イスラエル)のハデラ工場を閉鎖することに係るものであります。当該資産は、前連結会計年度において資産の譲渡の可能性が非常に高くなったことに伴い売却目的で保有する資産に分類しておりますが、当連結会計年度末時点においても依然として売却目的保有として分類すべき要件を満たしており、売却が完了していないため、当連結会計年度末においても売却目的で保有する資産に分類しております。

また当該資産は、売却費用控除後の公正価値まで減額し、減損損失は前連結会計年度及び当連結会計年度においてそれぞれ1,501百万円及び1,194百万円を認識しており、連結損益計算書の「その他の費用」に含めております。(「26. その他の費用」参照)

なお、売却費用控除後の公正価値は、観察不能なインプットを含む評価技法(マーケット・アプローチ)を用いた第三者による鑑定評価額に基づいており、公正価値ヒエラルキーはレベル3に分類しております。

13.有形固定資産

増減表

有形固定資産の取得原価、減価償却累計額及び減損損失累計額の増減、並びに帳簿価額は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

取得原価	建物及び構築物	機械装置及び運搬具	工具、器具及び備品	土地	建設仮勘定	使用権資産	合計
2024年1月1日残高	275,464	639,241	112,645	65,199	39,766	76,630	1,208,944
個別取得	438	3,423	2,991	9,147	62,383	7,045	85,426
売却又は処分	2,127	8,290	4,618	886	652	2,730	19,303
在外営業活動体の為 替換算差額	13,774	36,960	5,791	2,998	3,927	3,409	66,859
建設仮勘定からの振替	6,756	31,551	7,723	-	46,030	-	-
売却目的保有への振替	15,372	20,298	4,961	7,349	337	107	48,424
その他	569	613	105	51	1,409	5,234	5,306
2024年12月31日残高	279,502	683,200	119,675	69,160	57,648	79,012	1,288,197
個別取得	2,100	3,725	5,168	291	98,013	14,778	124,074
事業譲受による取得	6,035	28,550	4,236	2,256	1,324	263	42,665
売却又は処分	1,758	27,802	3,753	335	542	1,322	35,512
在外営業活動体の為 替換算差額	6,000	10,301	2,045	1,798	5,207	492	25,844
建設仮勘定からの振替	9,911	40,047	8,606	511	59,074	-	-
その他	3,140	7,152	3,250	8,032	2,249	3,592	7,451
2025年12月31日残高	304,930	730,868	139,227	65,650	100,327	96,815	1,437,816

(単位：百万円)

減価償却累計額及び減損損失累計額	建物及び構築物	機械装置及び運搬具	工具、器具及び備品	土地	建設仮勘定	使用権資産	合計
2024年1月1日残高	140,690	455,208	88,894	635	1	30,721	716,148
減価償却費	8,968	29,924	9,349	-	-	10,107	58,347
減損損失	7,323	3,360	425	295	29	-	11,432
売却又は処分	1,886	7,085	4,469	11	-	2,636	16,087
在外営業活動体の為 替換算差額	5,906	23,033	4,081	78	0	1,407	34,506
売却目的保有への振替	6,178	18,293	4,538	-	-	73	29,082
その他	202	1,337	87	20	1	6,231	4,584
2024年12月31日残高	155,024	487,483	93,830	1,018	32	33,294	770,681
減価償却費	8,198	32,559	10,578	-	-	9,520	60,856
減損損失	122	1,517	14	178	-	-	1,446
売却又は処分	1,469	26,603	3,478	5	5	1,374	32,933
在外営業活動体の為 替換算差額	2,953	6,145	1,300	260	4	183	10,324
その他	164	5,161	3,495	332	0	4,991	6,824
2025年12月31日残高	164,993	495,941	105,711	242	32	36,632	803,550

(単位：百万円)

帳簿価額	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具、器具 及び備品	土地	建設仮勘定	使用権資産 (注)	合計
2024年1月1日残高	134,774	184,033	23,751	64,564	39,765	45,910	492,796
2024年12月31日残高	124,477	195,716	25,846	68,142	57,616	45,718	517,516
2025年12月31日残高	139,937	234,928	33,516	65,408	100,295	60,183	634,266

使用権資産の帳簿価額は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

使用権資産	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具、器具 及び備品	土地	合計
2024年1月1日残高	35,087	3,979	898	5,946	45,910
2024年12月31日残高	33,714	5,369	638	5,997	45,718
2025年12月31日残高	34,200	10,240	383	15,361	60,183

有形固定資産の減価償却費は、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に含まれており
 ます。

14. のれん及び無形資産

(1) 増減表

のれん及び無形資産の取得原価、償却累計額及び減損損失累計額の増減、並びに帳簿価額は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

取得原価	のれん	顧客関連	技術資産	商標権	ソフトウェア	その他	合計
2024年1月1日残高	275,830	42,901	9,553	44,480	5,702	4,664	383,130
個別取得	-	28	1	-	753	43	826
売却又は処分	-	-	0	-	2,902	31	2,933
在外営業活動体の 為替換算差額	20,984	4,454	689	2,838	418	26	29,409
その他	-	171	-	2,761	834	67	2,164
2024年12月31日残高	296,814	47,212	10,243	44,558	4,806	4,635	408,267
個別取得	-	12	2	2	607	36	658
事業譲受による取得	15,933	24,863	17,440	12,867	-	5,673	76,774
売却又は処分	-	-	0	0	127	13	140
在外営業活動体の 為替換算差額	20,152	2,515	740	1,410	69	135	24,751
その他	0	1,175	-	186	248	493	247
2025年12月31日残高	332,899	73,426	28,424	59,023	5,602	10,689	510,063

(単位：百万円)

償却累計額及び 減損損失累計額	のれん	顧客関連	技術資産	商標権	ソフトウェア	その他	合計
2024年1月1日残高	-	21,355	2,868	2,813	2,888	4,363	34,287
償却費	-	3,725	1,007	1,049	1,353	675	7,809
減損損失	-	-	-	-	17	-	17
売却又は処分	-	-	-	-	2,894	0	2,894
在外営業活動体の 為替換算差額	-	2,528	322	93	292	11	3,223
その他	-	171	-	2,616	18	639	3,444
2024年12月31日残高	-	27,437	4,197	1,340	1,636	4,388	38,998
償却費	-	5,558	1,823	2,543	1,114	1,730	12,766
減損損失	-	-	-	-	100	-	100
売却又は処分	-	-	0	-	125	13	138
在外営業活動体の 為替換算差額	-	228	175	3	100	60	366
その他	-	1	-	35	651	682	1,367
2025年12月31日残高	-	33,224	6,194	3,852	1,974	5,483	50,726

(単位：百万円)

帳簿価額	のれん	顧客関連	技術資産	商標権	ソフトウェア	その他	合計
2024年1月1日残高	275,830	21,546	6,685	41,667	2,814	301	348,843
2024年12月31日残高	296,814	19,775	6,046	43,218	3,169	247	369,269
2025年12月31日残高	332,899	40,203	22,230	55,171	3,628	5,206	459,337

無形資産の償却費は、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に含まれております。

(2)耐用年数を確定できない無形資産

前連結会計年度末において耐用年数を確定できない無形資産の帳簿価額は、33,827百万円であります。これは、資金生成単位であるY-ATG及びY-TWSの企業結合時に取得した商標権であります。

当連結会計年度末において耐用年数を確定できない無形資産の帳簿価額は、35,284百万円であります。これは、主に資金生成単位であるY-ATG及びY-TWSの企業結合時に取得した商標権であります。事業が継続する限り基本的に存続するため、当連結会計年度においては耐用年数を確定できないものと判断しております。

(3)重要なのれん及び無形資産

前連結会計年度末におけるのれんは、主に資金生成単位であるY-ATGとY-TWSにおけるのれんであり、帳簿価額は295,910百万円であります。のれん以外の無形資産のうち、重要なものは、主にY-ATGならびにY-TWSの顧客との関係と、Y-TWSの技術資産であり、帳簿価額はそれぞれ19,749百万円および5,497百万円であります。

当連結会計年度末におけるのれんは、主に資金生成単位であるY-ATGとY-TWSならびにG-OTRにおけるのれんであり、帳簿価額は331,745百万円であります。のれん以外の無形資産のうち、重要なものは、主にY-ATGとY-TWSならびにG-OTRの顧客との関係と、Y-TWSならびにG-OTRの技術資産であり、帳簿価額はそれぞれ40,174百万円および22,047百万円であります。

なお、当連結会計年度末における残存償却期間は、Y-ATGの顧客との関係が4年、Y-TWSの顧客との関係が9年、G-OTRの顧客との関係が11年、G-OTRの技術資産が20年、Y-TWSの技術資産が8年であります。

(4)研究開発費

前連結会計年度及び当連結会計年度において認識した研究開発費は、それぞれ19,800百万円、21,382百万円であり、連結損益計算書の「売上原価」及び「販売費及び一般管理費」に含まれております。

15. リース取引

(借手のリース取引)

当社グループは、借手として、建物及び構築物、機械装置及び運搬具、工具、器具及び備品、及び土地等を賃借しており、リース負債は連結財政状態計算書上、「その他の金融負債」に含めて表示しております。

(1) 借手のリース費用に関する開示

各年度の借手のリースに関連する費用の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
使用権資産の減価償却費		
建物及び構築物を原資産とするもの	7,255	6,407
機械装置及び運搬具を原資産とするもの	2,037	2,473
工具、器具及び備品を原資産とするもの	404	158
土地を原資産とするもの	408	482
その他を原資産とするもの	2	1
小計	10,107	9,520
リース負債に係る金利費用	1,112	1,146
短期リースに係る費用	1,758	2,082
少額資産のリースに係る費用(短期リースを除く)	31	29
変動リース料	530	676
使用権資産のサブリースによる収益	465	412

(2) 変動リース料

リース契約には変動リース料が含まれており、それは主にタイヤ保管倉庫において保管タイヤ本数等に基づいて変動するリース料等です。

(3) 延長オプション及び解約オプション

延長オプション及び解約オプションは主に店舗・オフィス・倉庫に係る不動産リース等に含まれており、不動産を事業に活用する目的においてこれらオプションの行使の必要性を適宜検討しております。

(4) 残価保証

残価保証を提供している重要なリース契約はありません。

(5) 借手が契約しているがまだ開始していないリース契約

すでにリース契約を締結しているもののリースが開始されていない重要な契約はありません。

(6) リースにより課されている制限又は特約

リース契約によって課された重要な制限(追加借入及び追加リースに関する制限等)はありません。

(7) セール・アンド・リースバック取引

前連結会計年度において、セール・アンド・リースバック取引はありません。

当連結会計年度において、セール・アンド・リースバック取引はありません。

(8) 短期リース・少額リース

リース期間が12ヵ月以内の短期リース及び原資産が少額であるリースについては、当該リースに関連したリース料を、リース期間にわたり定額法又は他の規則的な基礎のいずれかにより費用として認識しております。

16. 非金融資産の減損

(1) 減損損失

前連結会計年度(自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)

非金融資産は、概ね独立したキャッシュ・インフローを生み出す最小の資金生成単位でグルーピングを行っており、前連結会計年度において以下の資産について減損損失を計上しております。

(単位: 百万円)

用途	セグメント	種類	金額
事業用資産	タイヤ事業	建物及び構築物	7,323
		機械装置及び運搬具	3,360
		工具、器具及び備品	425
		土地	295
		建設仮勘定	29
		ソフトウェア	17
合計			11,449

現在の市場環境とタイヤ業界の生産拠点の構造変化を勘案し、OHT事業の持続的な収益性と長期に渡る将来性を確保するため、Alliance Tire Company Limited(イスラエル)のハデラ工場及びYokohama TWS Czech Republic a.s.(チェコ共和国)のプラハ工場を閉鎖し、その生産能力を他拠点に統合することを決定しました。

その結果、回収可能性が認められなくなった固定資産について、その帳簿価額を回収可能額まで減額し、当該減少額を減損損失として連結損益計算書の「その他の費用」に11,436百万円計上しており、前連結会計年度における減損損失の計上額11,449百万円の主たる要因となっております。当該資産の回収可能額は、売却費用控除後の公正価値に基づき算定しております。売却費用控除後の公正価値は、観察不能なインプットを含む評価技法(マーケット・アプローチ)を用いた第三者による鑑定評価額に基づいており、公正価値ヒエラルキーはレベル3に分類しております。

当連結会計年度(自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)

非金融資産は、概ね独立したキャッシュ・インフローを生み出す最小の資金生成単位でグルーピングを行っており、当連結会計年度において以下の資産について減損損失を計上しております。

(単位: 百万円)

用途	セグメント	種類	金額
事業用資産	タイヤ事業	建物及び構築物	640
		機械装置及び運搬具	2,418
		その他	102
合計			3,160

現在の市場環境とタイヤ業界の生産拠点の構造変化を勘案し、OHT事業の持続的な収益性と長期に渡る将来性を確保するため、Alliance Tire Company Limited(イスラエル)のハデラ工場及びYokohama TWS Czech Republic a.s.(チェコ共和国)のプラハ工場の閉鎖に加えて、Yokohama TWS North America Inc.(米国)のスパルタンブルグ工場を閉鎖し、その生産能力を他拠点に統合することを決定しました。

その結果、回収可能性が認められなくなった固定資産について、その帳簿価額を回収可能額まで減額し、当該減少額を減損損失として連結損益計算書の「その他の費用」に3,011百万円計上しており、当連結会計年度における減損損失の計上額3,160百万円の主たる要因となっております。当該資産の回収可能額は、売却費用控除後の公正価値に基づき算定しております。売却費用控除後の公正価値は、観察不能なインプットを含む評価技法(マーケット・アプローチ)を用いた第三者による鑑定評価額に基づいており、公正価値ヒエラルキーはレベル3に分類しております。

(2) のれん及び耐用年数の確定できない無形資産の減損テスト

当社グループは、のれん及び耐用年数が確定できない無形資産について最低年1回の減損テストを行っており、更に減損の兆候がある場合には、その都度、減損テストを行っております。

資金の生成単位

資金生成単位ののれん及び耐用年数が確定できない無形資産の残高のうち、主なものは以下のとおりであります。

(単位：百万円)

資金生成単位	報告セグメント	前連結会計年度 (2024年12月31日)		当連結会計年度 (2025年12月31日)	
		のれん	商標権	のれん	商標権
Y-ATG	タイヤ	123,343	20,139	122,080	19,933
Y-TWS	タイヤ	172,567	13,688	192,862	15,299
G-OTR	タイヤ			16,803	

回収可能額の算定基礎

() 資金生成単位：Y-ATG

のれん及び耐用年数が確定できない無形資産の減損テストにおける回収可能価額は、使用価値に基づき算定しております。

使用価値の算定には、経営者により承認された5年間を限度とする事業計画に基づいた税引前キャッシュ・フロー予測等を使用しており、事業計画が対象としている期間を超える期間については、継続価値を算定しております。当該計画は、業界の将来の見通しに関する経営者の評価と過去の実績を反映したものであり、継続価値の算定には、外部公表の成長率を使用しております。税引前割引率は、貨幣の時間価値及び、当該資金生成単位の類似企業を考慮した固有のリスクに関する現在の市場評価等を反映しています。

使用価値の算定に当たって基礎とした主要な仮定は以下のとおりであります。

- ・キャッシュ・フロー予測を延長するために用いた資金生成単位が属する市場の長期平均成長率
2025年12月期：2.5%～5.5%、2024年12月期：2.4%～5.4%
- ・キャッシュ・フロー予測に適用した税引前割引率
2025年12月期：7.8%、2024年12月期：8.1%

当該のれん及び耐用年数が確定できない無形資産については、当該資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額を十分に上回っていることから、主要な仮定に合理的な範囲で変動があったとしても、それにより当該資金生成単位において重要な減損が発生する可能性は低いと判断しております。

() 資金生成単位：Y-TWS

のれん及び耐用年数が確定できない無形資産の減損テストにおける回収可能価額は、使用価値に基づき算定しております。

使用価値の算定には、経営者により承認された5年間を限度とする事業計画に基づいた税引前キャッシュ・フロー予測等を使用しており、事業計画が対象としている期間を超える期間については、継続価値を算定しております。当該計画は、業界の将来の見通しに関する経営者の評価と過去の実績を反映したものであり、継続価値の算定には、外部公表の成長率を使用しております。税引前割引率は、貨幣の時間価値及び、当該資金生成単位の類似企業を考慮した固有のリスクに関する現在の市場評価等を反映しています。

使用価値の算定に当たって基礎とした主要な仮定は以下のとおりであります。

- ・キャッシュ・フロー予測を延長するために用いた資金生成単位が属する市場の長期平均成長率
2025年12月期：2.3%～5.5%、2024年12月期：2.2%～5.4%
- ・キャッシュ・フロー予測に適用した税引前割引率
2025年12月期：6.6%、2024年12月期：6.3%

当該のれん及び耐用年数が確定できない無形資産については、当該資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額を十分に上回っていることから、主要な仮定に合理的な範囲で変動があったとしても、それにより当該資金生成単位において重要な減損が発生する可能性は低いと判断しております。

() 資金生成単位：G-OTR

のれんの減損テストにおける回収可能価額は、使用価値に基づき算定しております。

使用価値の算定には、経営者により承認された5年間を限度とする事業計画に基づいた税引前キャッシュ・フロー予測等を使用しており、事業計画が対象としている期間を超える期間については、継続価値を算定しております。当該計画は、業界の将来の見通しに関する経営者の評価と過去の実績を反映したものであり、継続価値の算定には、外部公表の成長率を使用しております。税引前割引率は、貨幣の時間価値及び、当該資金生成単位の類似企業を考慮した固有のリスクに関する現在の市場評価等を反映しています。

使用価値の算定に当たって基礎とした主要な仮定は以下のとおりであります。

- ・キャッシュ・フロー予測を延長するために用いた資金生成単位が属する市場の長期平均成長率
2025年12月期：3.2%～6.1%
- ・キャッシュ・フロー予測に適用した税引前割引率
2025年12月期：9.8%

当該のれんについては、当該資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額を十分に上回っていることから、主要な仮定に合理的な範囲で変動があったとしても、それにより当該資金生成単位において重要な減損が発生する可能性は低いと判断しております。

17. 法人所得税

(1) 法人所得税費用

純損益を通じて認識された法人所得税費用の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
当期税金費用	35,063	61,362
繰延税金費用	4,165	10,961
合計	39,228	50,401

繰延税金費用には、繰延税金資産の評価減又は以前に計上した評価減の戻入により生じた費用の額が含まれてい
 ます。

(2) 実効税率の調整

法定実効税率と実際負担税率との差異について、原因となった主な項目の内訳は、以下のとおりであります。

前連結会計年度及び当連結会計年度において、当社及び国内子会社は、主に法人税、住民税及び事業税を課され
 ており、これらを基礎として計算する法定実効税率は、それぞれ30.3%となっております。

ただし、海外子会社についてはその所在地における法人税等が課されております。

(単位：%)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
法定実効税率	30.3	30.3
(調整)		
海外連結子会社の法定実効税率との差異	1.7	1.9
税務上永久に損金に算入されない費用	0.5	0.2
税務上永久に益金に算入されない収益	0.3	0.1
試験研究費等の税額控除	1.7	1.3
繰延税金資産の回収可能性の評価による影響	0.1	0.1
子会社等に対する投資に係る将来加算一時差異	1.3	3.4
外国源泉税等	2.9	1.2
外国法人税等	2.2	0.9
その他永久差異	3.4	-
その他	1.6	0.7
法人税等の平均実際負担税率	34.0	32.1

(3)繰延税金資産及び繰延税金負債

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	4,804	11,330
未実現利益	5,689	7,665
未払費用	4,072	2,892
有給休暇債務	1,782	1,997
棚卸資産評価損	3,060	3,212
減損損失	2,675	6,752
資産調整勘定	-	3,532
その他	11,295	8,160
繰延税金資産合計	33,377	45,540
繰延税金負債		
企業結合により識別された無形資産	24,241	18,907
退職給付信託設定益	4,993	-
退職給付信託設定株式受入差益	504	0
固定資産圧縮積立金	5,958	5,732
海外子会社剰余金	15,586	20,870
固定資産	10,963	16,079
有価証券評価差額金	4,917	5,467
その他	2,296	363
繰延税金負債合計	69,458	67,417
繰延税金資産の純額	36,081	21,878

繰延税金資産又は繰延税金負債の純額は、連結財政状態計算書の以下の項目に含めております。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
繰延税金資産	8,276	7,488
繰延税金負債	44,357	29,365

繰延税金資産又は繰延税金負債の純額の変動の内容は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
期首残高	49,715	36,081
純損益を通じて認識した税金費用又は収益(注)	4,165	10,961
その他の包括利益において認識した額		
キャッシュ・フロー・ヘッジ	180	417
その他の包括利益を通じて測定する金融資産の 公正価値の純変動	12,635	548
確定給付制度の再測定	2,986	930
計	9,469	1,061
企業結合に伴う繰延税金資産(負債)の増減	-	4,304
期末残高	36,081	21,878

(注) 外貨換算差額は、純損益を通じて認識した税金費用又は収益の額に含めて表示しております。

当社グループは、将来加算一時差異、将来課税所得計算及びタックスプランニングを考慮して繰延税金資産を認識しております。

その上で繰延税金資産を認識していない将来減算一時差異、税務上の繰越欠損金及び繰越税額控除は、以下のとおりであります。

なお、将来減算一時差異、繰越欠損金及び繰越税額控除の金額は、実効税率を乗じた税額ベースとしております。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
将来減算一時差異	6,517	15,294
繰越欠損金及び繰越税額控除	1,556	2,348

繰延税金資産を認識していない、税務上の繰越欠損金及び繰越税額控除の失効期限別内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
1年目	188	2
2年目	-	101
3年目	206	190
4年目	215	280
5年目以降	343	327
無制限	603	1,447
合計	1,556	2,348

前連結会計年度及び当連結会計年度において繰延税金負債を認識していない子会社等に対する投資に係る将来加算一時差異の合計額は、それぞれ35,875百万円及び72,232百万円であります。

これらは当社グループが一時差異を解消する時期をコントロールでき、かつ予測可能な期間内に当該一時差異が解消しない可能性が高いことから、繰延税金負債を認識しておりません。

前連結会計年度及び当連結会計年度において、当社グループによる株主に対する配当の支払いを原因とする法人所得税上の影響はありません。

「所得税法等の一部を改正する法令」(令和7年法律第13号)が2025年3月31日に国会で成立し、2026年4月1日以後開始する連結事業年度より「防衛特別法人税」の課税が行われることとなりました。これに伴い、2027年1月1日に開始する連結事業年度以降に解消が見込まれる一時差異等に係る繰延税金資産及び繰延税金負債については、法定実効税率を30.3%から31.2%に変更し計算しております。この税率変更により、当連結事業年度の連結財務諸表に与える影響は軽微であります。

当社は第2の柱モデルルールに則したグローバル・ミニマム課税を制定または実質的に制定された法域において事業を展開しております。

当社は、制度対象となる構成事業体各社の直近の財務諸表等に基づきグローバル・ミニマム課税制度適用に伴う影響評価を実施しています。その結果、当社グループの当連結会計年度に係る連結財務諸表における法人所得税費用への重要な影響はありません。

18. 営業債務及びその他の債務

営業債務及びその他の債務の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
支払手形及び買掛金	87,064	89,771
その他	21,453	22,934
合計	108,517	112,706

営業債務及びその他の債務は、償却原価で測定する金融負債に分類しております。

19. 社債及び借入金

(1) 社債及び借入金の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)	平均利率%	返済期限
短期借入金	49,405	64,344	3.27	
1年内返済予定の長期借入金	52,070	70,886	0.99	
社債(注)	39,870	39,893		
長期借入金	296,676	360,647	1.31	2027年～2035年
合計	438,021	535,770		
流動負債	101,476	135,230		
非流動負債	336,546	400,540		
合計	438,021	535,770		

社債及び借入金は償却原価で測定する金融負債に分類しております。

平均利率は、当連結会計年度末の残高と利率を用いて算出しております。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末の借入金には、当社が2016年6月30日付で取引銀行と締結したシンジケートローン契約（契約総額720百万USドル及び54,240百万円）によるものが含まれております。

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2016年12月期決算以降、各年度の決算期の末日における連結財政状態計算書上の資本合計の金額を前年同期比一定の水準以上に維持すること。
- ・2016年12月期決算以降、当社の連結損益計算書の営業損益が2期連続して損失とならないようにすること。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末の借入金には、当社が2023年6月28日付で取引銀行と締結したシンジケートローン契約（契約総額214,700百万円）および2023年6月30日付で(株)国際協力銀行と締結したローン契約（契約総額100,000百万円）によるものが含まれております。

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2023年12月期決算以降、各年度の決算期の末日における連結財政状態計算書上の資本合計の金額を前年同期比一定の水準以上に維持すること。
- ・2023年12月期決算以降、当社の連結損益計算書の営業損益が2期連続して損失とならないようにすること。

当連結会計年度末の借入金には、当社が2025年6月17日付で取引銀行によるシンジケートローン契約（契約総額109,275百万円）および2025年6月30日付で(株)国際協力銀行とのローン契約（契約総額31,000百万円）によるものが含まれております。

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2025年12月期決算以降、各年度の決算期の末日における連結財政状態計算書上の資本合計の金額を前年同期比一定の水準以上に維持すること。
- ・2025年12月期決算以降、当社の連結損益計算書の営業損益が2期連続して損失とならないようにすること。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末の借入金には、当社の子会社であるATC Tires AP Private Ltd.が2020年10月21日付で取引銀行と締結したシンジケートローン契約（契約総額52百万USドル）によるものが含まれております。

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2025年3月末以降、ATC Tires AP Pvt. Ltd.の貸借対照表において債務超過とならないようにすること。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末の借入金には、当社の子会社であるATC Tires AP Private Ltd.が2021年8月16日付で取引銀行と締結した借入契約（契約総額96百万USドル）によるものが含まれております。

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2025年3月末以降、ATC Tires AP Pvt. Ltd.の貸借対照表において債務超過とならないようにすること。

前連結会計年度末及び当連結会計年度末の借入金には、当社の子会社であるATC Tires AP Private Ltd.が、2024

年6月7日付で取引銀行と締結した借入契約（契約総額49百万USドル）によるものが含まれております。

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2025年3月末以降、ATC Tires AP Pvt. Ltd.の貸借対照表において債務超過とならないようにすること。

(注) 社債の発行条件の要約は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

会社名	銘柄	発行年月日	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)	利率%	担保	償還期限
当社	第14回無担保社債	2020年7月27日	9,970	9,975	0.360 %	無担保社債	2030年7月26日
当社	第15回無担保社債	2022年6月6日	16,950	16,961	0.490 %	無担保社債	2029年6月6日
当社	第16回無担保社債	2022年6月6日	12,950	12,956	0.580 %	無担保社債	2032年6月4日
合計			39,870	39,893			

(2)担保差入資産及び対応する負債は、以下のとおりであります。

担保差入資産

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
現金及び現金同等物	7,593	108
営業債権及びその他債権	2,655	-
棚卸資産	1,174	-
その他流動資産	202	-
売却目的で保有する非流動資産	5,889	-
有形固定資産	427	419
合計	17,940	528

(注) 主として、コミットメントライン契約に基づく借入金を担保するものであります。

担保差入資産に対応する負債

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
短期借入金	50	50
合計	50	50

20. その他の金融負債

その他の金融負債の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
償却原価で測定する金融負債		
その他	26,051	23,182
リース負債	48,605	53,015
デリバティブ負債	483	1,666
合計	75,140	77,863
流動負債	32,477	33,577
非流動負債	42,663	44,286
合計	75,140	77,863

デリバティブ負債は純損益を通じて公正価値で測定する金融負債（ヘッジ会計が適用されているものを除く）に分類しております。

21. 従業員給付

(1) 確定給付制度の概要

当社、国内連結子会社及び一部の海外連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、確定給付型の退職給付制度を採用しております。

また、上記制度に加え、当社及び一部の連結子会社は、確定拠出年金制度を設けております。

当社グループでは、確定給付型の退職給付制度として主に退職一時金制度を採用しております。退職一時金制度は、原資について外部積立を行わず、従業員が定年や自己都合で退職する際に、一時金として支払う制度であります。退職一時金は、就業規則による退職金規程で定められた内容に基づき支給されます。また、退職一時金の支払いに備えることを目的として、退職給付信託を設定しておりますが、当社において退職給付信託が退職給付債務に対して大幅な積立超過の状況にあり、今後もその状況が継続することが見込まれることから、当連結会計年度において退職給付信託の一部返還を受けております。

なお、米国の一部連結子会社は、退職後医療給付制度を採用しております。退職後医療給付制度は、退職後給付と類似の性格を有することから、退職給付に係る負債に含めて表示しております。

(2) 確定給付制度

退職給付に係る負債又は資産の内訳

確定給付制度債務及び制度資産と連結財政状態計算書に計上された退職給付に係る負債及び資産との関係は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
確定給付制度債務	73,231	71,923
制度資産	82,149	65,572
連結財政状態計算書に計上された退職給付に係る負債(資産)の純額	8,918	6,351
連結財政状態計算書上の金額		
退職給付に係る負債	17,227	16,734
退職給付に係る資産	26,145	10,382

退職給付に係る資産は、連結財政状態計算書の「その他の非流動資産」に含まれております。

確定給付制度債務

確定給付制度債務の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	確定給付制度	退職後医療給付
2024年1月1日現在	64,241	7,539
当期勤務費用	2,957	106
利息費用	1,909	362
再測定による増減		
数理計算上の差異 - 人口統計上の仮定の変更	15	148
数理計算上の差異 - 財務上の仮定の変更	2,577	382
数理計算上の差異 - その他	96	165
給付の支払額	3,895	585
過去勤務費用(利得)	22	-
在外営業活動体の換算差額等	2,900	834
2024年12月31日現在	65,668	7,563
当期勤務費用	2,760	97
利息費用	1,994	362
再測定による増減		
数理計算上の差異 - 人口統計上の仮定の変更	11	148
数理計算上の差異 - 財務上の仮定の変更	2,563	168
数理計算上の差異 - その他	440	23
給付の支払額	5,431	595
過去勤務費用(利得)	164	-
企業結合による増加	1,299	-
在外営業活動体の換算差額等	70	70
2025年12月31日現在	64,273	7,650

確定給付制度債務の加重平均デュレーションは、以下のとおりであります。

(単位：年)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
加重平均デュレーション	10.2	9.7

制度資産

制度資産の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	確定給付制度	退職後医療給付
2024年1月1日現在	70,175	-
利息収益	1,910	-
再測定による増減		
制度資産に係る収益(利息収益を除く)	7,702	-
事業主からの拠出額	1,044	-
給付の支払額	1,579	-
在外営業活動体の換算差額等	2,898	-
2024年12月31日現在	82,149	-
利息収益	2,320	-
再測定による増減		
制度資産に係る収益(利息収益を除く)	1,214	-
事業主からの拠出額	1,876	-
給付の支払額	2,507	-
企業結合による増加	2,303	-
退職給付信託の一部返還	21,500	-
在外営業活動体の換算差額等	284	-
2025年12月31日現在	65,572	-

当社および連結子会社の国内制度および海外制度に係る資産運用方針は、従業員の将来の給付を確保するため許容されるリスクのもとで中長期的に総運用収益の最適化をはかるべく策定されております。

なお、当社グループの翌連結会計年度における確定給付制度への予想拠出額は1,702百万円であります。

制度資産の主な内訳

制度資産合計に対する主な分類ごとの内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)			当連結会計年度 (2025年12月31日)		
	活発な市場 における 公表市場価格 があるもの	活発な市場 における 公表市場価格 がないもの	合計	活発な市場 における 公表市場価格 があるもの	活発な市場 における 公表市場価格 がないもの	合計
現金及び預金	5,099	-	5,099	31,245	-	31,245
資本性金融商品						
国内株式	48,688	-	48,688	2,873	-	2,873
海外株式	3,886	-	3,886	4,478	-	4,478
負債性金融商品						
国内債券	-	-	-	-	1,093	1,093
海外債券	20,894	-	20,894	22,153	-	22,153
その他	1,939	1,643	3,582	2,257	1,473	3,730
合計	80,506	1,643	82,149	63,006	2,566	65,572

数理計算上の仮定に関する事項

数理計算上の仮定の主要なものは、以下のとおりであります。

(単位：%)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
割引率(加重平均)	3.7	4.2

数理計算上の仮定には上記以外に、予定昇給率、死亡率、予定退職率等が含まれております。

(注) 主要な基礎率の変化が各年度における確定給付制度債務に与える感応度は以下のとおりであります。これらの感応度のそれぞれは、その他の変数が一定との前提を置いておりますが、実際には独立して変化するとは限りません。なお、マイナスは確定給付制度債務の減少を、プラスは確定給付制度債務の増加を表しております。

(単位：百万円)

	基礎率の変化	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
割引率	0.5%の上昇	3,370	3,191
	0.5%の低下	3,571	3,275

(3) 確定拠出型年金制度

前連結会計年度及び当連結会計年度における確定拠出型年金制度の拠出額は、それぞれ2,079百万円、1,858百万円であります。

(4) 従業員給付費用

前連結会計年度及び当連結会計年度における連結損益計算書に含まれる従業員給付費用は、それぞれ219,302百万円、224,281百万円であります。

従業員給付費用は主に「売上原価」、「販売費及び一般管理費」に計上しております。

22. 資本及びその他の資本項目

(1) 資本金

授権株式数

前連結会計年度末及び当連結会計年度末における授権株式数は、普通株式400,000,000株であります。

発行済株式数(全額払込済み)

発行済株式数の増減は、以下のとおりであります。

	発行済株式数(千株)	資本金(百万円)	資本剰余金(百万円)
前連結会計年度期首 (2024年1月1日)	169,549	38,909	31,255
増減	-	-	131
前連結会計年度 (2024年12月31日)	169,549	38,909	31,386
増減	3,153	-	1,419
当連結会計年度 (2025年12月31日)	166,396	38,909	29,967

当社の発行する株式は、すべて権利内容に何ら限定のない無額面の普通株式であります。

(注) 当連結会計年度における発行済株式数の期中増減は、次のとおりであります。

取締役会決議による自己株式の消却による減少 3,153千株

(2) 自己株式

自己株式数の増減は、以下のとおりであります。

	株式数(千株)	金額(百万円)
前連結会計年度期首 (2024年1月1日)	8,801	11,587
増減	1,266	3,855
前連結会計年度(2024年12月31日)	10,067	15,441
増減	1,374	221
当連結会計年度(2025年12月31日)	8,693	15,662

(注) 前連結会計年度における株式数の期中増減は、次のとおりであります。

取締役会決議による自己株式の取得による増加 1,315千株

単元未満株式の買取りによる増加 1千株

譲渡制限付株式報酬としての自己株式処分による減少 50千株

当連結会計年度における株式数の期中増減は、次のとおりであります。

取締役会決議による自己株式の取得による増加 1,838千株

単元未満株式の買取りによる増加 2千株

取締役会決議による自己株式の消却による減少 3,153千株

譲渡制限付株式報酬としての自己株式処分による減少 61千株

(3) 資本剰余金及び利益剰余金

資本剰余金

日本における会社法では、資本性金融商品の発行に対しての払込み又は給付金額の2分の1以上を資本金に組み入れ、残りは資本準備金に組み入れることが規定されております。

また、資本準備金は株主総会の決議により、資本金に組み入れることができます。

利益剰余金

利益準備金とその他の剰余金により構成されております。

会社法では、利益剰余金の配当として支出する金額の10分の1を、資本準備金及び利益準備金の合計額が資本金の4分の1に達するまで、資本準備金又は利益準備金として積み立てることが規定されております。また、利益準備金は株主総会の決議により、取り崩すことができます。

23. 配当金

(1) 配当金支払額

前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2024年3月28日 定時株主総会	普通株式	8,037	50	2023年12月31日	2024年3月29日
2024年8月9日 取締役会	普通株式	7,397	46	2024年6月30日	2024年8月30日

当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2025年3月28日 定時株主総会	普通株式	8,293	52	2024年12月31日	2025年3月31日
2025年8月12日 取締役会	普通株式	7,570	48	2025年6月30日	2025年9月12日

(2) 普通株式に関する配当案

前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2025年3月28日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	8,293	52	2024年12月31日	2025年3月31日

当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)

決議予定	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2026年3月27日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	13,562	86	2025年12月31日	2026年3月30日

24. 販売費及び一般管理費

販売費及び一般管理費の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
従業員給付費用	89,270	94,396
運賃及び保管費	79,746	87,383
宣伝費及び拡販費	16,499	17,269
その他	69,857	81,180
合計	255,371	280,228

25. その他の収益

その他の収益の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
固定資産売却益	2,669	1,147
その他	3,412	3,465
合計	6,081	4,612

26. その他の費用

その他の費用の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
固定資産除売却損	809	1,589
減損損失 (注1)(注2)	11,449	3,160
その他 (注1)(注2)(注3)	9,046	13,539
合計	21,304	18,288

(注1) 前連結会計年度において、現在の市場環境とタイヤ業界の生産拠点の構造変化を勘案し、OHT事業の持続的な収益性と長期に渡る将来性を確保するため、Alliance Tire Company Limited (イスラエル) のハデラ工場及びYokohama TWS Czech Republic a.s. (チェコ共和国) のプラハ工場を閉鎖することを決定しました。その結果、ハデラ工場閉鎖に伴う減損損失1,501百万円及び関連損失4,201百万円、プラハ工場閉鎖に伴う減損損失9,935百万円及び関連損失749百万円を計上しております。なお、ハデラ工場の関連損失には、拠点の閉鎖に伴って発生する従業員に対する特別退職金の支払い等の直接的な支出3,036百万円について引当金を計上しております。

(注2) 当連結会計年度において、既に発表しているAlliance Tire Company Limited (イスラエル) のハデラ工場、Yokohama TWS Czech Republic a.s. (チェコ共和国) のプラハ工場の閉鎖に加えて、Yokohama TWS North America Inc. (米国) のスパルタンプルグ工場を閉鎖し、その生産能力を他拠点に統合することを決定しました。その結果、ハデラ工場閉鎖に伴う減損損失1,194百万円及び関連損失2,246百万円、プラハ工場閉鎖に伴う関連損失868百万円、スパルタンプルグ工場閉鎖に伴う減損損失1,818百万円及び関連損失1,330百万円を計上しております。

(注3) 当連結会計年度において、杭州新工場、メキシコ新工場立ち上げに伴う開業準備費用として1,251百万円、米国及びメキシコの自動車ホース配管の生産体制再編に伴う費用として823百万円を「その他」として計上しております。

27. 金融収益及び金融費用

(1) 金融収益の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
受取利息		
償却原価で測定する金融資産	2,767	3,313
受取配当金		
その他の包括利益を通じて 公正価値で測定する資本性金融資産	2,261	1,068
為替差益	-	12,261
デリバティブ評価益	461	-
その他	64	1,008
合計	5,554	17,649

(2) 金融費用の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
支払利息		
償却原価で測定する金融負債	5,415	8,535
為替差損	2,647	-
デリバティブ評価損	-	3,548
その他	1,290	1,281
合計	9,352	13,364

28. その他の包括利益

その他の包括利益に含まれている各内訳項目別の当期発生額及び純損益への組替調整額並びに税効果の影響は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
在外営業活動体の換算差額		
当期発生額	77,499	49,067
税効果考慮前	77,499	49,067
在外営業活動体の換算差額	77,499	49,067
キャッシュ・フロー・ヘッジ		
当期発生額	3,120	3,051
組替調整額	2,410	1,398
税効果考慮前	710	1,654
税効果額	180	417
キャッシュ・フロー・ヘッジ	530	1,237
その他の包括利益を通じて測定する 金融資産の公正価値の純変動		
当期発生額	18,997	6,318
税効果考慮前	18,997	6,318
税効果額	5,756	1,914
その他の包括利益を通じて測定する 金融資産の公正価値の純変動	13,241	4,403
確定給付制度の再測定		
当期発生額	10,862	3,034
税効果考慮前	10,862	3,034
税効果額	2,986	930
確定給付制度の再測定	7,876	2,104
合計		
当期発生額	110,478	55,368
組替調整額	2,410	1,398
税効果考慮前	108,068	56,765
税効果額	8,922	2,428
その他の包括利益	99,146	54,338

29. 1 株当たり利益

	前連結会計年度 (自 2024年 1月 1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年 1月 1日 至 2025年12月31日)
親会社の所有者に帰属する当期利益(百万円)	74,919	105,398

	前連結会計年度 (自 2024年 1月 1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年 1月 1日 至 2025年12月31日)
普通株式の加重平均株式数(千株)	160,150	157,651
株式報酬(千株)	426	475
希薄化後普通株式の加重平均株式数(千株)	160,575	158,126

	前連結会計年度 (自 2024年 1月 1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年 1月 1日 至 2025年12月31日)
基本的 1 株当たり当期利益(円)	467.81	668.55
希薄化後 1 株当たり当期利益(円)	466.57	666.55

30. 株式報酬

(1) 株式報酬制度の概要

当社グループは、当社の社外取締役を除く取締役及び執行役員（以下、「対象取締役等」という）が、株価変動のメリットとリスクを株主と共有し、株価上昇及び企業価値向上への貢献意欲を従来以上に高めることを目的として、譲渡制限付株式報酬制度を導入しております。本制度は、対象取締役等に対して譲渡制限付株式の割当てのために金銭報酬債権を報酬として支給し、当該金銭報酬債権の全部を現物出資の方法で給付するものです。

当社は、対象取締役等との間で譲渡制限付株式割当契約を締結し、譲渡制限付株式の割当てを受けた対象取締役等は、5年間から30年間までの間で当社取締役会が定める期間（以下、「譲渡制限期間」という）、当該譲渡制限付株式につき、第三者に対して譲渡、質権の設定、譲渡担保権の設定、生前贈与、遺贈その他一切の処分行為をすることができないものであります（以下、「譲渡制限」という）。譲渡制限は、譲渡制限付株式の割当てを受けた対象取締役等が、譲渡制限期間の開始日以降、最初に到来する当社の定時株主総会の開催日まで継続して、当社の取締役、執行役員又は使用人のいずれかの地位にあったことを条件として、本割当株式の全部につき、譲渡制限期間が満了した時点をもって解除されます。他方で、譲渡制限期間が満了した時点において、譲渡制限が解除されていない株式がある場合には、当社が無償で取得する仕組みとしております。

(2) 期中に付与された株式数と公正価値

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
付与日	2024年5月24日	2025年5月23日
付与数(株)	50,178	60,579
付与日の公正価値(円)	3,927	3,112

(注) 公正価値の測定方法は、取締役会決議日の前営業日の東京証券取引所における当社株式の終値を基礎として算定しております。

(3) 株式報酬に係る費用

株式報酬に係る費用は、前連結会計年度及び当連結会計年度においてそれぞれ184百万円及び192百万円であり、連結損益計算書の「販売費及び一般管理費」及び「売上原価」に含まれております。

31. 連結キャッシュ・フロー計算書の補足情報

財務活動に係る負債の変動

財務活動から生じた負債の変動は、以下のとおりであります。

前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)

(単位：百万円)

	2024年 1月1日 残高	キャッシュ・ フロー	非資金変動			2024年 12月31日 残高
			取得	新規リース	その他	
短期借入金	46,192	4,801	-	-	1,587	49,405
長期借入金	383,318	37,964	-	-	3,392	348,746
社債	39,847	-	-	-	23	39,870
リース負債	48,732	10,036	-	8,055	1,854	48,605
金融負債	518,089	43,198	-	8,055	3,681	486,626

当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)

(単位：百万円)

	2025年 1月1日 残高	キャッシュ・ フロー	非資金変動			2025年 12月31日 残高
			取得	新規リース	その他	
短期借入金	49,405	15,610	-	-	671	64,344
長期借入金	348,746	86,837	-	-	4,050	431,533
社債	39,870	-	-	-	23	39,893
リース負債	48,605	9,751	-	16,289	2,128	53,015
金融負債	486,626	92,697	-	16,289	6,827	588,785

32. 金融商品

(1) 資本管理

当社グループの資本管理は、当社グループの持続的な成長や企業価値増大を実現するため、本業発展に十分な資金を確保できるよう資本効率の向上を目指しております。

資本管理に関連する指標として、自己資本比率、ROE(親会社所有者帰属持分当期純利益率)を管理対象としております。

(2) 財務リスク管理の基本方針

当社グループは、事業活動を行う過程において財務上のリスクに晒されており、当該リスクを回避又は逓減するために、一定の方針に基づきリスク管理を行っております。

また、デリバティブ取引は実需の範囲で行うこととし、投機的な取引は行わない方針であります。

(3) 信用リスク

信用リスク管理及び信用リスクに対する最大エクスポージャー

当社グループが保有する売掛金や受取手形といった営業債権は顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに対しては、主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手先ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。連結子会社についても、当社の債権管理基準に準じて、同様の管理を行っております。

なお、当社グループでは特定の相手先に対する過度に集中した信用リスクはありません。

金融資産の信用リスクに対する最大エクスポージャーは、連結財政状態計算書に表示している金融資産の減損後の帳簿価額であります。

信用リスク管理実務

当社グループは、償却原価で測定する金融資産に分類した金融資産に対して貸倒引当金を計上しております。貸倒引当金の認識・測定にあたっては、金融資産に関する信用リスクの著しい増加の有無及び信用減損の有無によって金融資産をステージに分類しております。

ステージ1：信用リスクの著しい増加が見受けられない

ステージ2：信用リスクの著しい増加が見受けられるが、信用減損は見受けられない

ステージ3：信用リスクの著しい増加、信用減損がともに顕在化している

なお、信用リスクの著しい増加とは、当初認識時と比較して、期末日に債務不履行発生のリスクが著しく増大していることをいいます。当社グループにおいて、利息もしくは元本の支払いについて、原則として30日超の延滞の事実、債務者の属する業界の景気動向等を加味し、債務者の弁済能力が将来において変化する可能性を踏まえて、信用リスクの著しい増加の有無を判断しております。

また、当社グループにおいては、発行者又は債務者の重大な財政的困難、利息もしくは元本の支払について、延滞などが生じた場合に債務不履行が生じていると判断します。

債務不履行に該当した場合には信用減損の客観的な証拠が存在すると判断し、信用減損金融資産に分類します。

上記のステージに関わらず、法的に債権が消滅する場合等、金融資産の全部又は一部について回収できないと合理的に判断される場合には、当該金融資産の帳簿価額を直接償却します。

貸倒引当金の見積もりにあたっては、営業債権の予想信用損失を集合的ベースで測定しており、各社ごとに独自グループ又はサブグループを設定しております。

12か月及び全期間の予想信用損失の測定にあたっては、過去の事象、現在の状況及び将来の経済状況の予測についての、期末日において過大なコストや労力をかけずに利用可能な合理的で裏付け可能な情報を用いております。

なお、予想信用損失を集合的ベースで測定する際、過去における債務不履行の実績率を用いることがあります。

貸倒引当金の増減

貸倒引当金の増減は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)				当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)			
	営業債権及びその他の債権以外の金融商品に係る貸倒引当金(12ヶ月予想信用損失)	営業債権及びその他の債権に係る貸倒引当金(全期間予想信用損失)	信用リスクが著しく増大した金融商品に係る貸倒引当金(全期間予想信用損失)	信用減損している金融商品に係る貸倒引当金(全期間予想信用損失)	営業債権及びその他の債権以外の金融商品に係る貸倒引当金(12ヶ月予想信用損失)	営業債権及びその他の債権に係る貸倒引当金(全期間予想信用損失)	信用リスクが著しく増大した金融商品に係る貸倒引当金(全期間予想信用損失)	信用減損している金融商品に係る貸倒引当金(全期間予想信用損失)
期首残高	-	1,840	980	1,218	-	1,856	994	495
繰入(注)	-	159	49	2	-	182	48	2
直接償却による使用	-	221	-	0	-	54	-	0
戻入(注)	-	94	35	728	-	110	26	-
その他	-	171	-	3	-	132	-	59
期末残高	-	1,856	994	495	-	2,007	1,015	557

(注) 営業債権及びその他の債権に係る貸倒引当金(全期間予想信用損失)における繰入及び戻入は、主として販売及び回収により営業債権及びその他の債権が増加及び減少したことによるものであります。

貸倒引当金に関する金融商品の帳簿価額

貸倒引当金に関する金融商品の帳簿価額(貸倒引当金控除前)は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
営業債権及びその他の債権以外の金融商品 (12ヶ月予想信用損失)	8,211	8,628
営業債権及びその他の債権 (全期間予想信用損失)	283,874	336,996
信用リスクが著しく増大した金融商品 (全期間予想信用損失)	237	249
信用減損している金融商品 (全期間予想信用損失)	297	358

信用リスクの分析

営業債権及びその他の債権の年齢分析は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
期日経過30日以内	17,593	16,897
期日経過30日超60日以内	6,625	5,554
期日経過60日超90日以内	1,878	4,279
期日経過90日超	4,431	6,996
合計	30,527	33,727

営業債権及びその他の債権以外の貸倒引当金に関する金融商品においては、格付けに対する集中した信用リスクはありません。

(4)流動性リスク

流動性リスク管理

当社グループは、主に銀行借入や社債発行により資金の調達を行っております。そのため、当社グループは資金調達環境の悪化等により支払期日に債務の履行が困難になる流動性リスクに晒されております。

当社グループは、当社の各部署及び主要な連結子会社からの報告に基づき、財務部門が適時に資金計画を作成・更新するとともに、常に経営環境をモニターし、状況に応じた手元流動性を維持、確保することにより、流動性を管理しております。

金融負債(デリバティブ金融商品を含む)の期日別残高

金融負債(デリバティブ金融商品を含む)の期日別残高は、以下のとおりであります。

前連結会計年度(2024年12月31日)

(単位：百万円)

	帳簿価額	契約上の キャッ シュ・フ ロー	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
非デリバティブ金融負債								
営業債務及び その他の債務	108,517	108,517	108,517	-	-	-	-	-
社債及び借入金	438,021	455,227	104,607	60,370	43,096	38,305	55,432	153,417
リース負債	48,605	54,449	12,293	8,093	6,876	5,786	4,502	16,900
小計	595,143	618,194	225,417	68,462	49,972	44,091	59,935	170,317
デリバティブ金融負債	483	483	422	62	-	-	-	-
合計	595,627	618,677	225,838	68,524	49,972	44,091	59,935	170,317

当連結会計年度(2025年12月31日)

(単位：百万円)

	帳簿価額	契約上の キャッ シュ・フ ロー	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
非デリバティブ金融負債								
営業債務及び その他の債務	112,706	112,706	112,706	-	-	-	-	-
社債及び借入金	535,770	560,523	140,627	58,813	53,830	70,770	75,882	160,601
リース負債	53,015	58,838	13,935	9,918	8,315	6,751	4,246	15,673
小計	701,491	732,066	267,267	68,730	62,144	77,521	80,129	176,274
デリバティブ金融負債	1,666	1,666	1,492	171	3	-	-	-
合計	703,157	733,732	268,759	68,902	62,147	77,521	80,129	176,274

サプライヤー・ファイナンス契約

当社グループは、第三者金融機関とサプライヤー・ファイナンス契約を締結しており、各仕入先と締結した契約に基づいて、第三者金融機関に対して支払いを行っております。仕入先は、第三者金融機関より割引による早期支払を自らの裁量で受けることができます。

() サプライヤー・ファイナンス契約の一部である金融負債の帳簿価額は以下の通りであり、当該負債は連結財政状態計算書において「営業債務及びその他の債務」に含まれております。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
サプライヤー・ファイナンス契約の一部である金融負債	3,032	1,827

()()のうち、仕入先がファイナンス提供者から既に支払を受けている金融負債の帳簿価額は以下の通りであり、当該負債は連結財政状態計算書において「営業債務及びその他の債務」に含まれております。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
仕入先がファイナンス提供者から既に支払を受けている金融負債	3,007	1,510

()()の金融負債とサプライヤー・ファイナンス契約の一部ではない同等の営業債務の支払期日の範囲は主に以下の通りであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
サプライヤー・ファイナンス契約の一部である金融負債	請求日の80日から180日後	請求日の80日から186日後
サプライヤー・ファイナンス契約の一部ではない同等の営業債務	請求日の30日から60日後	請求日の50日から60日後

当社グループが締結しているサプライヤー・ファイナンス契約は、当該契約に参加していない他の仕入先と合意した通常の支払い条件と比較して支払期日の集中や大幅な延長をもたらすものではなく、サプライヤー・ファイナンス契約による重大な流動性リスクを抱えておりません

当連結会計年度において、サプライヤー・ファイナンス契約の対象となる金融負債の帳簿価額に、重要な非資金変動はありません。

(5)為替リスク

為替リスク管理

当社グループは、グローバルに事業を展開していることから外貨建の取引を行っており、これにより生じる外貨建債権債務は為替相場の変動リスクに晒されております。

当社グループの為替リスクは、主に米ドル、ユーロの為替相場の変動により発生します。当社及び一部の連結子会社は、外貨建ての営業債権債務について、通貨別月別に把握された為替変動リスクに対し、一部先物為替予約取引を利用してヘッジしております。

為替感応度分析

当社グループが各年度末において保有する金融商品において、他のすべての変数が一定であると仮定した上で、日本円が米ドル、ユーロに対して1%円高になった場合の税引前利益に与える影響は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	通貨	前連結会計年度	当連結会計年度
		(自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	(自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
税引前利益への影響額	米ドル	578	128
	ユーロ	24	300

(6)金利リスク

金利リスク管理

当社グループの有利子負債のうち、一部は変動金利によるものであり、金利変動リスクに晒されております。

そのため当社グループは、借入金に係る支払金利の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引を利用しております。

金利感応度分析

当社グループが各年度末において保有する変動金利の有利子負債において、他のすべての変数が一定であると仮定した上で、金利が100ベース・ポイント上昇した場合の税引前利益に与える影響は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	(自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
税引前利益への影響額	663	710

(7)株価変動リスク

株価変動リスク管理

当社グループは、業務上の関係を有する企業の上場株式を営業基盤の強化等の目的で保有しており、資本性金融商品の株価変動リスクに晒されております。

これらの資本性金融商品は、定期的に株価や発行体の財務状況を把握し、取引先との状況を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

株価変動感応度分析

当社グループが各年度末において保有する活発な市場のある資本性金融資産(株式)において、期末日の公表価格が一律1%下落した場合のその他の包括利益(税引前)に与える影響は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	(自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
その他の包括利益(税引前)への影響額	260	235

(8)金融商品の帳簿価額及び公正価値

金融商品の帳簿価額及び公正価値は、以下のとおりであります。

なお、社債及び長期借入金以外の金融資産及び金融負債の公正価値は帳簿価額と近似しているため、含めておりません。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)		当連結会計年度 (2025年12月31日)	
	帳簿価額	公正価値	帳簿価額	公正価値
長期借入金(注)	348,746	341,877	431,533	415,710
社債(注)	39,870	38,176	39,893	37,051

(注) 1年以内に返済又は償還予定の残高を含んでおります。

長期借入金及び社債の公正価値は、一定の期間ごとに区分した債務毎に、債務額を満期までの期間及び信用リスクを加味した利率により割り引いて算定する方法によっております。

長期借入金及び社債の公正価値ヒエラルキーはレベル3に分類しております。

(9)金融商品の公正価値ヒエラルキー

当初認識後に経常的に公正価値で測定する金融商品は、測定に使用したインプットの観察可能性及び重要性に応じて、公正価値ヒエラルキーを以下の3つのレベルに分類しております。

公正価値のヒエラルキーは以下のように定義しております。

レベル1：活発な市場における公表価格により測定した公正価値

レベル2：レベル1以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを使用して測定した公正価値

レベル3：観察可能でないインプットを使用して測定した公正価値

公正価値の測定に複数のインプットを使用している場合には、その公正価値の測定の全体において重要な最も低いレベルのインプットに基づいて公正価値のレベルを決定しております。

公正価値ヒエラルキーのレベル間の振替は、各四半期の期首時点で発生したものと認識しております。

なお、前連結会計年度及び当連結会計年度において、レベル1とレベル2及びレベル3の間における振替はありません。

経常に公正価値で測定している資産は、以下のとおりであります。

前連結会計年度(2024年12月31日)

(単位：百万円)

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
金融資産				
純損益を通じて公正価値で測定する 非デリバティブ金融資産				
その他	-	174	-	174
その他の包括利益を通じて公正価値で 測定する非デリバティブ金融資産				
株式	25,960	-	14,525	40,486
その他	-	-	605	605
デリバティブ資産	-	8,896	-	8,896
合計	25,960	9,070	15,130	50,160
金融負債				
デリバティブ負債	-	483	-	483
合計	-	483	-	483

当連結会計年度(2025年12月31日)

(単位：百万円)

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
金融資産				
純損益を通じて公正価値で測定する 非デリバティブ金融資産				
その他	-	175	-	175
その他の包括利益を通じて公正価値で 測定する非デリバティブ金融資産				
株式	23,534	-	15,544	39,078
その他	-	-	605	605
デリバティブ資産	-	4,125	-	4,125
合計	23,534	4,300	16,149	43,983
金融負債				
デリバティブ負債	-	1,666	-	1,666
合計	-	1,666	-	1,666

株式のうち活発な市場が存在する銘柄の公正価値は、市場価格に基づいて算定しているため、レベル1に分類しております。また、活発な市場が存在しない銘柄のうち、公正価値を重要な観察不能なインプットを用いて、類似会社比較法等で算定した金額で測定した銘柄についてレベル3に分類しております。

デリバティブ資産及びデリバティブ負債のうち為替予約、金利スワップ等の公正価値は、活発な市場で取引されていないため、入手可能な範囲で観察可能な市場データを最大限に利用し、企業独自の見積りには可能な限り依存しておりません。すべての重要なインプットが観察可能な場合には、レベル2に分類しております。

レベル3に分類した非デリバティブ金融資産の公正価値評価に際しては、類似会社比較法における株価純資産倍率を採用しております。

当社グループで定めた公正価値測定の評価方針及び手続に従い、財務部門が対象となる金融商品の評価方法を決定し、公正価値を測定しております。

また、公正価値の測定結果については適切な責任者が承認しております。

レベル3に分類された経常的に公正価値で測定する金融商品の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	金融資産
2024年1月1日 残高	17,179
利得及び損失合計	
その他の包括利益 (注)	751
購入	192
売却	2,403
その他	589
2024年12月31日 残高	15,130
利得及び損失合計	
その他の包括利益 (注)	1,033
購入	1
売却	3
その他	12
2025年12月31日 残高	16,149

(注) その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産に関するものであり、「その他の包括利益を通じて測定する金融資産の公正価値の純変動」に含まれております。

(10)デリバティブ取引及びヘッジ活動

キャッシュ・フロー・ヘッジ

当社グループは、キャッシュ・フロー・ヘッジとして主に、外貨建予定取引のキャッシュ・フローを固定化するための為替予約取引及びオプション取引、長期借入金に係る変動金利を固定化するための金利スワップ取引、原材料購入価格の変動を固定化するための商品先物取引を指定しております。

また、ヘッジの非有効部分及びヘッジの有効性評価から除外した部分に関して純損益として認識した金額は、前連結会計年度及び当連結会計年度においてそれぞれ重要性はありません。

また、前連結会計年度及び当連結会計年度において、ヘッジの非有効金額の算定の基礎として使用したヘッジ手段の公正価値の変動額に重要性はありません。

当社グループは、ヘッジの開始時点において、ヘッジ手段とヘッジ対象との関係、並びにこれらのヘッジ取引の実施についてのリスク管理目的及び戦略について文書化しております。また、ヘッジの開始時及びヘッジ期間中に、ヘッジ対象とヘッジ手段との間に経済的関係があること、信用リスクの影響が経済的関係から生じる価値変動に著しく優越するものではないこと、並びにヘッジ関係のヘッジ比率が実際にヘッジしているヘッジ対象及びヘッジ手段の数量から生じる比率と同じであることを満たすことを継続的に評価しております。

ヘッジ会計を適用しているヘッジ手段に係る公正価値

ヘッジ会計を適用しているヘッジ手段に係るヘッジ種類別の公正価値は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)		当連結会計年度 (2025年12月31日)	
	資産	負債	資産	負債
キャッシュ・フロー・ヘッジ				
金利スワップ取引	641	-	235	-
為替予約取引	1,723	438	731	1,487
商品先物取引	-	-	23	-
小計	2,364	438	988	1,487
合計	2,364	438	988	1,487

連結財政状態計算書上において、ヘッジ手段に係る資産の公正価値は「その他の金融資産(流動資産)」及び「その他の金融資産(非流動資産)」に含まれており、ヘッジ手段に係る負債の公正価値は「その他の金融負債(流動負債)」及び「その他の金融負債(非流動負債)」に含まれております。

ヘッジ会計を適用しているヘッジ手段の想定元本及び平均価格

ヘッジ会計を適用しているヘッジ手段に係る想定元本及び平均価格は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

リスク種類	ヘッジ種類	ヘッジ手段	想定元本及び平均価格	前連結会計年度 (2024年12月31日)		当連結会計年度 (2025年12月31日)	
				1年以内	1年超	1年以内	1年超
金利変動リスク	キャッシュ・フロー・ヘッジ	支払固定・受取変動金利スワップ	想定元本	11,389	11,389	11,272	-
為替変動リスク	キャッシュ・フロー・ヘッジ	売建ユーロ為替予約	想定元本 平均価格 (米ドル/ユーロ)	10,873 1.1	10,088 1.1	57,442 1.2	-
		売建ユーロ為替予約	想定元本 平均価格 (チェコクローネ/ユーロ)	3,381 25.3	-	-	-
		売建米ドル為替予約	想定元本 平均価格 (ニュージーランドドル/米ドル)	41 0.6	-	-	-
		売建ニュージーランドドル為替予約	想定元本 平均価格 (ニュージーランドドル/米ドル)	-	-	582 0.6	-
		売建ニュージーランドドル為替予約	想定元本 平均価格 (チェコクローネ/ニュージーランドドル)	31 14.1	-	-	-
		売建豪ドル為替予約	想定元本 平均価格 (米ドル/豪ドル)	176 0.6	-	1,090 0.7	-
		売建英ポンド為替予約	想定元本 平均価格 (ユーロ/英ポンド)	199 0.8	-	-	-
		売建メキシコペソ為替予約	想定元本 平均価格 (ユーロ/メキシコペソ)	682 21.6	-	-	-
		売建スウェーデンクローナ為替予約	想定元本 平均価格 (ユーロ/スウェーデンクローナ)	19 11.5	-	-	-

金利変動リスクにおける変動利息を固定化する金利スワップ取引の条件は、変動受取金利が米ドルSOFR(6ヶ月物)に対し、固定支払金利が 0.011%~0.010%となっております

(単位：百万円)

リスク種類	ヘッジ種類	ヘッジ手段	想定元本及び 平均価格	前連結会計年度 (2024年12月31日)		当連結会計年度 (2025年12月31日)	
				1年以内	1年超	1年以内	1年超
為替変動 リスク	キャッシュ・ フロー・ヘッ ジ	買建 インドルピー 為替予約	想定元本 平均価格 (米ドル/イン ドルピー)	18,864 85.2	6,185 88.2	22,129 90.0	- -
		買建 タイパーツ 為替予約	想定元本 平均価格 (円/タイ パーツ)	20,648 4.5	- -	21,868 4.9	- -
		買建 米ドル 為替予約	想定元本 平均価格 (ユーロ/米 ドル)	- -	- -	5,840 1.2	- -
		買建 ユーロ 為替予約	想定元本 平均価格 (ニュージ ランドドル/ ユーロ)	19 1.8	- -	- -	- -
		買建 米ドル 為替予約	想定元本 平均価格 (ニュージ ランドドル/ 米ドル)	94 0.6	- -	- -	- -
		買建 豪ドル 為替予約	想定元本 平均価格 (米ドル/豪ド ル)	55 0.6	- -	830 0.7	- -
		買建 チェコクローネ 為替予約	想定元本 平均価格 (ユーロ/チェ コクローネ)	301 25.2	- -	- -	- -
		買建 ユーロ 為替予約	想定元本 平均価格 (英ポンド/ ユーロ)	132 0.8	- -	- -	- -
		買建 米ドル 為替予約	想定元本 平均価格 (カナダドル/ 米ドル)	139 1.4	- -	- -	- -
		買建 米ドル 為替予約	想定元本 平均価格 (ニュージ ランドドル/ 米ドル)	14 1.7	- -	- -	- -
商品相場変 動リスク	キャッシュ・ フロー・ヘッ ジ	買建 天然ゴム 商品先物取引	想定元本 平均価格 (米ドル/ト ン)	- -	- -	503 1,692.0	- -

その他の資本の構成要素(ヘッジ手段の公正価値の変動)の増減は次のとおりです。

()金利変動リスク

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
期首	165	106
当期発生額	1,733	757
当期利益への組替調整額(注)	1,792	841
期末	106	21

(注) 税効果考慮前の金額は、前連結会計年度及び当連結会計年度でそれぞれ 1,761百万円、755百万円であり、連結損益計算書の「金融費用」に含まれています。

()為替変動リスク

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
期首	549	41
当期発生額	1,073	2,764
当期利益への組替調整額(注)	483	1,709
期末	41	1,014

(注) 税効果考慮前の金額は、前連結会計年度及び当連結会計年度でそれぞれ 646百万円、2,153百万円であり、連結損益計算書の「売上収益」及び「販売費及び一般管理費」に含まれています。

()商品相場変動リスク

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
期首	79	78
当期発生額	0	97
当期利益への組替調整額(注)	2	-
期末	78	19

(注) 税効果考慮前の金額は、前連結会計年度で 3百万円であり、連結損益計算書の「売上原価」に含まれています。

33. 企業結合

前連結会計年度(自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)

2023年5月2日に行われたTrelleborg Wheel Systems Holding ABの株式取得による企業結合について、前連結会計年度において暫定的な処理を行っていましたが、当連結会計年度において取得対価の配分が完了しました。

なお、前連結会計年度に実施した取得対価の配分から変更はありません。

当連結会計年度(自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)

(事業の譲受)

当社は、2024年7月22日付でThe Goodyear Tire & Rubber Company(以下「グッドイヤー」)と締結したグッドイヤーの鉱山・建設車両用タイヤ(OTR=オフザロードタイヤ)事業の譲受契約について、2025年2月4日付で本事業譲受を完了いたしました。

(1) 事業譲受の概要

譲受対象事業

グッドイヤーが運営する鉱山・建設車両用タイヤ等の製造・販売等を行うOTR事業
(株式取得対象会社を含む)

株式取得対象会社

- ・Goodyear Earthmover Pty Ltd(所在地:オーストラリア)
- ・日本ジャイアントタイヤ(株)(所在地:日本)

(注)買収完了に伴い、Goodyear Earthmover Pty LtdはYokohama Earthmover Pty Ltdへと商号を変更しております。

譲受対象資産

棚卸資産、タイヤ製造設備等

譲受者

横浜ゴム株式会社及び米国・オーストラリア・ルクセンブルク 他に所在する海外子会社

事業譲受日

2025年2月4日

事業譲受の主な理由

現在、当社グループは、2024年度から2026年度までの中期経営計画「Yokohama Transformation 2026(YX2026)」に取り組んでおります。

タイヤ生産財に関しては、安定的に高い収益が見込めるOHT事業の成長戦略の一つとして「Programmatic M&A」戦略を掲げており、本事業譲受によりこれまで課題となっていた鉱山・建設車両用タイヤを強化し、グローバル展開を加速させていきます。

(2) 事業譲受日現在における取得対価の公正価値

現金 141,707百万円(910百万USドル)

なお、事業譲受後における価格調整が完了しておらず、当連結会計年度末において取得の対価は確定しておりません。

(3) 事業譲受日における取得資産、引受負債の公正価値及びのれん

(単位：百万円)

	取得日 (2025年2月4日)	その後の修正	当連結会計年度末の 暫定的な公正価値
流動資産			
現金及び現金同等物	1,180	-	1,180
営業債権及びその他の債権	3,690	198	3,888
棚卸資産	22,157	2,787	19,370
その他	3,859	188	3,671
非流動資産			
有形固定資産	42,898	233	42,665
無形資産	56,968	3,874	60,842
繰延税金資産	4,523	218	4,304
その他	993	-	993
負債	10,338	801	11,139
取得資産及び引受負債(純額)	125,930	155	125,774
のれん	17,113	1,180	15,933

取得日において、発生したのれんの金額、企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の金額等については暫定的な会計処理を行ってまいりました。当連結会計年度末においても企業結合日における識別可能資産及び負債の特定を精査中であり、取得価額の配分が完了していないため、暫定的な会計処理を行っております。なお、当連結会計年度末において一部の資産及び負債の公正価値の見直しを行っております。

取得した債権については、回収不能と見積もられる重要なものではありません。無形資産の内容は、顧客関係資産24,863百万円、技術関連資産17,440百万円、商標権12,867百万円、契約関連資産5,606百万円、その他67百万円になります。のれんは、今後の事業展開によって期待される将来の超過収益力から発生したものであります。なお、認識したのれんは、主な部分は税務上損金算入可能と見込んでおります。

(4) 取得関連費用

当連結会計年度において、事業譲受に係る取得関連費用は1,731百万円を「販売費及び一般管理費」に計上しております。

(5) 当社グループの業績に与える影響

当該事業譲受に係る事業譲受日以降に生じた売上収益及び事業利益はそれぞれ78,079百万円及び9,188百万円であります。また、当該事業譲受が期首に行われたと仮定した場合の当連結会計年度の売上収益及び事業利益はそれぞれ85,177百万円、10,024百万円(プロ FORMA 情報)であります。

なお、当該プロ FORMA 情報は監査を受けておりません。

(6) 資金調達

当社は、本事業譲受に係る資金調達のため、以下のとおり借入を実行しております。

	シンジケートローン契約	JBICローン契約
借入総額	1,093億円	310億円
契約締結日	2025年6月17日	2025年6月30日
借入実行日	2025年6月19日	2025年6月30日
最終返済日	2035年5月末	
借入期間	10年	
借入金利	固定金利	
アレンジャー	株式会社みずほ銀行	-
参加金融機関	株式会社みずほ銀行、株式会社横浜銀行、 農林中央金庫、株式会社三菱UFJ銀行、 神奈川県信用農業協同組合連合会、 株式会社静岡銀行、三井住友信託銀行株式 会社、北海道信用農業協同組合連合会、 株式会社百五銀行、三重県信用農業協同組 合連合会、みずほ信託銀行株式会社、 茨城県信用農業協同組合連合会、株式会 社常陽銀行、株式会社三井住友銀行、 株式会社青森みちのく銀行、 株式会社八十二長野銀行、株式会社北陸銀 行、 株式会社武蔵野銀行、株式会社七十七銀行	株式会社国際協力銀行
担保提供資産の有無	無	

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2025年12月期決算以降、各年度の決算期の末日における連結財政状態計算書上の資本合計の金額を前年同
期比一定の水準以上に維持すること。
- ・2025年12月期決算以降、当社の連結損益計算書の営業損益が2期連続して損失とならないようにするこ
と。

34. 他の企業への関与

(1) 主要な子会社

主要な子会社は「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載のとおりであります。

(2) 重要な非支配株主持分がある子会社

当社グループには、重要な非支配持分がある子会社及び個々に重要性のある関連会社はありません。

35. 関連当事者

(1) 関連当事者間取引及び債権債務の残高

当社グループは、次の関連当事者との取引を行っています。

前連結会計年度(自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)

(単位:百万円)

種類	名称又は氏名	事業の内容又は職業	取引の内容	取引金額	未決済残高
役員	山石 昌孝	当社代表取締役会長 兼CEO	自己株式の処分(注)	50	-
	清宮 眞二	当社代表取締役社長 兼COO	自己株式の処分(注)	50	-
	Nitin Mantri	当社取締役専務執行役員 兼Co-CEO	自己株式の処分(注)	20	-
	宮本 知昭	当社取締役常務執行役員	自己株式の処分(注)	15	-
	中村 善州	当社取締役常務執行役員	自己株式の処分(注)	15	-
	結城 正博	当社取締役執行役員	自己株式の処分(注)	10	-

(注) 譲渡制限付株式報酬制度に伴う、自己株式の割当によるものであります。

自己株式の処分価格は、2024年4月25日(取締役会決議日2024年4月26日の前営業日)の東京証券取引所プライム市場における当社の普通株式の終値である3,927円に基づいて決定しております。

当連結会計年度(自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)

(単位:百万円)

種類	名称又は氏名	事業の内容又は職業	取引の内容	取引金額	未決済残高
役員	山石 昌孝	当社代表取締役会長 兼CEO	自己株式の処分(注)	50	-
	清宮 眞二	当社代表取締役社長 兼COO	自己株式の処分(注)	50	-
	Nitin Mantri	当社取締役専務執行役員 兼Co-CEO	自己株式の処分(注)	20	-
	宮本 知昭	当社取締役常務執行役員	自己株式の処分(注)	15	-
	結城 正博	当社取締役執行役員	自己株式の処分(注)	10	-

(注) 譲渡制限付株式報酬制度に伴う、自己株式の割当によるものであります。

自己株式の処分価格は、2025年4月25日(取締役会決議日2025年4月28日の前営業日)の東京証券取引所プライム市場における当社の普通株式の終値である3,112円に基づいて決定しております。

(2) 主要な経営幹部に対する報酬

当社グループの主要な経営幹部に対する報酬は、以下のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当連結会計年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
報酬及び賞与	1,099	878
業績連動報酬	75	95
株式報酬	150	149
合計	1,324	1,122

36. コミットメント

各年度における、決算日以降の資産の取得に係るコミットメントは、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2024年12月31日)	当連結会計年度 (2025年12月31日)
有形固定資産及び無形資産の取得契約	33,500	34,202

37. 偶発債務

当社及び当社グループ会社が事業展開する中で、日本及び海外諸地域において、政府機関等による調査を受けること、係争事案へ発展すること等があります。

当連結会計年度末においても、主に新興国において税制の解釈や適用をめぐる税務当局による税務調査の実施、更正通知の発行、また訴訟及び和解交渉等で未解決の事案がありますが、法律及び税務の専門家と相談の上で、こうした偶発債務が重要な結果を引き起こす可能性を予測し、将来の経済的便益を有する資源流出が生じる可能性が高く、かつ、その金額について信頼性をもって見積ることができる場合に債務を計上しております。

債務の計上は現時点において入手可能な情報に基づいておりますが、見積り特有の不確実性があるため、今後新たな事実が判明した場合等には追加の債務が発生する可能性があります。

38. 重要な後発事象

(米国バージニア州セーラム工場の閉鎖について)

当社は、バージニア州のセーラム工場を2026年3月18日(米国時間)をもって閉鎖することを決定しました。当初は3月から生産を縮小し、7月に閉鎖することを検討していましたが、労働組合との協議の結果、前倒しで閉鎖することに双方で合意しました。

1. セーラム工場の概要

- (1)名称 : Yokohama Tire Manufacturing Virginia, LLC
- (2)所在地 : 米国バージニア州セーラムインディアナストリート1500
- (3)操業時期 : 1968年
- (4)従業員数 : 575人(2025年12月末時点)
- (5)敷地面積 : 243,000m²
- (6)設備の内容 :

(百万円)

建物及び構築物	機械装置・運搬具	土地	その他	合計
1,814	3,858	210	942	6,824

2. 当該事象の連結損益に与える影響額

本件により、人員整理に伴う退職金や固定資産の減損損失等が見込まれるため、2026年12月期に約160億円をその他の費用として計上する予定です。金額は現時点の見積額であり変動する可能性があります。

(注) 上記見積額は、1米ドル=145円で計算しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における半期情報等

	第1四半期 連結累計期間	中間連結会計期間	第3四半期 連結累計期間	当連結会計年度
売上収益 (百万円)	275,118	579,201	877,189	1,234,959
税引前中間(四半期) (当期)利益 (百万円)	13,875	50,662	88,359	157,186
親会社の所有者に帰属 する中間(四半期)(当期) (百万円) 利益	8,525	35,535	66,124	105,398
基本的1株当たり中間(四 半期)(当期)利益 (円)	53.74	224.86	419.08	668.55

	第1四半期 連結会計期間	第2四半期 連結会計期間	第3四半期 連結会計期間	第4四半期 連結会計期間
基本的1株当たり 四半期利益 (円)	53.74	171.64	194.58	249.82

(注) 第1四半期連結累計期間及び第3四半期連結累計期間に係る財務情報に対するレビュー : 無

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2024年12月31日)	当事業年度 (2025年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	36,164	0
受取手形	3 244	3 -
電子記録債権	6,289	5,503
売掛金	176,678	208,847
商品及び製品	26,144	26,249
仕掛品	6,535	7,450
原材料及び貯蔵品	15,188	14,857
その他	42,740	81,761
流動資産合計	309,982	344,666
固定資産		
有形固定資産		
建物	33,874	33,370
構築物	2,725	2,992
機械及び装置	39,814	43,264
車両運搬具	472	479
工具、器具及び備品	4,943	5,539
土地	16,719	16,484
リース資産	470	232
建設仮勘定	10,001	7,404
有形固定資産合計	1 109,018	1 109,765
無形固定資産		
ソフトウェア	1,077	1,200
商標権	9,368	19,917
のれん	-	9,204
その他	12	16,653
無形固定資産合計	10,458	46,974
投資その他の資産		
投資有価証券	23,828	20,847
関係会社株式	589,126	606,144
関係会社出資金	45,092	68,141
長期貸付金	20,623	80,189
前払年金費用	1,947	-
繰延税金資産	-	12,973
その他	7,179	4,999
貸倒引当金	97	95
投資その他の資産合計	687,697	793,198
固定資産合計	807,173	949,937
資産合計	1,117,155	1,294,603

(単位：百万円)

	前事業年度 (2024年12月31日)	当事業年度 (2025年12月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	3 1,393	3 1,045
電子記録債務	4,372	3,031
買掛金	58,374	51,553
短期借入金	2 122,800	2 132,025
未払費用	21,989	23,513
未払法人税等	30,121	37,105
役員賞与引当金	206	277
関係会社整理損失引当金	532	532
その他	3 42,315	3 66,091
流動負債合計	282,102	315,173
固定負債		
社債	40,000	40,000
長期借入金	2 267,838	2 333,789
繰延税金負債	2,689	-
退職給付引当金	-	1,808
その他	2,163	2,875
固定負債合計	312,690	378,472
負債合計	594,792	693,645
純資産の部		
株主資本		
資本金	38,909	38,909
資本剰余金		
資本準備金	31,953	31,953
その他資本剰余金	408	0
資本剰余金合計	32,361	31,953
利益剰余金		
利益準備金	8,778	8,778
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	15,680	14,772
別途積立金	43,900	43,900
繰越利益剰余金	388,073	467,862
利益剰余金合計	456,431	535,312
自己株式	15,441	15,662
株主資本合計	512,260	590,512
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	10,103	10,446
評価・換算差額等合計	10,103	10,446
純資産合計	522,363	600,958
負債純資産合計	1,117,155	1,294,603

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当事業年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
売上高	458,857	507,443
売上原価	330,144	344,876
売上総利益	128,713	162,567
販売費及び一般管理費	¹ 67,148	¹ 75,414
営業利益	61,565	87,153
営業外収益		
デリバティブ評価益	390	-
受取利息及び配当金	43,814	34,061
為替差益	1,542	8,863
その他	1,745	1,778
営業外収益合計	47,491	44,701
営業外費用		
デリバティブ評価損	-	3,167
支払利息	4,092	5,817
その他	1,108	1,710
営業外費用合計	5,199	10,695
経常利益	103,857	121,160
特別利益		
固定資産売却益	2,541	226
投資有価証券売却益	60,697	4,630
退職給付信託返還益	-	² 14,048
特別利益合計	63,238	18,903
特別損失		
固定資産除売却損	245	785
出資の払戻による損失	-	³ 10,093
特別損失合計	245	10,878
税引前当期純利益	166,850	129,185
法人税、住民税及び事業税	42,765	42,131
法人税等調整額	1,378	12,880
法人税等合計	41,387	29,251
当期純利益	125,462	99,934

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金			利益剰余金
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金
当期首残高	38,909	31,953	278	32,230	8,778
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の積立					
固定資産圧縮積立金の取崩					
剰余金の配当					
当期純利益					
自己株式の取得					
自己株式の処分			131	131	
自己株式の消却					
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	-	131	131	-
当期末残高	38,909	31,953	408	32,361	8,778

	株主資本					
	利益剰余金					自己株式
	その他利益剰余金				利益剰余金合計	
	配当引当積立金	固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	-	15,641	43,900	278,083	346,403	11,587
当期変動額						
固定資産圧縮積立金の積立		1,192		1,192	-	
固定資産圧縮積立金の取崩		1,154		1,154	-	
剰余金の配当				15,434	15,434	
当期純利益				125,462	125,462	
自己株式の取得						3,921
自己株式の処分						66
自己株式の消却						
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)						
当期変動額合計	-	39	-	109,990	110,028	3,855
当期末残高	-	15,680	43,900	388,073	456,431	15,441

	株主資本	評価・換算差額等			純資産合計
	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等合計	
当期首残高	405,956	39,887	-	39,887	445,843
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の積立	-				-
固定資産圧縮積立金の取崩	-				-
剰余金の配当	15,434				15,434
当期純利益	125,462				125,462
自己株式の取得	3,921				3,921
自己株式の処分	197				197
自己株式の消却	-				-
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)		29,784	-	29,784	29,784
当期変動額合計	106,304	29,784	-	29,784	76,520
当期末残高	512,260	10,103	-	10,103	522,363

当事業年度(自 2025年 1月 1日 至 2025年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金			利益剰余金
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金
当期首残高	38,909	31,953	408	32,361	8,778
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の積立					
固定資産圧縮積立金の取崩					
剰余金の配当					
当期純利益					
自己株式の取得					
自己株式の処分			79	79	
自己株式の消却			488	488	
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			0	0	
当期変動額合計	-	-	408	408	-
当期末残高	38,909	31,953	0	31,953	8,778

	株主資本					
	利益剰余金					自己株式
	その他利益剰余金				利益剰余金合計	
	配当引当積立金	固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	-	15,680	43,900	388,073	456,431	15,441
当期変動額						
固定資産圧縮積立金の積立		174		174	-	
固定資産圧縮積立金の取崩		1,082		1,082	-	
剰余金の配当				15,863	15,863	
当期純利益				99,934	99,934	
自己株式の取得						6,008
自己株式の処分						109
自己株式の消却				5,190	5,190	5,678
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)						0
当期変動額合計	-	908	-	79,790	78,881	221
当期末残高	-	14,772	43,900	467,862	535,312	15,662

	株主資本	評価・換算差額等			純資産合計
	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等合計	
当期首残高	512,260	10,103	-	10,103	522,363
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の積立	-				-
固定資産圧縮積立金の取崩	-				-
剰余金の配当	15,863				15,863
当期純利益	99,934				99,934
自己株式の取得	6,008				6,008
自己株式の処分	189				189
自己株式の消却	-				-
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	0	343	-	343	343
当期変動額合計	78,252	343	-	343	78,595
当期末残高	590,512	10,446	-	10,446	600,958

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

(2) その他有価証券

(イ) 市場価格のない株式等以外のもの

時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定しております。)

(ロ) 市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

2 デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法

3 棚卸資産の評価基準及び評価方法

移動平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定しております。)

4 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 5年～50年

機械及び装置、

車両運搬具並びに

工具、器具及び備品 2年～10年

(2) 無形固定資産

定額法を採用しております。

自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

商標権はその効果の及び期間(8年～10年)に基づく定額法によっております。

のれんはその効果の及び期間(20年)に基づく定額法によっております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産の減価償却の方法は、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

5 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

受取手形、売掛金等の債権に対する貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 役員賞与引当金

役員賞与の支出に備えるため、当事業年度末における支給見込額に基づき計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

(イ) 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

(ロ) 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理しております。

(4) 関係会社整理損失引当金

関係会社の事業の整理に伴う損失に備えるため、関係会社に対する出資金額及び債権金額等を超えて当社が負担することとなる損失見込額を計上しております。

6 ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。ただし、金利スワップについては特例処理の要件を満たしているため、特例処理によっております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

(ヘッジ手段)	(ヘッジ対象)
金利スワップ	円貨建長期借入金、外貨建長期貸付金、外貨建長期借入金

(3) ヘッジ方針

内部規程に基づき、為替変動リスク及び金利変動リスクをヘッジしております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象とヘッジ手段の相場変動の累計を比較し、両者の変動額を基礎にしてヘッジの有効性を評価しております。ただし、特例処理による金利スワップに関してはヘッジ手段及びヘッジ対象に関する重要な条件が同一であり、ヘッジ開始時及びその後も継続して相場変動等を完全に相殺するものと想定できるため、ヘッジの有効性の判定は省略しております。

7 収益

当社では、以下の5ステップアプローチに基づき、顧客への財やサービスの移転との交換により、その権利を得ると見込む対価を反映した金額で収益を認識しております。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：別個の履行義務へ取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務の充足時に、収益を認識する。

当社は、タイヤ、MB及びその他の事業を有する製造業であり、タイヤ事業を中心に複数のビジネスを行っております。これらのビジネスでは、当社自身が顧客との契約主体としております。

タイヤ、MBいずれの事業においても、主要な顧客である自動車メーカー、小売業者、その他の事業者に対して計上される収益の履行義務は、当社の製品が顧客へ納品された時点で充足されるものであり、この時点で収益を計上しております。これは当社の製品が納品された時点で、顧客は自己の意思で製品を使用、売却することができるようになり、そこから生じる便益を得ることができることから、製品の支配が移転したと考えられるためです。

顧客への納品後、主として6ヶ月以内に支払いを受けているため、約束した対価の金額に重要な金融要素は含まれておりません。

当社は、タイヤ、MBいずれの事業においても、各顧客との取引開始時点で製品の取引価格を決定しております。取引には数ヵ月から1年までの一定期間の取引数量等に応じた割戻しや販売手数料を支給するものがあり、これらの変動対価の金額は契約条件等に基づき見積もり取引価格を調整しており、この調整に係る返金負債は「その他」に含まれております。

タイヤ、MBいずれの事業においても、製品保証は、販売時に存在していた欠陥を修理する以上のサービスを提供する等のサービス型の製品保証は提供していないため、製品保証を独立した履行義務として区別せず、取引価格の一部を製品保証に配分しておりません。

8 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異、未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(重要な会計上の見積り)

財務諸表の作成において、会計方針の適用並びに資産、負債、収益及び費用の報告額に影響を及ぼす判断、会計上の見積り及び仮定を用いております。見積り及び仮定は、過去の実績や状況に応じて合理的と考えられる様々な要因に基づく経営者の最善の判断に基づいております。実際の結果は、その性質上、これらの見積り及び仮定と異なる場合があります。

なお、これらの見積り及びその基礎となる仮定は継続して見直しております。これらの見積りの見直しによる影響は、見積りを見直した期間及びその影響を受ける将来の期間において認識されます。

現下のウクライナ・中東情勢に関しましては、未だ収束時期は不透明なものの、当社の経営環境に重大な影響はないものと仮定しております。

また、米国輸入関税につきましては、販売価格の見直しや販売数量増、その他コストダウンなどの内部改善による関税影響の吸収を見込んでおり、こちらも当社グループの経営環境に重大な影響はないものと仮定しております。

しかしながら、見積りに用いた上記の仮定は不確定要素が多く、経営環境への影響が変化した場合には、その見積り及び仮定に影響を及ぼす可能性があります。

財務諸表に重要な影響を与える可能性のある会計上の見積り及び仮定に関する情報は以下のとおりであります。

1. 棚卸資産の評価

棚卸資産は、取得原価で測定しておりますが、期末日における正味売却価額が取得原価より下落している場合には、当該正味売却価額で測定し、取得原価との差額を原則として売上原価に認識しております。

また、営業循環過程から外れて滞留する棚卸資産については、将来の需要や市場動向を反映して正味売却価額等を算定しております。市場環境が予測より悪化して正味売却価額が著しく下落した場合には、損失が発生する可能性があります。

当事業年度の財務諸表に計上した棚卸資産の金額は48,555百万円です。

2. 固定資産の減損

当社は、有形固定資産及び無形固定資産のうち期末日現在で減損している可能性を示す兆候がある資産または資産グループについて、当該資産または資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回る場合には、帳簿価額を回収可能価額まで減損し減損損失を計上しております。

減損損失の認識及び測定にあたり、将来のキャッシュ・フロー、割引率等について仮定を設定しております。これらの仮定については、経営者の最善の見積りと判断により決定しておりますが、将来の不確実な経済条件の変動等の結果によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

当事業年度の財務諸表に計上した有形固定資産及び無形固定資産の金額はそれぞれ109,765百万円、46,974百万円であり、減損損失の計上はございません。

3. 偶発債務

偶発事象は、報告日におけるすべての利用可能な証拠を勘案し、その発生可能性及び金額的影響を考慮した上で、将来の事業に重要な影響を及ぼしうる項目がある場合には開示しております。

4. 繰延税金資産の回収可能性

繰延税金資産は、将来減算一時差異等を使用できる課税所得が生じる可能性が高い範囲内で認識しております。

課税所得が生じる可能性の判断においては、事業計画に基づき課税所得の発生時期及び金額を見積っております。

このような見積りは、経営者による最善の見積りにより行っていますが、将来の不確実な経済条件の変動等の結果によって実際の結果と異なる可能性があります。

当事業年度の財務諸表に計上した繰延税金資産の金額は12,973百万円です。(相殺前の繰延税金資産23,406百万円、相殺前の繰延税金負債10,433百万円)

5. 関係会社への投融資評価

市場価格のない関係会社株式及び関係会社出資金の減損処理の要否は、取得価額と実質価額を比較することにより判定されており、実質価額が著しく低下した場合には、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられる場合を除いて減損処理を行っております。なお、当事業年度につきましては、減損損失の認識は不要と判断しております。

また、関係会社貸付金について、融資先の支払い能力を総合的に勘案し、回収不能と見込まれる金額について貸倒引当金を計上しております。市場価格のない関係会社株式及び関係会社出資金の実質価額並びに関係会社貸付金の回収可

能性の判定にあたり、関係会社の将来利益計画に基づいて算定しておりますが、将来の不確実な経済条件の変動等により将来計画等の見直しが必要となった場合、翌事業年度の財務諸表において、関係会社株式及び関係会社出資金の減損処理及び関係会社貸付金に対する貸倒引当金の計上による損失が発生する可能性があります。

当事業年度の財務諸表に計上した関係会社短期貸付金及び関係会社長期貸付金の金額はそれぞれ57,651百万円、80,183百万円です。

(表示方法の変更)

(貸借対照表関係)

前事業年度において「受取手形」に含めていた「電子記録債権」は、当事業年度の受取手形の残高が無いため、当事業年度より電子記録債権として表示しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「受取手形」に表示していた6,533百万円は、「受取手形」244百万円、「電子記録債権」6,289百万円として組み替えております。

(未適用の会計基準)

リースに関する会計基準等

- ・「リースに関する会計基準」(企業会計基準第34号 2024年9月13日 企業会計基準委員会)
- ・「リースに関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第33号 2024年9月13日 企業会計基準委員会)等

1. 概要

企業会計基準委員会において、日本基準を国際的に整合性のあるものとする取組みの一環として、借手の全てのリースについて資産及び負債を認識するリースに関する会計基準の開発に向けて、国際的な会計基準を踏まえた検討が行われ、基本的な方針として、IFRS第16号の単一の会計処理モデルを基礎とするものの、IFRS第16号の全ての定めを採り入れるのではなく、主要な定めのみを採り入れることにより、簡素で利便性が高く、かつ、IFRS第16号の定めを個別財務諸表に用いても、基本的に修正が不要となることを目指したリース会計基準等が公表されました。

借手の会計処理として、借手のリースの費用配分の方法については、IFRS第16号と同様に、リースがファイナンス・リースであるかオペレーティング・リースであるかにかかわらず、全てのリースについて使用権資産に係る減価償却費及びリース負債に係る利息相当額を計上する単一の会計処理モデルが適用されます。

2. 適用予定日

2028年12月期の期首から適用予定です。

3. 当該会計基準等の適用による影響

「リースに関する会計基準」等の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(会計方針の変更)

「法人税、住民税及び事業税等に関する会計基準」等の適用

「法人税、住民税及び事業税等に関する会計基準」(企業会計基準第27号 2022年10月28日。以下「2022年改正会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用しております。

法人税等の計上区分(その他の包括利益に対する課税)に関する改正については、2022年改正会計基準第20-3項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っております。なお、当該会計方針の変更による財務諸表への影響はありません。

(貸借対照表関係)

注(1)

1 圧縮記帳額

有形固定資産の取得価額から控除されている圧縮記帳額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2024年12月31日)	当事業年度 (2025年12月31日)
保険差益	80百万円	80百万円
補助金	97 "	97 "

2 財務制限条項

前事業年度末及び当事業年度末の借入金には、当社が2016年6月30日付で取引銀行と締結したシンジケートローン契約（契約総額720百万USドル及び54,240百万円）によるものが含まれております。

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2016年12月期決算以降、各年度の決算期の末日における連結財政状態計算書上の資本合計の金額を前年同期比一定の水準以上に維持すること。
- ・2016年12月期決算以降、当社の連結損益計算書の営業損益が2期連続して損失とならないようにすること。

前事業年度末及び当事業年度末の借入金には、当社が2023年6月28日付で取引銀行と締結したシンジケートローン契約（契約総額214,700百万円）および2023年6月30日付で(株)国際協力銀行と締結したローン契約（契約総額100,000百万円）によるものが含まれております。

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2023年12月期決算以降、各年度の決算期の末日における連結財政状態計算書上の資本合計の金額を前年同期比一定の水準以上に維持すること。
- ・2023年12月期決算以降、当社の連結損益計算書の営業損益が2期連続して損失とならないようにすること。

当連結会計年度末の借入金には、当社が2025年6月17日付で取引銀行によるシンジケートローン契約（契約総額109,275百万円）および2025年6月30日付で(株)国際協力銀行とのローン契約（契約総額31,000百万円）によるものが含まれております。

この契約には、以下の財務制限条項が付されております。

- ・2025年12月期決算以降、各年度の決算期の末日における連結財政状態計算書上の資本合計の金額を前年同期比一定の水準以上に維持すること。
- ・2025年12月期決算以降、当社の連結損益計算書の営業損益が2期連続して損失とならないようにすること。

3 期末日満期手形の会計処理については、手形満期日をもって決済処理しております。

なお、当期の末日は金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が期末残高より除かれております。

	前事業年度 (2024年12月31日)	当事業年度 (2025年12月31日)
受取手形	56百万円	7百万円
支払手形	346 "	237 "
設備関係支払手形	51 "	32 "

注(2) 債務保証

関係会社の金融機関からの借入等に対し、債務保証を行っております。

	前事業年度 (2024年12月31日)		当事業年度 (2025年12月31日)
ATC Tires AP Private Ltd.	33,060百万円	ATC Tires AP Private Ltd.	31,313百万円
Yokohama TWS Czech Republic a.s.	4,071 "	Yokohama TWS Czech Republic a.s.	2,040 "
Yokohama Corporation of North America	- "	Yokohama Corporation of North America	4,853 "
Alliance Tire Europe B.V.	- "	Alliance Tire Europe B.V.	1,843 "
PT.Yokohama Industrial Products Manufacturing Indonesia	1,234 "	PT.Yokohama Industrial Products Manufacturing Indonesia	1,096 "
Yokohama (Suisse) S.A.	- "	Yokohama (Suisse) S.A.	298 "
Yokohama TWS Lanka (Private) Limited	1,078 "	Yokohama TWS Lanka (Private) Limited	207 "
Yokohama TWS S.p.A.	554 "	Yokohama TWS S.p.A.	- "
Yokohama TWS Serbia doo	207 "	Yokohama TWS Serbia doo	272 "
Yokohama TWS Tyres Lanka (Private) Limited	53 "	Yokohama TWS Tyres Lanka (Private) Limited	- "
Yokohama India Private Limited	74 "	Yokohama India Private Limited	25 "
Yokohama TWS Australia Pty Ltd	31 "	Yokohama TWS Australia Pty Ltd	33 "
Yokohama TWS LK (Private) Limited	29 "	Yokohama TWS LK (Private) Limited	9 "
Yokohama TWS Latvia LSEZ SIA	8 "	Yokohama TWS Latvia LSEZ SIA	- "
計	40,398百万円	計	41,989百万円

注(3) 関係会社に係る注記

区分掲記されたもの以外で各科目に含まれている関係会社に対するものは、下記のとおりであります。

	前事業年度 (2024年12月31日)	当事業年度 (2025年12月31日)
短期金銭債権	166,870百万円	241,794百万円
長期金銭債権	20,614 "	80,183 "
短期金銭債務	107,968 "	120,223 "

(損益計算書関係)

注(1)

- 1 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度83%、当事業年度81%であり、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度17%、当事業年度19%であります。主要な費目及び金額は下記のとおりであります。

	前事業年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当事業年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
販売手数料	152百万円	56百万円
荷造運送費	28,152 "	27,740 "
宣伝費	2,307 "	2,232 "
従業員給料手当	8,145 "	8,760 "
退職給付費用	88 "	314 "
減価償却費	1,901 "	4,593 "

2 退職給付信託返還益

当社は、将来の退職給付に備えることを目的として退職給付信託を設定しておりますが、退職給付債務に対して退職給付信託財産を含む年金資産が積立超過の状態にあり、今後もその状態が継続すると見込まれることから、退職給付信託の一部について返還を受けました。これに伴い未認識数理計算上の差異の一部を一括処理したことにより、退職給付信託返還益14,048百万円を特別利益に計上しています。

3 出資の払戻による損失

当社は、当社の連結子会社であるアライアンス・タイヤ合同会社から、タイヤブランドの商標権及び付随する一切の権利を出資の払戻により2025年6月に取得しました。グループ内で保有する商標権等無形資産の適切な管理を検討した結果、当社がこれを保有することが最も適切であると判断し、取引を実施しました。

当事業年度において、当社が受け入れた商標権の帳簿価額と、当社のアライアンス・タイヤ合同会社に対する持分との差額10,093百万円を出資の払戻による損失として特別損失に計上しております。

注(2) 関係会社との取引に係る注記

各科目に含まれている関係会社との取引に係るものは、下記のとおりであります。

	前事業年度 (自 2024年1月1日 至 2024年12月31日)	当事業年度 (自 2025年1月1日 至 2025年12月31日)
営業取引による取引高		
売上高	361,209百万円	403,686百万円
仕入高	144,343 "	154,779 "
販売費及び一般管理費	13,070 "	14,018 "
営業取引以外の取引高		
受取利息	2,484 "	5,311 "
受取配当金	39,331 "	27,880 "
受取賃貸料	459 "	462 "
支払利息	1,097 "	1,163 "
資産購入高	4,489 "	4,410 "

(有価証券関係)

前事業年度(2024年12月31日)

子会社株式、関連会社株式及び子会社出資金(貸借対照表計上額 子会社株式587,956百万円、関連会社株式1,170百万円、子会社出資金45,092百万円)は、市場価格のない株式等のため、時価を記載しておりません。

当事業年度(2025年12月31日)

子会社株式、関連会社株式及び子会社出資金(貸借対照表計上額 子会社株式604,974百万円、関連会社株式1,170百万円、子会社出資金68,141百万円)は、市場価格のない株式等のため、時価を記載しておりません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2024年12月31日)	当事業年度 (2025年12月31日)
繰延税金資産		
未払費用	2,473 百万円	1,583 百万円
退職給付引当金	5,868 "	1,048 "
退職給付信託運用収益・組入額	2,249 "	9,500 "
資産調整勘定	- "	3,532 "
商標権	- "	2,928 "
関係会社株式評価損	623 "	656 "
関係会社出資金評価損	2,889 "	2,974 "
その他	3,046 "	5,506 "
繰延税金資産小計	17,147 "	27,727 "
評価性引当額	4,013 "	4,322 "
繰延税金資産合計	13,134 "	23,406 "
繰延税金負債		
退職給付信託設定益	4,993 "	- "
退職給付信託設定株式受入差益	504 "	0 "
固定資産圧縮積立金	5,977 "	5,696 "
その他有価証券評価差額金	4,348 "	4,736 "
その他	0 "	0 "
繰延税金負債合計	15,824 "	10,433 "
繰延税金資産(負債)の純額	2,689 "	12,973 "

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別内訳

	前事業年度 (2024年12月31日)	当事業年度 (2025年12月31日)
法定実効税率	30.3 %	30.3 %
(調整)		
外国源泉税等	0.5 "	0.7 "
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.1 "	0.1 "
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	7.1 "	6.4 "
試験研究費の税額控除額	1.2 "	1.5 "
その他永久差異	1.7 "	- "
その他	0.5 "	0.6 "
税効果会計適用後の法人税等の負担率	24.8 "	22.6 "

3 法人税等の税率の変更による繰延税金資産及び繰延税金負債の金額の修正

当社は、主に法人税、住民税及び事業税を課されており、これらを基礎として計算した法定実効税率は前事業年度及び当事業年度ともに30.3%です。

「所得税法等の一部を改正する法律」(令和7年法律第13号)が2025年3月31日に国会で成立し、2026年4月1日以後開始する事業年度より「防衛特別法人税」の課税が行われることとなりました。これに伴い、2027年1月1日に開始する事業年度以降に解消が見込まれる一時差異等に係る繰延税金資産及び繰延税金負債については、法定実効税率を30.3%から31.2%に変更し計算しております。

この税率変更により、当事業年度の財務諸表に与える影響は軽微であります。

4 法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理

当社は、グループ通算制度を適用しております。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」(実務対応報告第42号 2021年8月12日)に従って、法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理並びに開示を行っております。

(企業結合等関係)

当社は、2024年7月22日付でThe Goodyear Tire & Rubber Company(以下「グッドイヤー」)と締結したグッドイヤーの鉱山・建設車両用タイヤ(OTR=オフザロードタイヤ)事業の譲受契約について、2025年2月4日付で本事業譲受を完了いたしました。

詳細につきましては、連結財務諸表「注記33. 企業結合」をご参照ください。

なお、当該事業譲受により、子会社株式8,171百万円、技術資産17,440百万円、商標権13,080百万円、のれん9,646百万円、関係会社短期貸付金28,053百万円、関係会社長期貸付金59,908百万円を計上しています。

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表「注記7. 収益」に同一の内容を記載しているので、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当する事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

区分	資産の種類	当期首 残高 (百万円)	当期 増加額 (百万円)	当期 減少額 (百万円)	当期 償却額 (百万円)	当期末 残高 (百万円)	減価償却 累計額 (百万円)
有形固定資産	建物	33,874	1,645	111	2,037	33,370	57,734
	構築物	2,725	596	22	307	2,992	11,801
	機械及び装置	39,814	12,103	120	8,533	43,264	242,043
	車両運搬具	472	224	3	215	479	4,085
	工具、器具及び備品	4,943	4,702	0	4,106	5,539	54,555
	土地	16,719	-	235	-	16,484	-
	リース資産	470	-	-	238	232	441
	建設仮勘定	10,001	17,214	19,811	-	7,404	-
	計	109,018	36,484	20,301	15,436	109,765	370,659
無形固定資産	ソフトウェア	1,077	492	-	368	1,200	-
	商標権	9,368	13,088	-	2,540	19,917	-
	のれん	-	9,646	-	442	9,204	-
	その他	12	17,440	-	799	16,653	-
		計	10,458	40,666	-	4,150	46,974

(注1) 記載金額は百万円未満を四捨五入して表示しております。

(注2) 当期増加額のうち主なものは、次のとおりであります。

建物	新城工場	633	百万円	
	平塚製造所	364	"	
	三重工場	258	"	
	三島工場	202	"	
機械装置	新城工場	製造設備	6,505	"
	三重工場	"	2,258	"
	平塚製造所	"	2,022	"
工具器具備品	新城工場	"	1,767	"
	三重工場	"	1,252	"
	三島工場	"	1,067	"
建設仮勘定	新城工場	製造設備等	6,547	"
	三重工場	"	4,225	"
	平塚製造所	"	3,777	"
	三島工場	"	2,987	"

(注3) 当期減少額のうち主なものは、次のとおりであります。

建物	三島工場	85	百万円	
	本社	49	"	
	平塚製造所	29	"	
機械装置	平塚製造所	製造設備	7	"
	新城工場	"	5	"
	三島工場	"	3	"
土地	本社	235	"	

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	97	0	2	95
役員賞与引当金	206	393	322	277
関係会社整理損失引当金	532	-	-	532

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当する事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	1月1日から12月31日まで
定時株主総会	3月中
基準日	12月31日
剰余金の配当の基準日	6月30日（中間配当）、12月31日（期末配当）
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	（特別口座） 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	（特別口座） 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	
買取・買増手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、東京都において発行する日本経済新聞に掲載して行う。 なお、電子公告は当社のホームページに記載しており、そのアドレスは次のとおりである。 https://www.y-yokohama.com
株主に対する特典	該当する事項はありません。

(注) 当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができません。

- ・会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- ・会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- ・株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
- ・株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第149期（自 2024年1月1日 至 2024年12月31日）2025年3月28日関東財務局長に提出。

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2025年3月28日関東財務局長に提出。

(3) 半期報告書及び確認書

第150期中（自 2025年1月1日 至 2025年6月30日）2025年8月12日関東財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書 2025年3月28日関東財務局長に提出。

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第2号の2（届出を要しない株券等の発行）の規定に基づく臨時報告書 2025年4月28日関東財務局長に提出。

(5) 訂正発行登録書（社債）及びその添付書類

2025年3月28日関東財務局長に提出。

2025年4月28日関東財務局長に提出。

(6) 自己株券買付状況報告書

2025年4月4日関東財務局長に提出。

2025年5月9日関東財務局長に提出。

2025年6月6日関東財務局長に提出。

2025年7月7日関東財務局長に提出。

2025年8月7日関東財務局長に提出。

2025年9月8日関東財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当する事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2026年3月25日

横浜ゴム株式会社
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 柴田 憲一

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 松本 雄一

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山本 正男

< 連結財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている横浜ゴム株式会社の2025年1月1日から2025年12月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結財政状態計算書、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結持分変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結財務諸表注記について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」第312条により規定された国際会計基準に準拠して、横浜ゴム株式会社及び連結子会社の2025年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

G-OTR事業の取得による企業結合	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社は、連結財務諸表注記「33. 企業結合」に記載のとおり、2025年2月4日付で、グッドイヤーが運営する鉱山・建設車両用タイヤ等の製造・販売等を行うOTR事業（以降、「当事業」とする。）を取得し、取得対価として現金141,707百万円を支払った。会社は、原則として取得日時点における識別可能な取得資産及び引受負債の公正価値を基礎として測定をした結果、識別可能な取得資産136,913百万円及びのれん15,933百万円の合計額は当連結会計年度末における資産合計の7.6%を占めており、引受負債11,139百万円は当連結会計年度末における負債及び資本合計の0.5%を占めている。会社は、当事業の取得に際して、外部の専門家を利用し当事業の将来の事業計画を前提として事業価値を評価し、取得対価を決定しており、当該取得対価には当事業の超過収益力が含まれている。加えて、会社は、外部の専門家を利用し、識別可能な取得資産及び引受負債に対して取得対価の配分の暫定的な会計処理を行い、取得対価が識別可能な取得資産及び引受負債に配分された純額を上回るため、その超過額をのれんとして認識している。企業結合取引は経常的に生じるものではなく、また、適用される会計処理も複雑となる。加えて、当事業の取得による識別可能な取得資産及び引受負債は会社の連結財務諸表において重要性があり、その公正価値の算定は慎重に検討することが必要である。以上から、当監査法人は、当事業取得に係る企業結合の会計処理を監査上の主要な検討事項と判断した。</p>	<p>当監査法人は、当事業に係る企業結合の会計処理について、主として以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当該取得に関する取引を理解するために、経営管理者に質問するとともに、取締役会資料及び契約書等の関連資料を閲覧した。 ・取得対価について、当該取得に関連する契約書の閲覧及び出金証憑との突合により、取得対価の正確性を検討した。また、経営者の利用した専門家による取得対価算定に用いられた算定方法とその前提条件等を評価し、取得対価の合理性を検討した。 ・経営者の利用した専門家による取得対価の配分における公正価値算定に用いられた算定方法とその前提条件等を評価するため、当監査法人のネットワーク・ファームの評価の専門家を関与させた。 ・取得対価の算定及び取得対価の配分における公正価値算定のために経営者の利用した専門家の適性及び能力、客観性に関して評価した。 ・取得日時点における識別可能な取得資産及び引受負債について、構成単位の監査人を関与させ、関連する証憑等との照合を実施した。また、構成単位の監査人が実施した監査手続について、監査手続及びその結論の理解、評価を実施した。 ・取得対価の算定及び取得対価の配分における公正価値算定の基礎とした将来の事業計画の策定について、事業計画と直近実績との比較を行い、経営者の見積りの精度を検討した。 ・暫定的な会計処理によるのれんが適切に算定されていることを確かめるため、取得対価と取得日時点の識別可能な取得資産及び引受負債との差額がのれんの計上額であることの正確性を検討した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、国際会計基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、経営者が清算若しくは事業停止の意図があるか、又はそれ以外に現実的な代替案がない場合を除いて、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、国際会計基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、国際会計基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見表明の基礎となる、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手するために、連結財務諸表の監査を計画し実施する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指揮、監督及び査閲に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、横浜ゴム株式会社の2025年12月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、横浜ゴム株式会社が2025年12月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査等委員会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することに

ある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手するために、内部統制の監査を計画し実施する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指揮、監督及び査閲に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

< 報酬関連情報 >

当監査法人及び当監査法人と同一のネットワークに属する者に対する、会社及び子会社の監査証明業務に基づく報酬及び非監査業務に基づく報酬の額は、「提出会社の状況」に含まれるコーポレート・ガバナンスの状況等(3)【監査の状況】に記載されている。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- 1 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
 - 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2026年3月25日

横浜ゴム株式会社
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 柴田 憲一

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 松本 雄一

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 山本 正男

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている横浜ゴム株式会社の2025年1月1日から2025年12月31日までの第150期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、横浜ゴム株式会社の2025年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

市場価格のない関係会社株式等の評価	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社は、当事業年度末の貸借対照表において、関係会社株式606,144百万円及び関係会社出資金68,141百万円を計上しており、資産合計の52.0%を占めている。</p> <p>有価証券関係注記に記載のとおり、関係会社株式のうち子会社株式604,974百万円、関連会社株式1,170百万円及び子会社出資金68,141百万円は市場価格のない株式及び出資金（以降、「市場価格のない関係会社株式等」とする。）である。</p> <p>重要な会計上の見積りに関する注記「5. 関係会社への投融資評価」に記載のとおり、市場価格のない関係会社株式等について、発行会社の財政状態の悪化により実質価額が著しく低下したときには、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられる場合を除き、減損処理することとしており、減損処理の要否を検討した結果、減損損失を認識していない。</p> <p>会社は、複数の国または地域に多数の関係会社を有しており、市場価格のない関係会社株式等の期末時点の評価に対して監査上の高度な判断が要求される。</p> <p>以上から、当監査法人は、市場価格のない関係会社株式等の評価を監査上の主要な検討事項と判断した。</p>	<p>当監査法人は、市場価格のない関係会社株式等の当事業年度末の評価を検討するにあたり、主として以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 市場価格のない関係会社株式等の評価に関する会計方針を閲覧し、会社の実質価額の算定プロセスや回復可能性の検討プロセスを理解した。 取締役会等の議事録及びその関連資料の閲覧により、業績見込情報等の関係会社の経営環境を理解し、財政状態の悪化の兆候を示唆する関係会社の有無を確かめた。 市場価格のない関係会社株式等の実質価額の著しい低下の有無に係る判定について、各関係会社の財務数値を基に再計算し、帳簿価額との比較に際して用いた実質価額の正確性を検討した。 会社が、市場価格のない関係会社株式等の実質価額が著しく低下したときに、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられると判断している場合の回復可能性の検討に関しては、検討に用いる将来事業計画と経営者により承認された事業計画との整合性の確認、利用可能な外部データとの整合性の確認、事業計画と実績との乖離の程度や乖離要因分析を実施することにより、事業計画が適切なものかどうか評価を行った。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査等委員会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切

な監査証拠を入手する。

- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査等委員会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 報酬関連情報 >

報酬関連情報は、連結財務諸表の監査報告書に記載されている。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- 1 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
 - 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。